

福岡市埋蔵文化財調査報告書第683集

# 西新町遺跡7

—西新町遺跡第10次調査報告書—

2001

福岡市教育委員会

# 福岡市

NISI JIN MACHI

## 西新町遺跡7



遺跡略号 9533

調査番号 NSJ-10

2001

福岡市教育委員会



(1) ST018 人尊出土狀況



(2) ST083 出土赤色顏料附着頭骨

## 序

玄界灘に面した福岡市は古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げた先進地帯でした。

そのため市内には数多くの歴史的遺産が残されており、それらを保護し子孫に伝えていくことは私どもの義務であります。しかし近年の著しい都市開発によってその一部が失われつつあることも事実です。福岡市教育委員会はこのように開発に伴ってやむを得ず失われていく遺跡については事前の発掘調査を行い、記録の保全に努めています。

本書は共同住宅建設に伴う早良区西新町遺跡の発掘調査について報告するものです。西新町遺跡周辺は福岡市西部の副都心として発展しており、開発が多く行われている場所のひとつであり、最近の福岡県教育委員会の調査では、弥生時代末から古墳時代初頭を中心として多くの遺構が出土しており、大陸との交流を示す重要な遺物も出土するなど注目を集めている遺跡のひとつでもあります。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで多くの方々のご御理解と御協力を賜りました事に対して心から謝意を表する次第であります。

2001年3月30日

福岡市教育委員会

教育長 生田 征生

## 例 言

1. 本書は1995年10月28日から1996年2月3日まで発掘調査を行った西新町遺跡群第10次調査の記録である。
2. 本書で使用した遺構実測図の作成は辻節子、屋山洋が行った。
3. 本書で使用した遺物実測図の作成は平川敬治と屋山が行った。
4. 本書で使用した遺構・遺物写真の撮影は屋山が行った。
5. 本書で使用した挿図の製図は屋山が行った。
6. 本書で使用した方位は磁北である。
7. 本遺跡で出土した人骨の取り上げ・復元・分析については九州大学大学院比較社会文化研究科基礎構造講座教授田中良之氏の協力を得、今回はその報告を掲載することができた。
8. 挿図中の遺物番号と図版中の遺物番号は一致する。
9. 本書に関わる図面、写真、遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管される。

調査番号	9533	遺跡略号	NSJ-10
調査地番	早良区西新5丁目641-3他	分布地番	No.72 (冠江)
開発面積	1190㎡	調査実施面積	462㎡
調査期間	95.10.28~96.02.03	事務審査番号	7-2-102

## 本文目次

I. はじめに	1
II. 遺跡の立地と環境	1
III. 調査の記録	4
IV. おわりに	55
附論	
1. 弥生時代の小型壙棺にみられる施文について(常松幹雄)	56
2. 西新町遺跡第10次調査出土人骨について(九州大学 田中良之)	57

## 挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図	2	第26図 壙棺遺物図13	
第2図 周辺調査地分布図	3	第27図 土器壘土墳墓実測図1	30
第3図 調査区位置図	3	第28図 土器壘土墳墓実測図2	31
第4図 遺構配置図	4	第29図 土器壘土墳墓遺物実測図1	32
第5図 壙棺実測図1	7	第30図 竪穴式住居実測図1	34
第6図 壙棺実測図2	8	第31図 竪穴式住居実測図2	36
第7図 壙棺実測図3	9	第32図 SC078遺物出土状況実測図	37
第8図 壙棺実測図4	10	第33図 竪穴式住居出土遺物実測図1	38
第9図 壙棺実測図5	11	第34図 竪穴式住居出土遺物実測図2	39
第10図 壙棺実測図6	12	第35図 竪穴式住居出土遺物実測図3	40
第11図 壙棺実測図7	13	第36図 竪穴式住居出土遺物実測図4	41
第12図 壙棺実測図8	14	第37図 竪穴式住居出土遺物実測図5	42
第13図 壙棺実測図9	15	第38図 竪穴式住居出土遺物実測図6	43
第14図 壙棺遺物実測図1	16	第39図 土坑実測図1	44
第15図 壙棺遺物実測図2	17	第40図 土坑実測図2	45
第16図 壙棺遺物実測図3	18	第41図 土坑実測図3	46
第17図 壙棺遺物実測図4	19	第42図 土坑出土遺物実測図1	47
第18図 壙棺遺物実測図5	20	第43図 土坑出土遺物実測図2	48
第19図 壙棺遺物実測図6	22	第44図 土坑実測図4	49
第20図 壙棺遺物実測図7	23	第45図 土坑実測図5	50
第21図 壙棺遺物実測図8	24	第46図 井戸実測図	52
第22図 壙棺遺物実測図9	25	第47図 井戸出土遺物実測図	53
第23図 壙棺遺物実測図10	26	第48図 藤崎遺跡1次調査出土の 小型壙棺にみられる施文	56
第24図 壙棺遺物実測図11	27		
第25図 壙棺遺物実測図12	28		

# I はじめに

## 1 調査に至る経過

今回の調査は平成7年6月13日、山本儀七郎氏より福岡市教育委員会に対し埋蔵文化財の事前審査願が提出された。当地区が埋蔵文化財包蔵地区である西新町遺跡内に位置することから、福岡市教育委員会では10月4日に文化財の有無のための試掘調査を行った。敷地西端に南北方向のトレンチを設定して掘り下げたところG L D120cmのところで暗茶褐色の包含層とその下の遺構を確認した。共同住宅建設工事により遺構が破壊されるため事前の発掘調査が必要であると判断し、申請者と埋蔵文化財課で協議を行った。また、申請地の西端部に関しては車の出入り口として使用し、建物を建てないということから申請地東側の462㎡を調査対象地とし、平成7年10月28日から翌平成8年2月3日まで発掘調査を行った。

## 2 調査の組織

調査委託：山本儀七郎

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

課長：(当時) 荒巻輝勝 (現) 山崎純男

第1係長：(当時) 横山邦雄 (現) 山口譲治

庶務：(当時) 中川昭則 (現) 宮川英彦

事前審査：山崎龍雄 池田祐司

調査担当：嵐山洋

作業員：池健助 井釜庸子 井本久美子 上野道郎 大徳アサ子 大徳栄子 大徳ヤス子  
栗木和子 小宮玄子 幸川幸子 坂口和子 坂口加代子 高木陽子 辻節子 東島直美  
永井ゆり子 永末京子 長谷川律子 牧之口豊子 三谷明子 吉村光子

資料整理：濱野年代 藤野洋子 山口初子 名取さつき

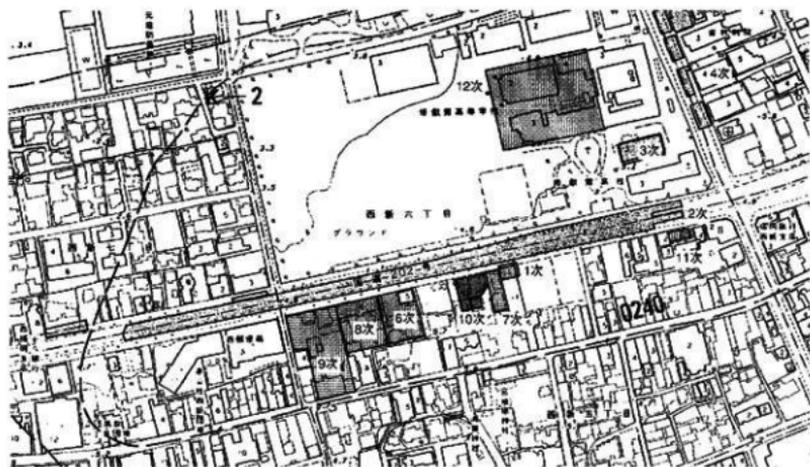
# II 立地と環境

博多湾の南岸には箱崎から馬出、吉塚、堅粕、博多中州、天神、荒戸、地行、西新、藤崎と続く箱崎砂層が発達しており、福岡市の主要な都市部のほとんどを占めている。これらの砂丘は縄文海進期から形成され始め、海側では中世まで砂丘の形成が続いている。西新町遺跡はこの砂丘上に位置する。砂丘は北側を博多湾、南側は金層川等が形成する後背湿地に挟まれ、東西800m、南北300mの長浜を形成する。砂丘は浅い南北の谷により東の西新遺跡と西の藤崎遺跡に分かれる。本調査区は砂丘の頂上から少し南側に下った斜面上に位置する。西新町遺跡ではこれまで 次の調査がおこなわれているが、それらの調査では弥生時代前期からの遺物がみられるものの遺構が確認できるのは弥生時代中期からで、砂丘の南西側に竪穴式住居、中央部には甕棺墓群が形成され始める。中期後半には甕棺墓はピークを迎えその後は規模が小さくなり細々と続く。弥生時代終末から古墳時代初頭の西新町式土器の時期になると遺跡の全面に広がるような大集落が形成される。とくに北側の福岡県立修葺館高校を中心とする地域では竪穴式住居の集ながみられる。これらからは飯蛸壺や石錘などの漁労具が多く出土し漁村的な性格もみられるものの、多くの鉄器や朝鮮半島系や畿内系等の外来土器が多く出土することや列島でもいち早い甕の受容などから大陸との交流の拠点であった様子も伺える。

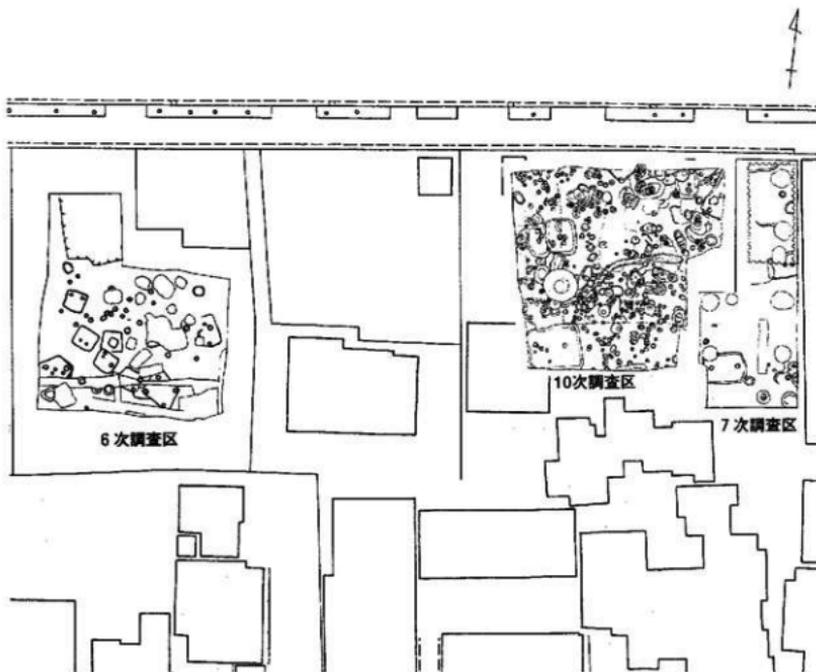


1. 西新町遺跡 2. 野芥遺跡 3. 有田遺跡 4. 次郎丸高石遺跡 5. 四箇遺跡群 6. 田村遺跡
7. 入部遺跡群 8. 免遺跡 9. 松木田遺跡 10. 有田七田前遺跡 11. 藤崎遺跡 12. 四箇船石
13. 拾六町平田遺跡 14. 橋本一丁田遺跡 15. 石丸・古川遺跡 16. 拾六町ツイジ遺跡 17. 古武遺跡群
18. 桂浜遺跡 19. 都地遺跡 20. 飯倉遺跡群 21. 長峰遺跡 22. 野方中原遺跡 23. 野方久保遺跡
24. 野方塚原遺跡 25. 押塚古墳 26. 樋渡古墳 27. 梅林古墳 28. 五島山古墳 29. 宮ノ前遺跡
30. ケエノ遺跡 31. 鳥越古墳群 32. 七隈古墳群 33. 倉瀬戸古墳群 34. 大谷古墳群 35. 山崎古墳群
36. 重留古墳群 37. 三郎丸古墳群 38. 金武古墳群 39. 羽根戸古墳群 40. 広石古墳群 41. 並間谷古墳群
42. 野方古墳群 43. 草場古墳群 44. 広石遺跡

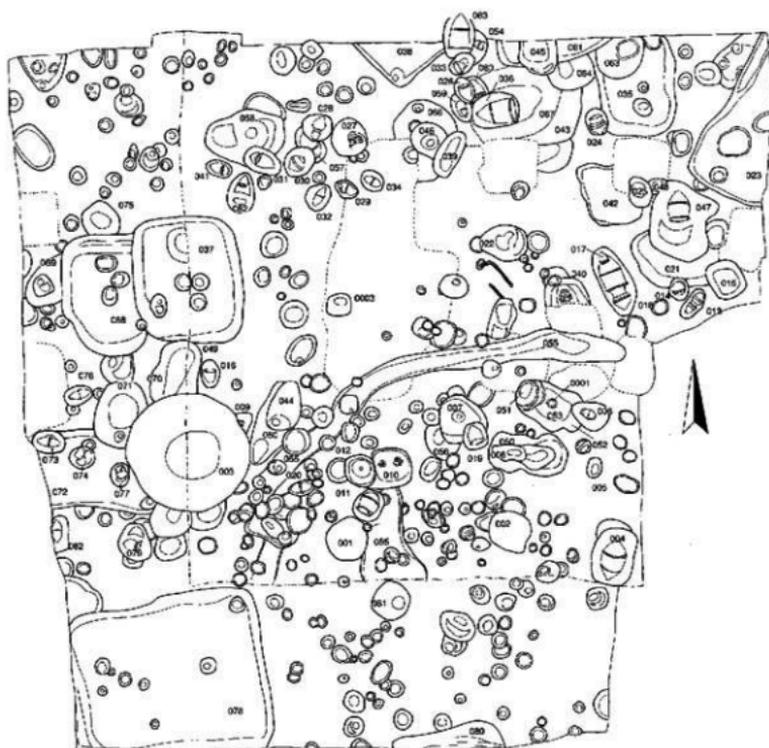
第1図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)



第2図 発掘調査区的位置と周辺調査地 (1/4,000)



第3図 西新町遺跡の6・7・10次調査区位置図 (縮尺1/600)



第4図 遺構配置図 (1/160)

### Ⅲ. 調査の記録

#### 1. 調査の概要

本調査区は東西に延びる砂丘が南側に緩やかに傾斜する斜面上に位置する。現状は近世以降の盛り土により南側が高くなっており、遺構面までの深さは北端で120cm、南端で290cmを測る。遺構面の標高は4.30m前後である。事前審査と原因者の協議の結果、表土を外に持ち出さずに場内で処理する事になったため、残土を反転して調査を行うことにした。まず10月30日に調査区対象区の北側から中央部までの表土剥ぎを行った。試掘調査では甕棺を確認できなかったが、調査着手直後に攪乱の清掃をしていたところ断面で甕棺を検出した。しかし土層断面を観察しても土埃掘り方が全く見えなかったのでピンボールによる分布調査を行ったところ、調査区ほぼ全体で甕棺を確認した。その後北側の調査が終わって12月25・26日に重機で南側と西側の表土剥ぎを行い、その後調査が完了した2月3日に埋め戻しを行った。途中1月13日に調査の経過が新聞に掲載された。

調査期間中に検出した遺構は甕棺、土壙墓、土坑、竪穴式住居、溝、井戸などである。このうち弥生時代中期以前の遺構は溝1条（S D055）、弥生時代中期の甕棺墓32基（S T004、008、009、011、013、016、017、018、019、020、024、026、028、029、030、031、032、033、034、040、041、047、048、054、060、062、067、073、076、079、082、083）、土壙蓋土壙墓6基（S R012、014、027、059、074、077）、土坑3基（S K007、057、058）、弥生時代終末～古墳時代初期の竪穴式住居7軒（S C023、037、038、061、068、078、080）、土坑13基（S K006、010、021、042、044、053、056、063、064、066、069、072、075）、古墳時代以降と思われる上坑9基（S K015、022、025、036、045、049、050、071、081）、近世以降の井戸3基（S E001、002、003）の計74基の遺構と多数の柱穴状遺構を検出した。これらのうち上坑は遺物が出土しなかったものが多い。甕棺に切られていることから弥生時代中期以前のものと思われるものや、住居跡と覆土が類似することから弥生時代終末から古墳時代と思われるもの以外は時期不明である。

## 2. 弥生時代の調査

甕棺 調査区の北側に多く分布する。2次調査で確認したC地区群甕棺とつながる。

S T 0 0 4（第5図） 調査区の南東側に検出した。墓壇の掘り方は確認できなかった。棺は主軸をN-14°-Wにとる複棺で埋置角度は36°を測る。甕棺内には砂が堆積していたが、底面から5～10cm浮いた状態で女性の四肢骨の一部が出土した（附論2参照）。出土遺物（第14図）。O O 1は上棺に使用した鉢である。口径67.5cm、器高4.4cmを測る。口縁は緩やかに外湾する。調整は外面が縦ハケ、内面はナデ調整。赤褐色を呈し、外面胴部中央に黒斑がみられる。黒斑の周囲のみ褐色は薄く黄褐色を呈す。胎土は白色砂を僅かに含む。焼成は良好である。O O 2は下棺に用いられた甕で口径71.1cm、器高約113cmを測る。体部は砲弾型で胴部が膨らみ気味である。口縁はわずかに胴部からやや内湾しながら立ち上がる。口縁部はT字型で端部は強いナデのため口唇状を呈す。成形は丁寧で歪み等はみられない。調整は内面がナデ調整で、口縁下に粗い斜め方向のハケ目を施す。全面に木の根の後が残り、不明瞭である。外面は口縁直下が横方向のナデと他は縦方向のナデで非常に丁寧である。胎土はやや粗めで2～3mmの小礫を多く含むが器表面では全くみられない。色調は淡黄褐色で内面に黒斑がみられる。下半は倉庫で他の遺跡に粉れ込んでしまい実測できなかった。

S T 0 0 8（第5図） 調査区の東端に検出した。墓壇の掘り方は不正円形を呈す。棺は主軸をN-86°-Wにとる複棺で埋置角度は37°を測る。出土遺物（第15図）O O 3は上棺である。小型の甕の胴部上半を打ち欠き蓋として使用。口径29.1cm、器高22.2cmを測る。調整は外面が縦方向のハケ、内面は指押さえによる成形後粗いハケを施し丁寧なナデ削している。色調は外面黄灰色で底部から胴部にかけて黒斑がみられる。胎土は白色砂を多く含むものの精良で焼成は良好である。O O 4は下棺である。口径25.6～30.6cm、器高32.1cmを測る。口縁はT字型を呈し口縁下に断面三角形の突帯が1条走る。調整は外面縦ハケで内面は丁寧なナデ。外面は口縁上面と底部を除いて黒色顔料を塗布する。内面は底部がわずかに黒く、顔料を塗布した可能性がある。胎土は白色砂を少し含む。

S T 0 0 9（第5図） 調査区の中央西寄り検出した。S E O 0 3に切られる。ほとんど掘乱れで削平されており、甕の底部のみ残存している。墓壇の掘り方は不明。棺は主軸をN-50°-Eにとり水平に埋置している。出土遺物（第15図）O O 5は片塗壺の底部である。上棺の可能性が高い。胴部下半のみ遺存している。現状で口径27.4cm、器高10.1cmを測る。調整は外面がミガキ、内面は指オサエ後ナデ。外面は底部以外に赤色顔料を塗布、内面は胴部半ばから上に赤色顔料の波ダレがみられる。

内面は暗褐色を呈す。胎上はやや粗く白色砂を多量に含む。焼成はやや軟質。

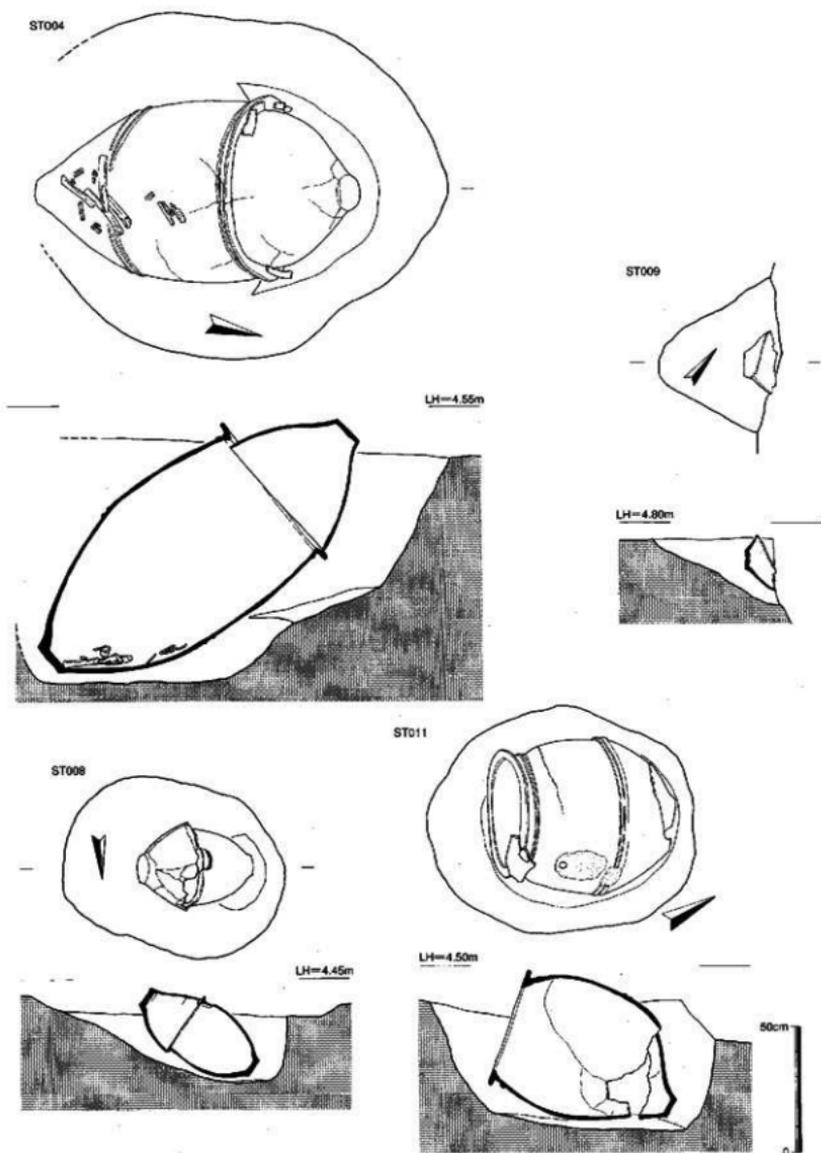
ST011 (第5図) 調査区の中央南寄りで検出した。墓壇の掘り方は確認できなかった。棺は主軸をN-28°-Eにとる単棺で埋置角度は19°を測る。出土遺物(第15図)O06は口径50cm、器高75cmを測る。器壁は胴部中央から口縁に向かって弧を描き内湾する。口縁はT字型で端部が下がる。端部は強いナデのため口唇状を呈す。突帯を口縁下に1条、胴部に2条巡らす。調整は内外面ともナデを施す。全体に暗褐色を呈し胴部中央に大きな黒斑を持つ。反対側に丸形の黒斑が2箇所みられる。

ST013 (第6図) 調査区の東端で検出した。墓壇の掘り方は不明である。棺は主軸をN-38°-Eにとる複棺で埋置角度は12°を測る。出土遺物(第15図)O07は上棺である。口径31.6cm、器高30.5cmを測る。体部は丸みを帯び胴部上半に最大径を持つ。器壁は内湾しながら立ち上がるがI線直下で緩やかに外湾する。突帯はI線下に低いM型が1条、胴部にM型2条を巡らす。調整は外面に横方向のヘラミガキ、内面にナデを施す。外面は底部を除く全面に赤色顔料を塗布する。内面はI線から胴部中央まで赤色顔料が飛び散っている。O08は下棺で口径36.5cm、器高51cmを測る。胴先状の口縁で端部は口唇状を呈す。胴部は球状を呈し最大胴径の上下に突帯を巡らす。調整は内外面ナデで外頸部にハケが一部みられる。外面に赤色顔料の痕跡が残る。焼成良好。

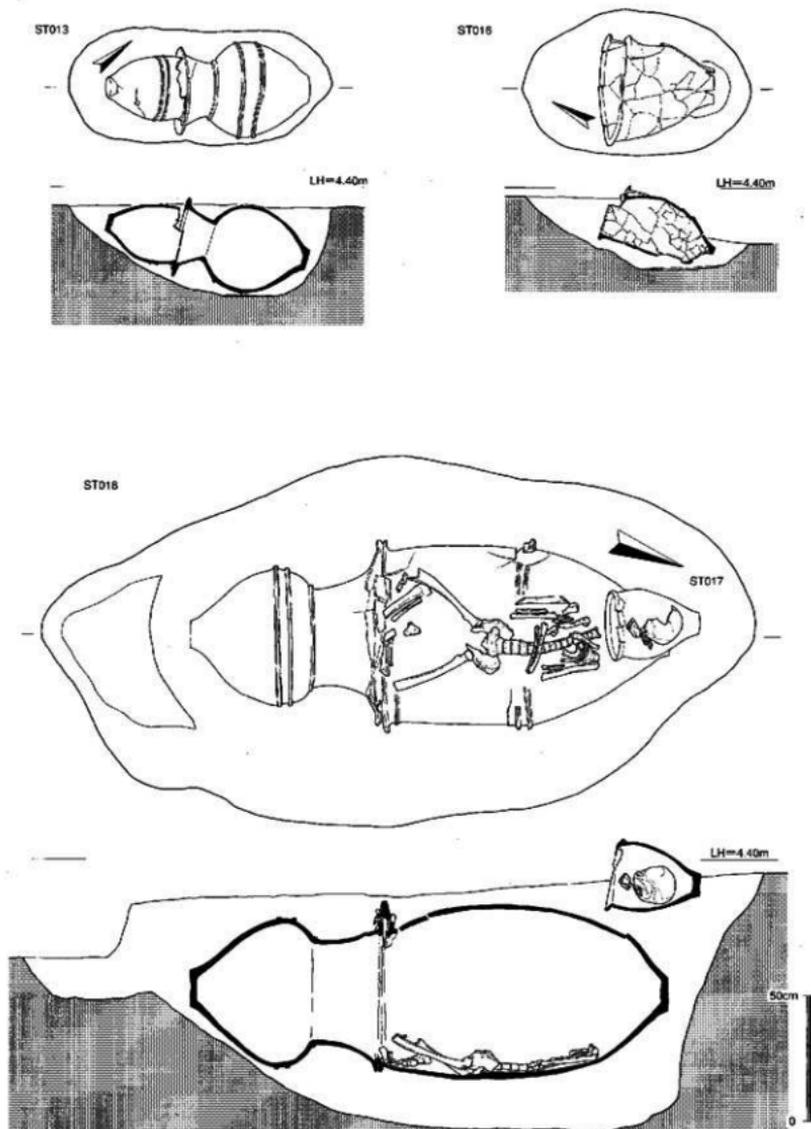
ST016 (第6図) 調査区の中央西寄りで検出した。墓壇の掘り方は楕円形を呈す。棺は主軸をN-30°-Wにとる単棺でやや起きあがり気味に埋置している。出土遺物(第17図)O12は口径32.4cm、器高39.9cmを測る。口縁はT字型でやや内湾気味を呈す。調整は外面が縦方向のハケ。色調は外面は外底部を除く全体に煤状の黒色顔料を塗布する。内面は底部を除く胴部下半に帯状に黒色顔料を塗布する。胎土は石英、長石を若干含む焼成は良好である。

ST017 (第6図) 調査区の東側で検出した。ST018と同一の墓壇内に埋置されていると思われる。単独の掘り方は確認できなかった。棺は主軸をN-24°-Wにとる単棺でほぼ水平に埋置している。中から成人男性の頭蓋骨が出土した。出土遺物(第16図)O09は頭蓋骨のみが埋置された小型甕である。口径28.8cm、器高33.1cmを測る。胴部は外側に張りやや丸みを帯びる。I線は外側に開き気味に立ち上がり「く」の字状を呈す。内側の稜は緩やかである。内面はナデ調整、外面は縦方向のハケ目を施す。赤褐色を呈し、細かな白色砂を含むが器表面では全くみられない。焼成は良好である。

ST018 (第6図) 調査区の東側で検出した。墓壇の掘り方は確認できなかった。棺は主軸をN-20°-Wにとる複棺でほぼ水平に埋置している。下甕から成人男性の頭蓋骨を除いた全身骨が出土した。出土遺物(第16図)O10は上棺である。大型の甕で口径73.3cm、器高80cmを測る。口縁は内側端部が立ち上がり「く」の字状を呈す。端部に縦方向の刻み目を施す。突帯は胴部にM字型1条、胴部にM字型2条を巡らす。胴部の2条には上下両端に斜め方向の刻み目が施される。成形は僅かに歪むものの調整と同様非常に丁寧な印象をうける。内外面ともナデ調整。胎土はやや粗めだが小礫はほとんど含まない。色調は淡黄褐色を呈す。焼成良好。O11は下棺である。I線約73cm、器高約110cmを測る。I線は幅7.5cmで中央が盛り上がり、内外両側に緩やかに下がる。I線下にコの字型の突帯が1条、胴部中央にコの字型突帯を2条貼り付ける。胴は砲弾型を呈するがやや丸みを帯びており、口縁下17cmから口縁にかけて緩やかにすばむ。調整は内面が横または斜め方向のナデ、外面が横方向のナデで一部斜め方向や弧状のナデを施す。全体に丁寧な調整である。胎土は精良で砂をほとんど含まない。色調は黄褐色で一部に黒いシミがみられる。黒斑は胴部上半に円状のものが2ヶ所、胴部下半から底部にかけて幅30cmでみられる。焼成は良好で今回の調査で出土した甕棺の中では成形・調整とも飛び抜けて丁寧である。口縁・胴部の突帯は調査時点で一部剥がれていたが、破片が墓



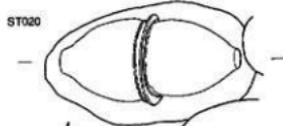
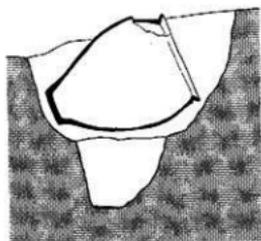
第5图 延柏尖测区1 (1/20)



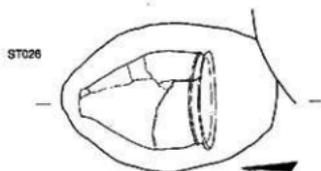
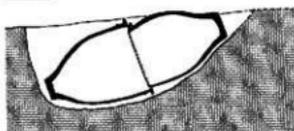
第6図 墓坑穴測図2 (1/20)



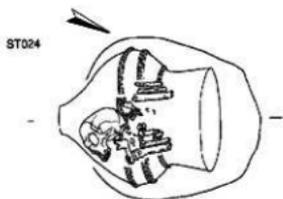
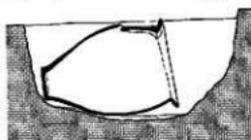
LH=4.40m



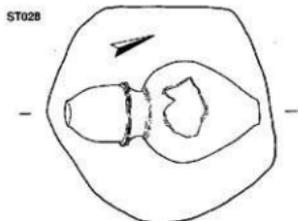
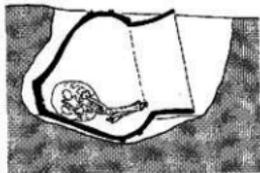
LH=4.40m



LH=3.70m



LH=4.30m

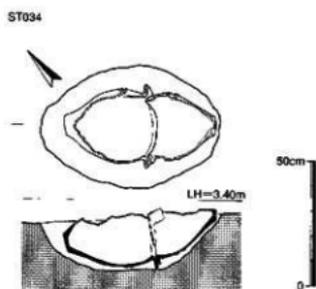
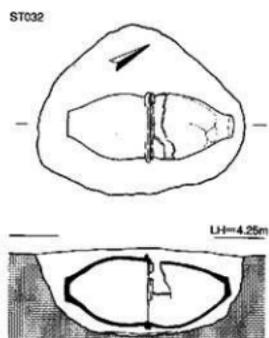
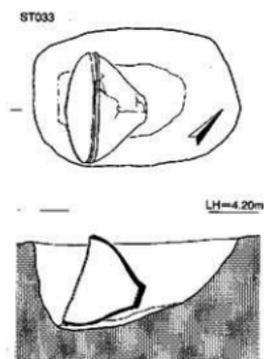
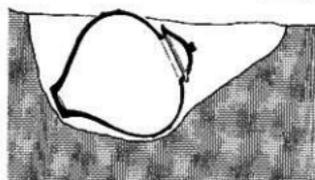
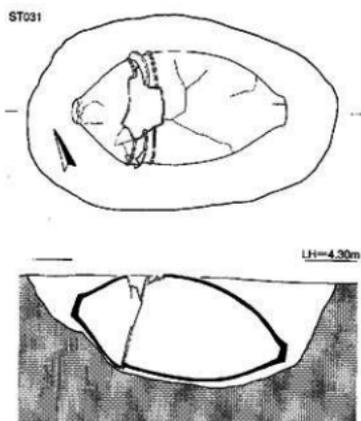
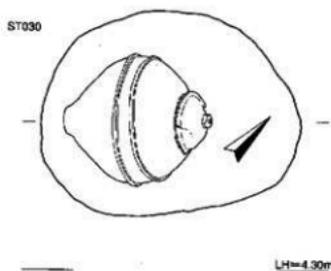
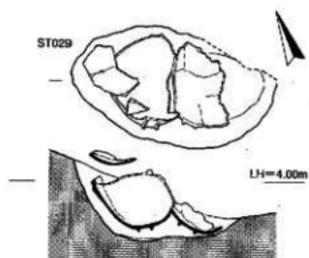


LH=4.30m



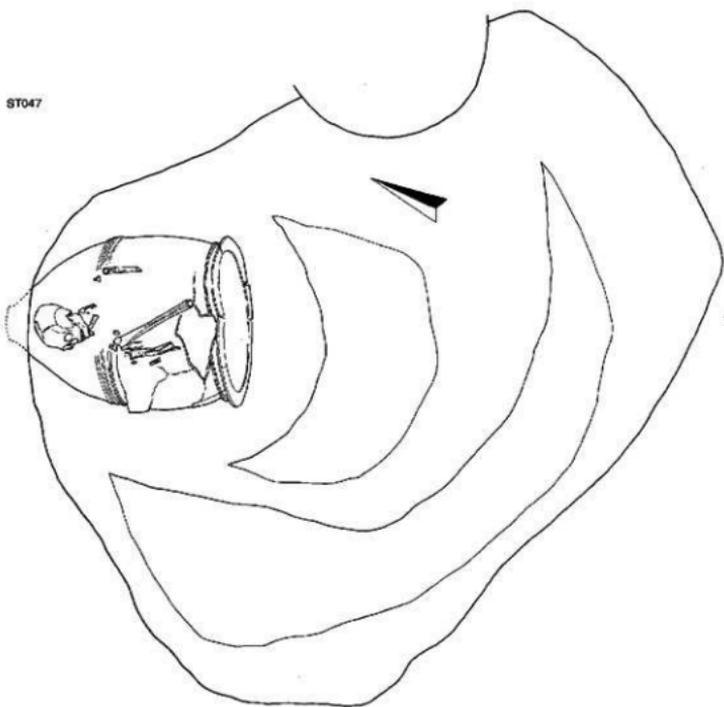
0 50cm

第7圖 雲南尖湖圖3 (1/20)

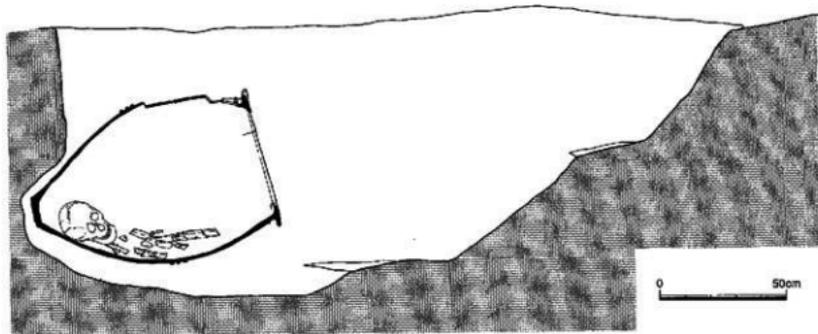


第8图 亮棺实测图4 (1/20)

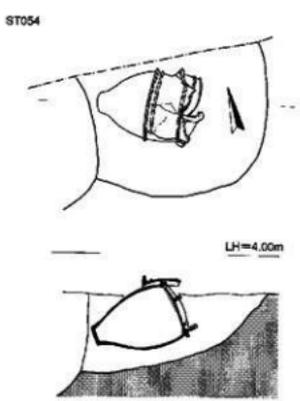
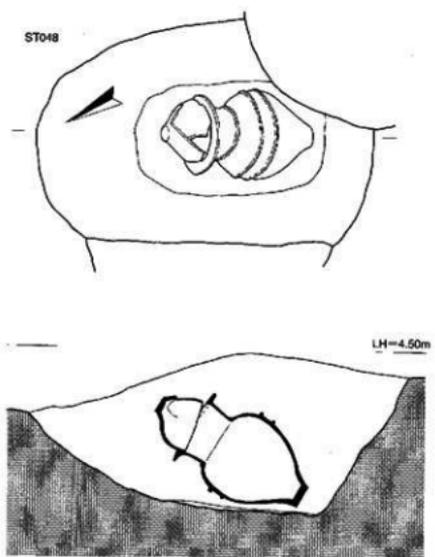
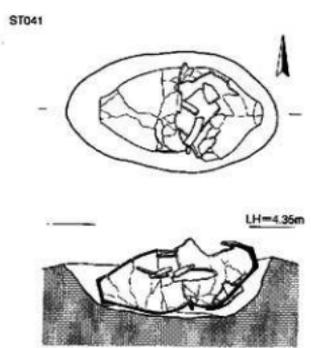
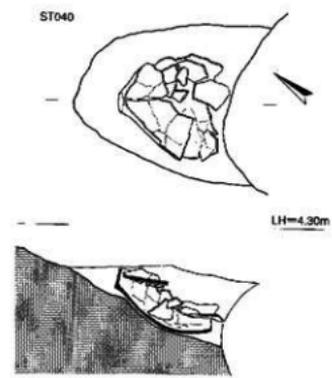
ST047



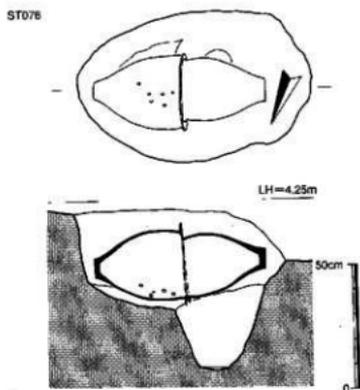
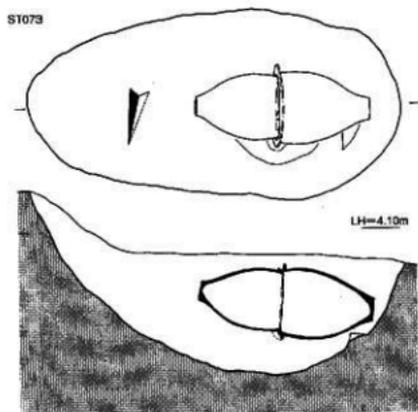
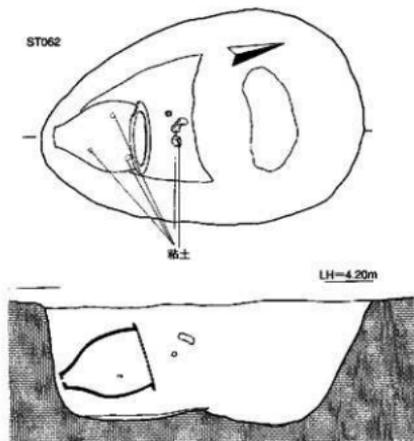
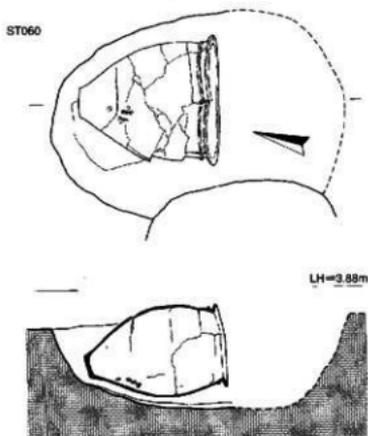
LH=4.20m



第9圖 燒棺尖剗圖5 (1/20)



第10圖 臺棺実湖岡6 (1/20)

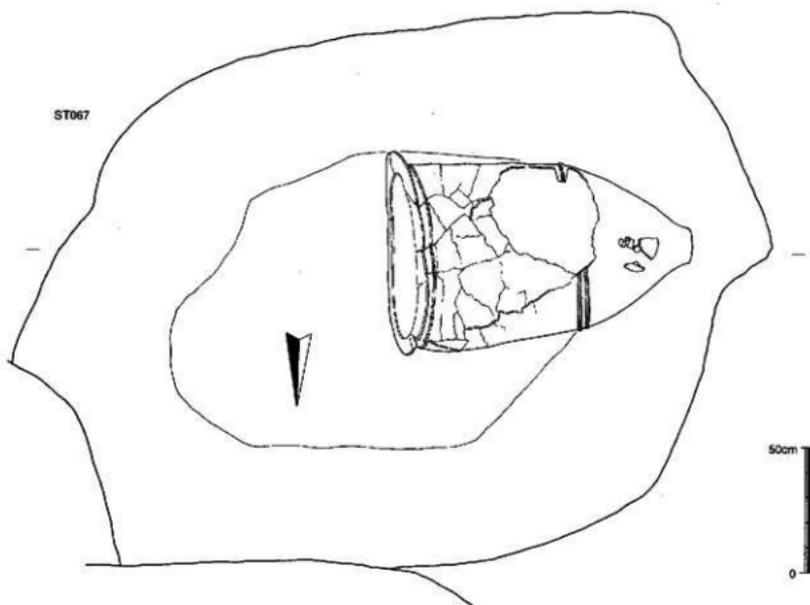


第11図 甕棺実測図7 (1/20)

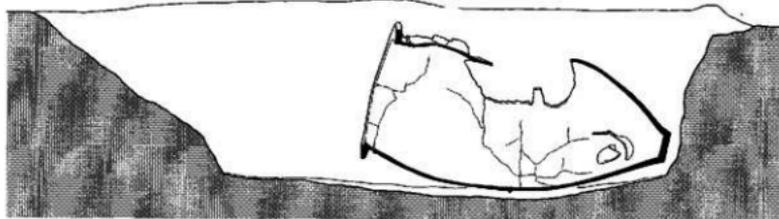
壙内からも出上しないものがあり、埋葬前に既に剥かれ落ちていた可能性がある。

ST019 (第7図) 調査区の中央からやや南東寄りで検出した。SK007を切る。墓塚の掘り方は不明である。棺は主軸をN-7°-Wにとる単棺で埋置角度は23°を測る。甕棺の下に淡茶褐色上を含む柱穴状の掘り方を確認したが甕棺に伴うものかは不明である。出土遺物(第18図)O18は口径44.5cm、器高56.3cmを測る。口縁は立ち上がり「く」の字状を呈す。端部は厚く方形で強いナデのため一部口唇状を呈す。口縁下に突帯が1条巡る。外面は縦ハケ、内面はナデ調整。胴部中央に外面からの穿孔有り。色調は暗めの赤褐色で白色砂を多く含む。焼成は良好である。

ST020 (第7図) 調査区の中央からやや南寄り検出した。墓塚の掘り方は確認できなかった。

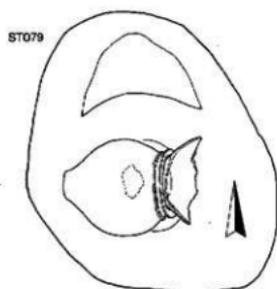


LH=3.90m

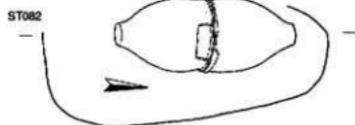


第12図 妻棺実測図8 (1/20)

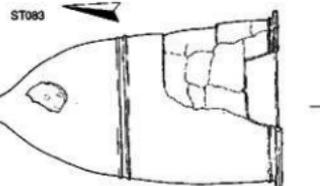
棺は主軸をN-72°-Eにとる複棺で埋置角度は19°を測る。出土遺物(第17図)O13は上棺である。口径30.8cm、器高36cmを測る。調整は外面が縦ハケ、内面ナデを施す。色調は灰黄褐色。O14は下棺である。口径約34cm、器高38.8cmを測る。口縁はT字型を呈し、口縁下に断面三角形の突帯を1条巡らす。調整は外面が縦ハケ、内面がナデ調整を施す。色調は黄褐色を呈す。ST024(第6図)調査区の北側で検出した。SK035を切る。墓壇の掘り方は確認できなかった。棺は主軸をN-24°-Wにとる単棺で埋置角度は11°を測る。中から成人男性の骨が出土した。



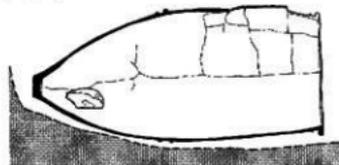
LH=4.50m



LH=4.45m



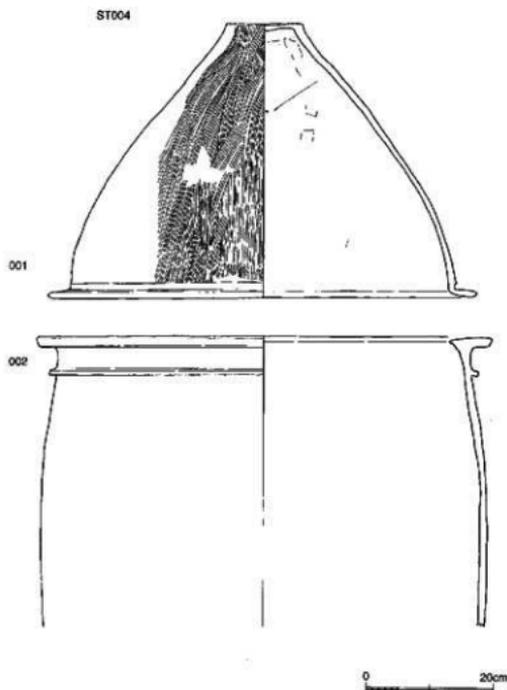
LH=3.35m



第13図 甕棺実測図9 (1/20)

019 (第18図) は口径42.5cm、器高61.4cmを測る。頭部はやや外湾しながら立ち上がり、端部はほぼ水平である。突帯は肩部にM字型を1条、胴部にM字型2条を巡らし、胴部2条の上下両端には斜め方向の刻み目を施す。成形は胴部・頭部とも少し歪んでいる。調整は胴部が丁寧なナテ調整なのに対し、頭部はやや粗雑なナテで内面には粗い指オサエが残る。色調は淡黄褐色で胴部下半に黒斑がみられる。胴部にたいし頭部は作りが雑である。大型鬘先I緑壺の作りかけと思われる。

ST026 (第7図) 調査区の北寄りで検出した。SK059・060を切る。墓壇の掘り方は不明瞭である。棺は主軸をN-7°-Wにとる単棺で埋置角度は7°を測る。015 (第17図) は口径38.1cm、器高49.3cmを測る。口縁は立ち上がり「く」の字状を呈す。内側の縁は明確である。口縁下に突帯が1条走る。外面は縦ハケ、内面はナテ調整。色調は外面は赤橙色で胴部上半に黒斑有り。内面は暗い橙色。胎上は白色砂を多く含む。焼成は良好、胴部中央に外側からの穿孔有り。



第14図 甕棺遺物実測図1 (1/8)

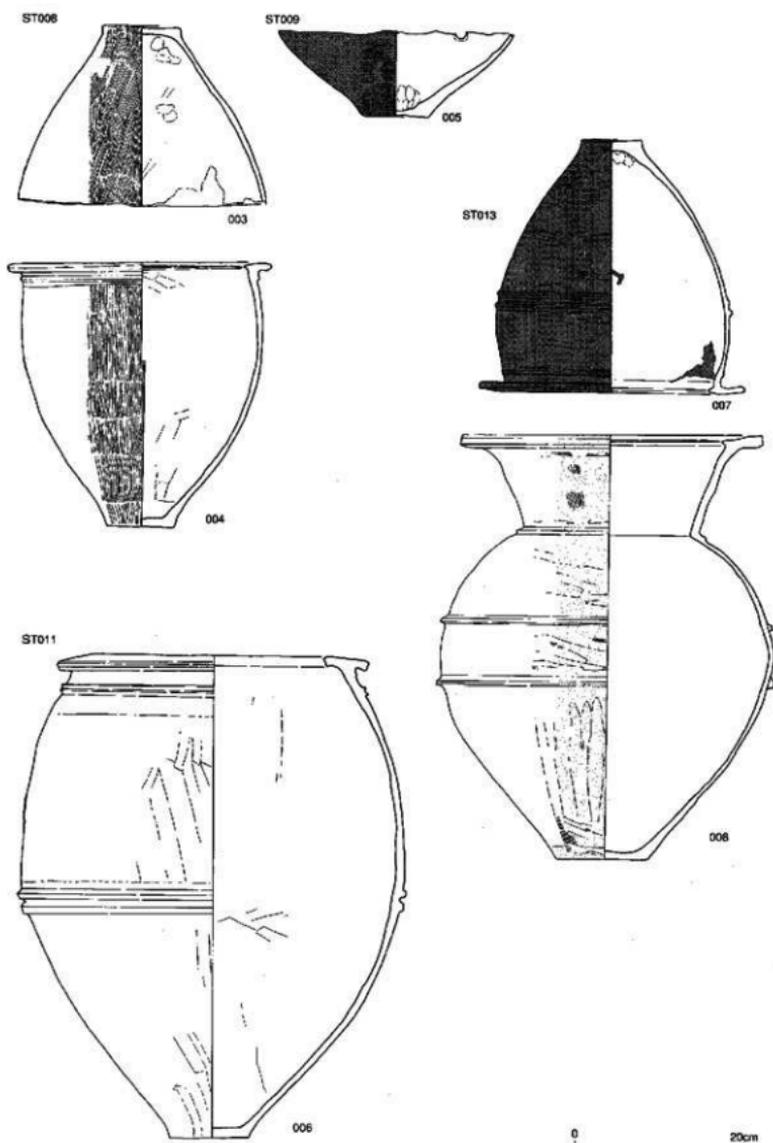
形の突帯を2条巡らす。調整は内外面ともナテ調整。外面は底部を除く全面に煤状の黒色顔料を塗布している。O21は下棺で攪乱によりほとんどが削平されている。中型の壺の頸部から上を打ち欠いて使用している。最大胴径を復元すると約27cmを測る。胴部はやや扁平で最大胴径部から上は急に内湾している。調整は縦ハケ後横ナテ、内面は指オサエ後ナテを施す。外面は下側の突帯から底部にかけて黒色顔料を施す。胎土は外面に薄く精良な粘土を貼っている。焼成はやや軟質である。

ST030 (第8図) 調査区の中央北寄りで検出した。墓塚の掘り方は楕円形を呈す。棺は主軸をN-44°-Eにとる単棺で埋置角度は21°を測る。出土遺物(第19図)O24は高坏の坏部を利用した蓋である。口径27.5cmを測る。口縁は外湾する鋤先型の口縁で端部は方形を呈す。調整は坏部は内外面とも横方向のミガキ、脚部は縦方向のミガキを施す。色調は脚部内側を除いて赤色顔料を施す。外面坏部下半から脚部にかけては顔料が濃い。胎土は精良で雲母を少し含む。焼成良好。O25はやや大型の壺で頸部から上を打ち欠く。胴部最大径52.3cm、現状での器高51.3cmを測り、胴部はやや扁平な球状を呈す。突帯は肩部にM字型を1条、胴部にM字型を2条巡らす。調整は内外面にナテを施す。色調は淡赤褐色を呈し、胴部下半に黒斑を有す。焼成は良好。

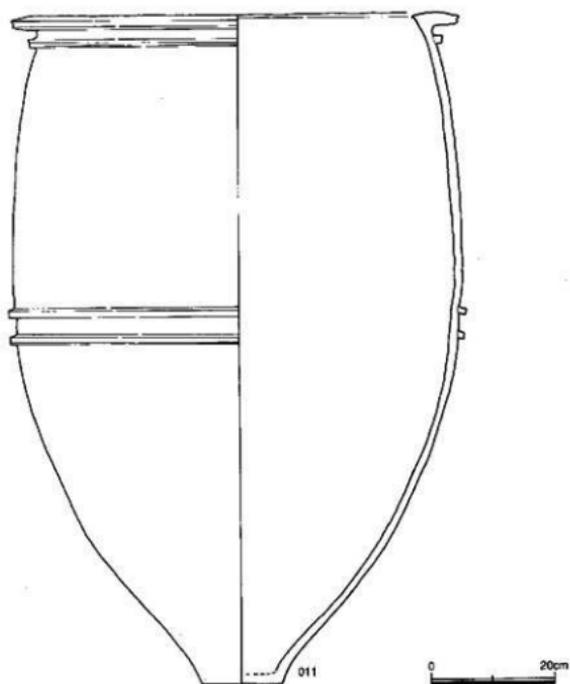
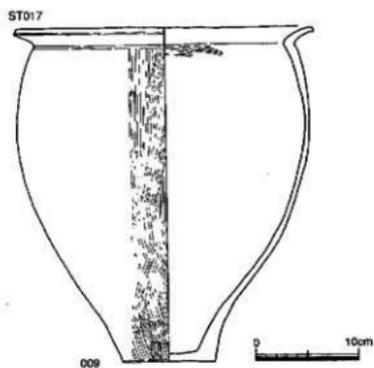
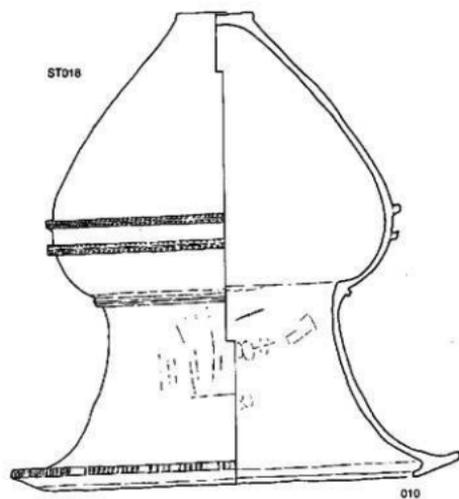
ST028 (第7図) 調査区の北側で検出した。SKO57を切る。墓塚の掘り方はやや五角形を呈す。棺は主軸をN-18°-Eにとる複棺で埋置角度は11°を測る。出土遺物(第17図)O16は上棺である。口径30.2cm、器高23.2cmを測る。胴部下半に径2cm程の穴を外側から穿つ。調整は外面が縦ハケ、内面ナテ調整。外面の外側に大きな黒斑が見られる。白色砂をわずかに含み、焼成は良好。

O17は下棺である。口径24.5cm、器高53.7cmを測る。口縁はL型で頸部に1条の突帯が巡る。内外面ともナテ調整。赤褐色を呈し、胴部に黒斑有り。外面に黒色顔料の痕跡有り。焼成良好。

ST029 (第8図) 調査区の北側で検出した。墓塚の掘り方は確認できなかった。棺は主軸をN-67°-Wにとる複棺でほぼ水平に埋置している。攪乱により上棺半分と下棺の殆どが削平されている。出土遺物(第19図)O20は上棺である。中型壺の頸部から上を打ち欠いており、最大胴径39.2cm、現状での器高33cmを測る。胴部の上半に胴部最大径を持ち、断面三角

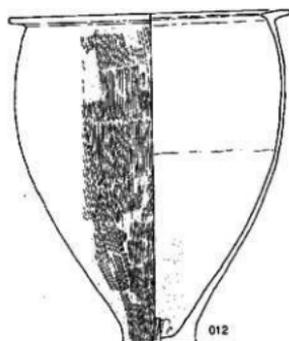


第15圖 瓮棺遺物実測圖2 (1/6)

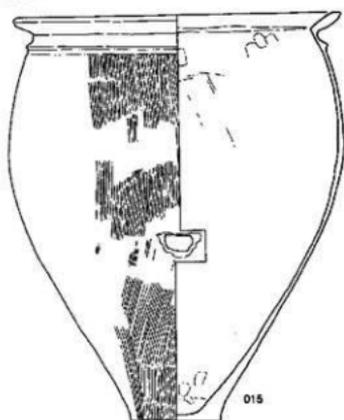


第16圖 甕形遺物実測図3 (1/6・1/10)

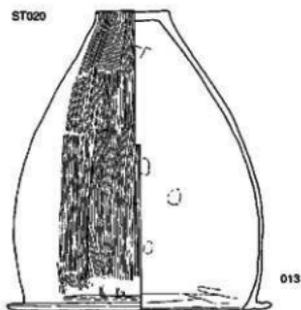
ST016



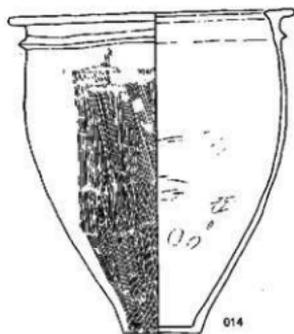
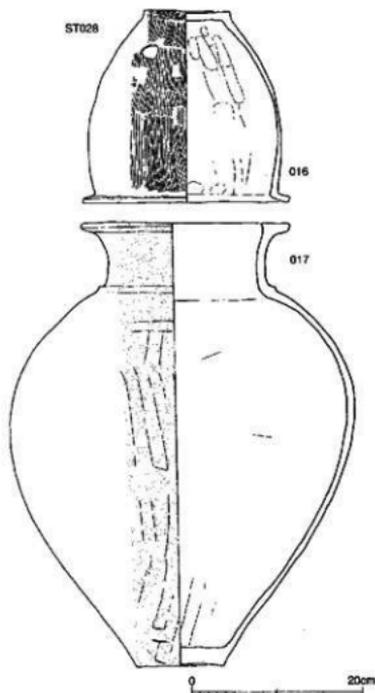
ST026



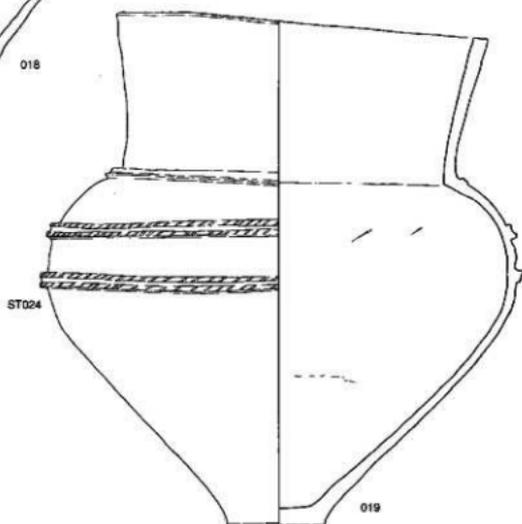
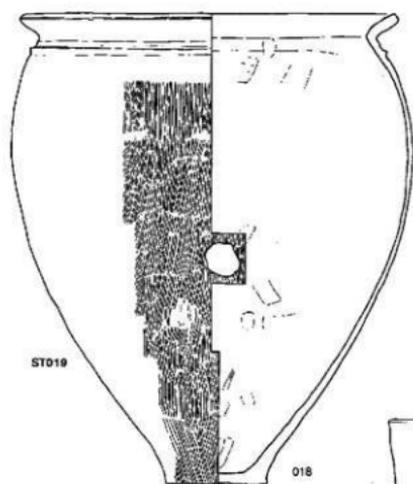
ST020



ST028



第17圖 夏棺遺物実測図4 (1/6)



0 20cm

第18図 甕棺遺物実測図5 (1/6)

ST031 (第8図) 調査区の北側で検出した。墓壇の掘り方は不正円形を呈す。棺は主軸をN-69°-Wにとる複椁で埋置角度は14°を測る。出土遺物(第20図)O26は上棺である。広口口縁壺の胴部突帯から上を打ち欠き蓋として使用している。口径39cm、器高25.9cmを測る。突帯は2条のうち下の1条だけ遺存しており、断面「コ」の字型を呈す。調整は外面が縦方向のナデ調整、内面が縦・横方向のナデを施す。外面胴部下半から上には黒色顔料を塗布する。O27は下棺で口径45cm、器高61.3cmを測る。胴部中央から少し上に最大径を持ち口縁にかけて緩やかに内湾する。口縁はT字型を呈し、端部はやや下を向く。口縁下に断面三角形の突帯が1条巡る。調整は外面が縦ハケ、内面にナデを施す。色調は外面が淡黄褐色、内面がにぶい橙色を呈す。焼成良好。白色砂礫かに含む。

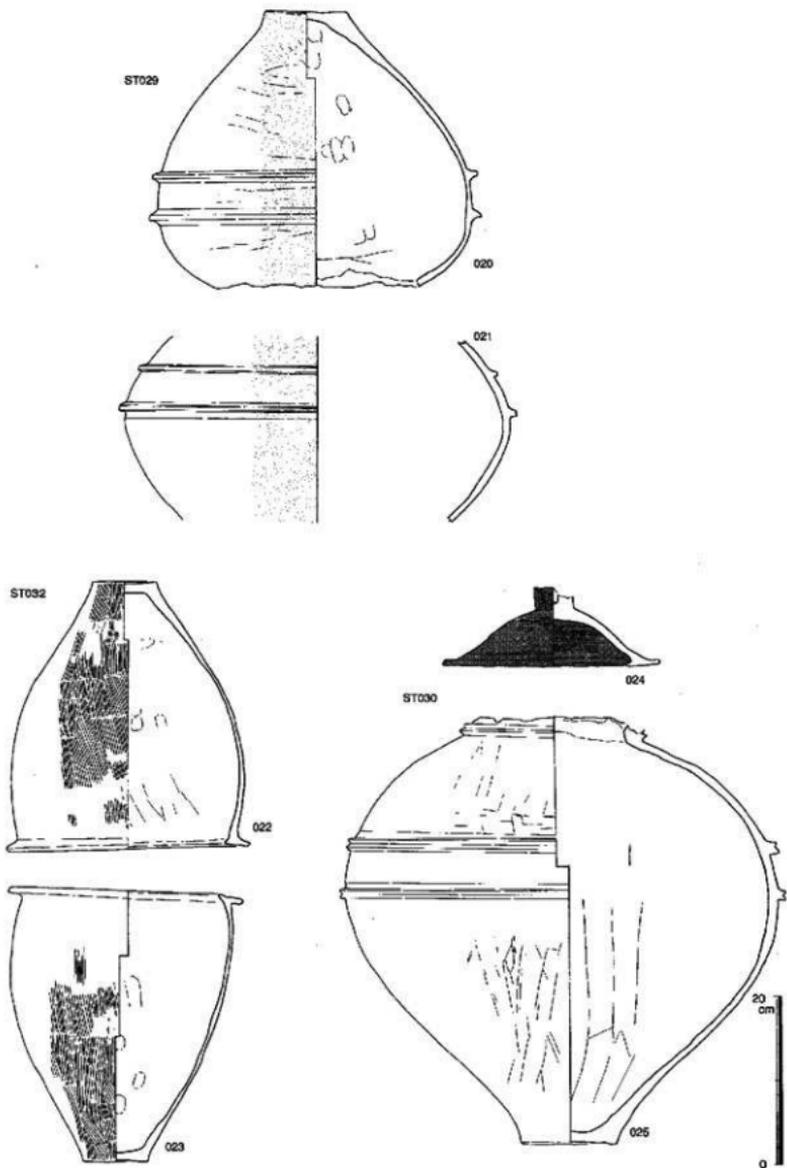
ST032 (第8図) 調査区の中央北寄りで検出した。墓壇の掘り方は確認できなかった。棺は主軸をN-31°-Eにとる複椁ではほぼ水平に埋置している。出土遺物(第19図)O22は上棺である。口径28cm、器高32.5cmを測る。中央部に胴部最大径を持ち口縁に向けて緩やかに内湾する。口縁はT字型を呈し内湾する。調整は外面が縦ハケ、内面が指オサエ後丁寧なナデを施す。色調は黄褐色を呈す。O23は下棺である。口径27.6cm、器高32.7cmを測る處で底部からあまり膨らまずに立ち上がり口縁直下に最大径を持つ。口縁に向けて急にすばまりL字型の口縁を持つ。調整は外面が縦方向のハケ、内面にナデを施す。色調は淡黄褐色を呈し石英・長石を少し含む。焼成は良好である。

ST033 (第8図) 調査区の北端で検出した。ST054を切る。墓壇の掘り方は楕円形を呈す。棺は主軸をN-47°-Eにとる単椁で埋置角度は19°を測る。出土遺物(第20図)O28は中型の壺で胴部上半から上を打ち欠いて使用している。現状で口径42.2cm、器高24.9cmを測る。調整は外面が底部を除きナデ、内面は不明である。外面に薄く黒色顔料の痕跡が見られる。胎土は白色砂を多量に含み、焼成は良好。

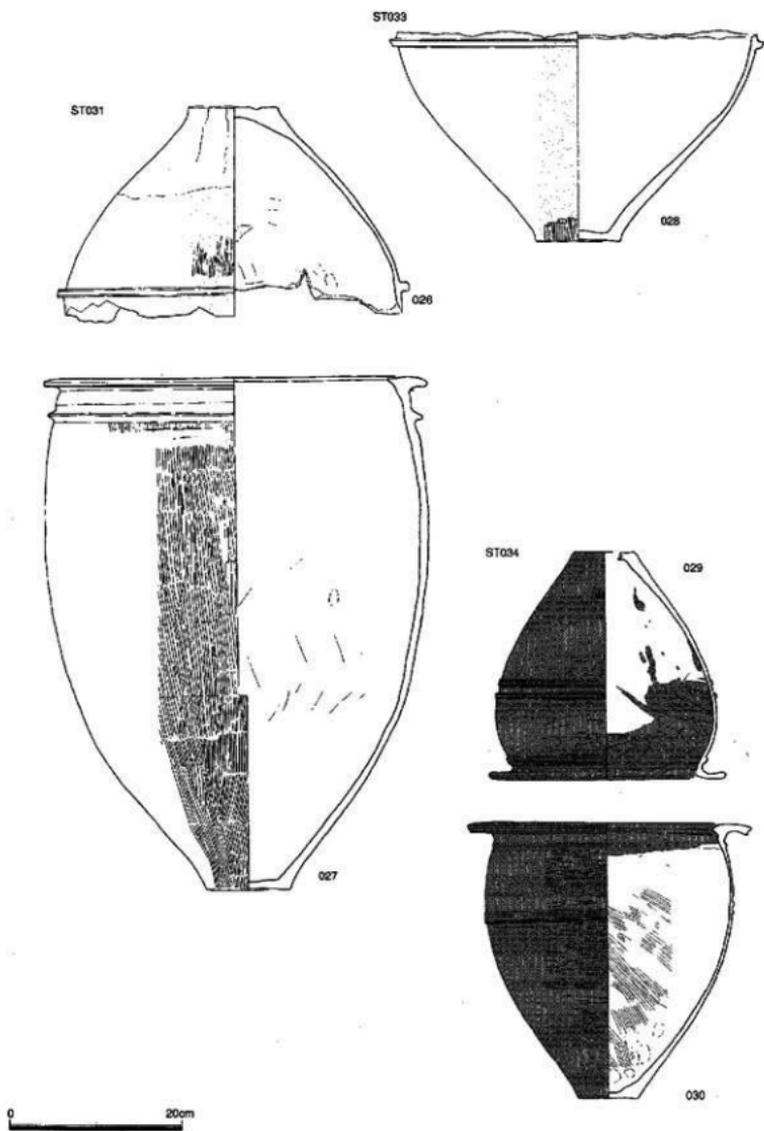
ST034 (第8図) 調査区の北側で検出した。墓壇の掘り方は確認できなかった。棺は主軸をN-51°-Wにとる複椁で埋置角度は11°を測る。削平により上下棺とも約半分を削られている。出土遺物(第20図)O29は上棺である。胴部は球状に膨らむ。L字型の口縁を持ち、口縁端はわずかに外湾する。突帯は口縁下に断面M字型を1条、胴部にM字型を2条巡らす。調整は外面がヘラミガキ、胴部下半にハケを施す。内面はナデ。外面は底部を除く全面に赤色顔料を塗布。内面は上半に赤色顔料の粗い塗布。下半には顔料の液ダレがみられる。胎土は比較的精良で白色砂をわずかに含む。焼成良好。O30は下棺である。口径33.4cm、器高32.9cmを測る。器壁は薄くそれに厚く少し外湾する口縁がつく。端部はナデのため口唇状を呈す。突帯は口縁下に1条、胴部中央に2条巡る。調整は外面が横方向のヘラミガキ、内面がナデおよびハケ調整。外面は底部を除き赤色顔料を塗布。内面は口縁下まで赤色顔料を塗布。胎土は白色砂を少し含むものの精良。焼成は良好である。

ST040 (第10図) 調査区の東側で検出した。南側を擾乱により削平されており、棺の一部が遺存する。墓壇の掘り方は楕円形を呈す。棺は主軸をN-36°-Wにとり、わずかに下向きに傾斜して埋置している。O31(第21図)は上棺である。口径30.5cm、器高39.5cmを測る。口縁は僅かに立ち上がり「く」の字状を呈す。端部は口唇状をなす。胴部上半は球状を呈し底部にむかって直線的にすばまる。底部は薄くやや上げ底である。橙色を呈すが外面全面に黒色顔料の痕跡がある。

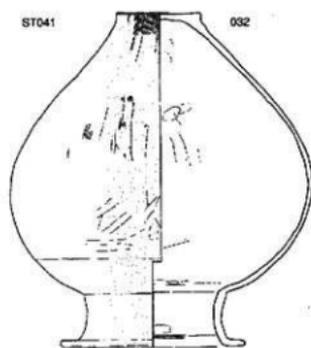
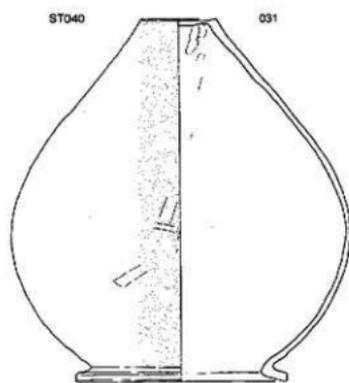
ST041 (第10図) 調査区の北西側で検出した。墓壇の掘り方は楕円形を呈す。棺は主軸をN-89°-Eにとる複椁で埋置角度は13°を測る。上棺の壺は口縁を打ち欠き胴部下に敷く。出土遺物(第21図)O32は上棺として使用した壺である。口径21.5cm、器高40.3cmを測る。胴部上半は球状を呈す。頸部は中央から外湾しL字型の口縁がつく。調整は外面がハケ調整、内面にナデを施す。外面の一部に赤色顔料の液ダレがみられる。外面は底部を除く全面に黒色顔料を塗布している。O3



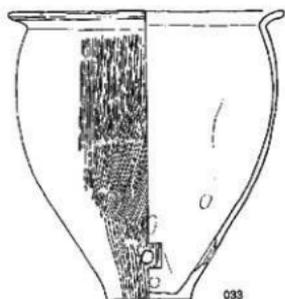
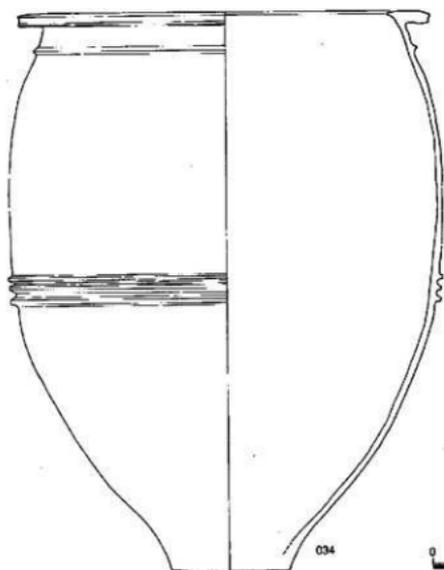
第19圖 壺形遺物実測図6 (1/6)



第20圖 甕棺遺物実測圖7 (1/6)



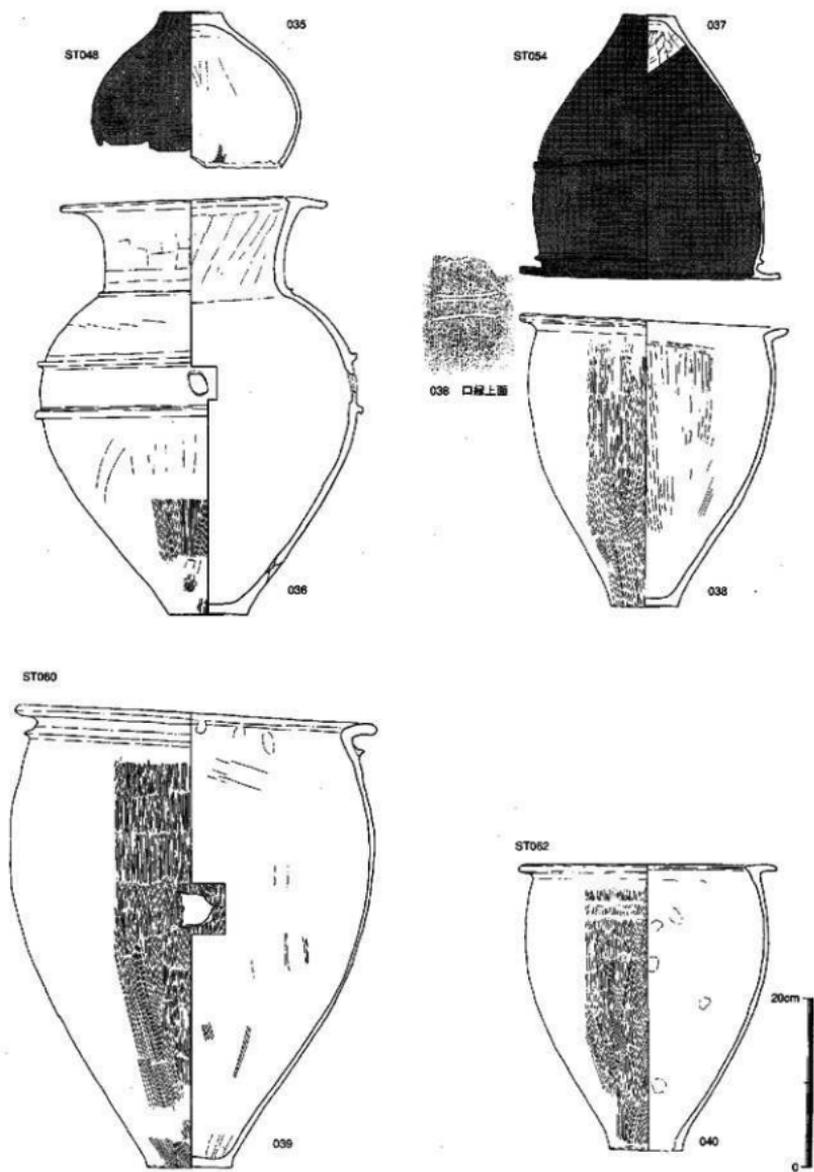
ST047



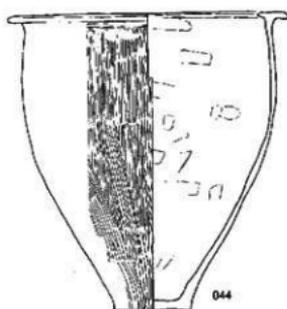
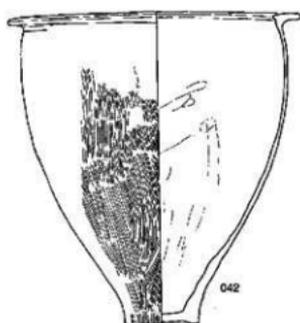
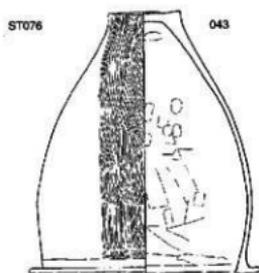
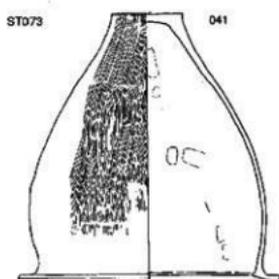
0 10cm

0 20cm

第21圖 賈桓遺物實測圖8 (1/6 · 1/8)



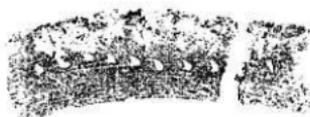
第22図 甕棺遺物実測図9 (1/6)



041 口縁



043 口縁

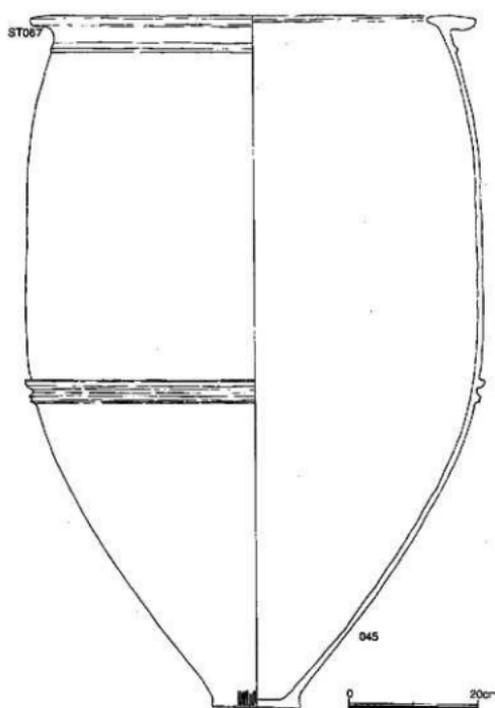


042 口縁

第23図 瓮棺遺物実測図10 (1/6・1/2)

3は下棺である。口径32cm、器高35cmを測る。胴部下半に径2cmの穴を外側から穿つ。口縁は「く」の字型を呈し、軽く外湾する。内側の縁は明瞭ではない。調整は外面が縦ハケ、内面はナデを施す。色調は淡黄褐色で胎土は雲母片をわずかに含む。焼成は良好である。

ST047 (第9図) 調査区の北東寄りで検出した。幕横の掘り方は東西2.87m、南北2.76m、深さ1.14mを測り、南側に階段状の段がつく。棺は主軸をN-26°-Wにとる平棺で埋置角度は12°を測る。胴部上半に厚い粘土の塊がみられ、木蓋を使用していたと思われる。O34 (第21図) 口縁



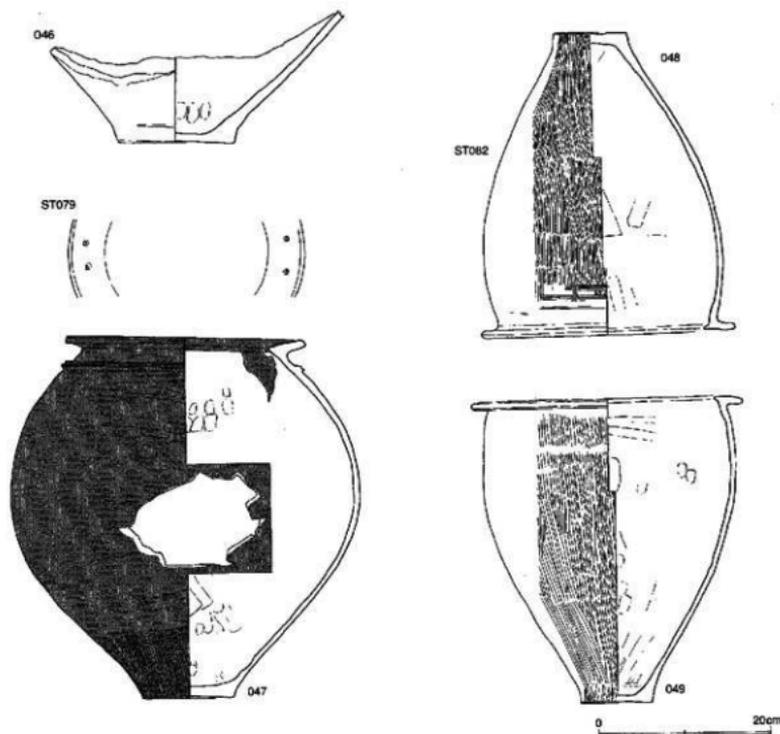
第24図 甕棺遺物実測図11 (1/8)

部を除く全面と内側の一部に赤色顔料を塗布する。O36は下棺である。中形の壺で口径30.8cm、器高50.5cmを測る。口縁は頸部から緩やかに外湾し、口型口縁がつく。端部は丸みを帯びる。頸部に1条と胴部に2条の突帯を巡らす。調整は内外面ともナデ、外面下半にハケを施す。色調は橙色を呈し胴部上半に黒斑を有す。胴部突帯間に外側からの穿孔有り。胎土は白色砂を多く含み、焼成は良好である。

ST054 (第10図) 調査区の北端で検出した。ST033・ST083に切られる。墓壇の掘り方は半円形を呈す。棺は主軸をN-75°-Wにとる単棺で埋置角度は21°を測る。甕を割ってそれを蓋として使用している。出土遺物(第22図)O37は蓋である。丹塗りの甕を削り、下邊の口を塞ぎ、一部土を覆うように被せている。口径31cm、器高31.4cmを測る。口縁はT字型を呈し端部に刻み目を施す。突帯は口縁下に断面三角で刻み目を持つものを1条、胴部にM字型を1条巡らす。調整は外面上部には横方向のミガキを施す。色調は内面底部を除き赤色顔料を施している。O38は下棺である。口径31.6cm、器高35cmを測る。口縁下で最大径を測り、頸部はややすぼまる。口縁は「く」の字状を呈す。成形は口縁部高が最大で2cm違うなど全体に歪みがみられる。調整は内外面とも縦ハケを施す。色調は淡黄橙色を呈し胴部上半に黒色顔料を塗布している。

64.4cm、器高90.2cmを測る。口縁はT字型で端部は強いナデのため口唇状を呈す。胴部中央より上で最大径を測り、口縁下に断面三角形の突帯が1条、胴部中央に断面口の字型の突帯を3条巡らす。全体に丸みを帯び、口縁は急にすぼまる。色調は明橙色を呈す。全体に薄く黒色を呈し顔料が塗られていた可能性が考えられる。調整は外面は剥落が多いもののかすかに横方向のナデがみられる。調整は全体に丁寧である。内面は口縁下に強い横ナデがみられるが他は横・斜方向のナデを施す。

ST048 (第10図) 調査区の北東寄りで検出した。O25・O47に切られる。墓壇の掘り方は楕円形を呈す。棺は主軸をN-31°-Eにとる複棺で埋置角度は33°を測る。出土遺物(第22図)O35は上棺である。丹塗りの壺の胴部上半を打ち欠き伏せて使用している。胴径24.4cm、現状の器高18.6cmを測る。調整は外面がミガキ、内面ナデを施す。外面は底



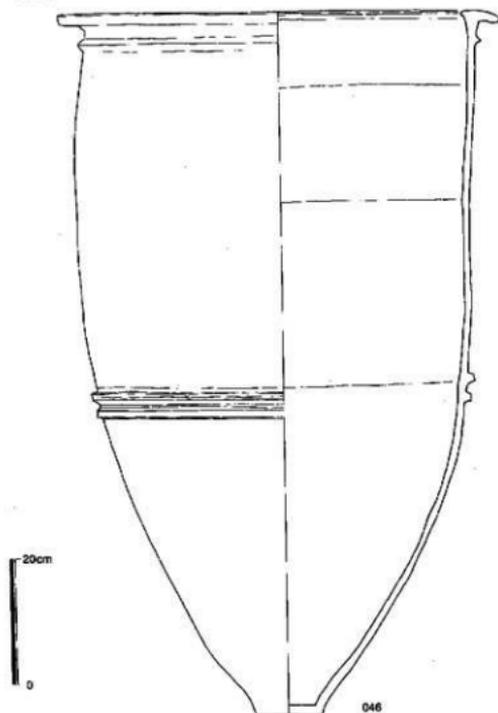
第25図 幾何遺物実測図12 (1/6)

ST060 (第11図) 調査区の北側で検出した。ST026に切られる。墓壇の掘り方は楕円形を呈す。棺は主軸をN-16°-Wにとる単棺でほぼ水平に埋置している。出土遺物(第22図)039は口径43.1cm、器高55.3cmを測る。口縁はやや立ち上がり外湾する。調整はハケ。口縁下に突帯を1条巡らす。胴部に穴があるか穿孔かどうかは不明。色調は淡橙色で外面胴部に黒斑あり。

ST062 (第11図) 調査区の北側で検出した。墓壇の掘り方は楕円形を呈す。甕は南端に位置し、底から浮いている。棺は主軸をN-13°-Eにとる単棺で埋置角度は14°を測る。口縁周辺から中にかけて白色の粘土が散布している。O40 (第22図)は口径29.8cm、器高34.5cmを測る。11縁はT字型を呈し端部は厚く丸みを帯びる。底部を打ち欠く。調整は外面がタテ方向のハケ調整で口縁下はナデのため一部消される。内面は指オサエ後ナデを施す。色調は淡黄褐色で内面底部が黒色を呈す。

ST067 (第12図) 調査区の北端で検出した。SKO36・ST060に切られる。墓壇の掘り方は長方形を呈し、東側は緩いスロープをなす。棺は主軸をN-87°-Eにとる単棺でやや立ち上がり気味に埋置している。甕棺の底部から頭骨の一部が出土した。O45 (第24図)は口径72.4cm、器高112cmを測る。全体に砲弾型で少し歪んでいる。口縁はT字型で端部は丸みを帯びやや外湾気味

ST053



第26図 甕棺遺物実測図13 (1/8)

かに含む。口縁上面に爪状の痕跡がみられる。042は下棺である。口径34cm、器高37.6cmを測る。調整は外面縦ハケ、内面はナデである。口縁上面に竹管状のものでついた施文が10個みられる。淡黄橙色を呈し胎土中に白色砂を僅かに含む。焼成は良好である。

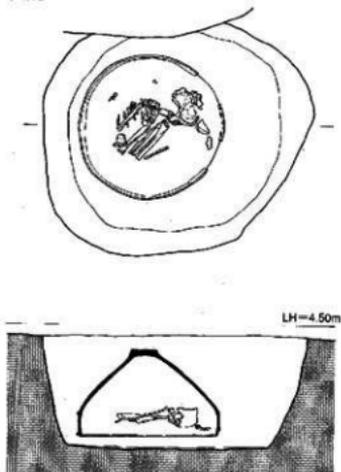
ST076 (第11図) 調査区の西端で検出した。墓塚の掘り方は楕円形を呈す。棺は主軸をN-66°-Eにとる複棺でほぼ水平に埋置している。東側の下甕内から歯が出七した。上甕の下に柱穴状の掘り込みを検出したが、甕棺に伴うかは不明である。出土遺物(第23図)043は上棺である。口径27cm、器高30.6cmを測る。口縁はT字型で端部は緩やかに外湾する。調整は外面は縦ハケ、内面はナデ。灰白色を呈し、胎土中に白色砂、雲母を僅かに含む。口縁上面に径4mmの深みが6個並ぶ。044は下棺である。口径32.6cm、器高35.8cmを測る。胴部上半は僅かに内湾しながら立ち上がるが口縁直下で外湾し、T字型の口縁がつく。調整は外面は縦ハケ、内面にナデを施す。外面は淡黄橙色を呈し、口縁直下に赤色顔料の波ダレがみられる。

ST079 (第12図) 調査区の南西側で検出した。墓塚の掘り方は楕円形を呈す。棺は主軸をN-

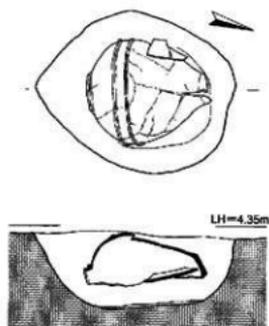
である。突帯は口縁下に小さな断面三角形を1条。胴部に断面台形のもの2条巡らす。調整は内面ナデ調整。外面は縦方位のハケ目である。色調は暗茶褐色で内面は鈍い黒色を呈す。焼成は底部付近は良いものの、上半部は不良である。胎土は白色砂を多く含む。一部の口縁部から底部まで赤色顔料の波ダレがつく。赤色顔料は径1cmほどの丸い滴と1~3mmほどの細かな点の両方があり、前者はハケに含んだ顔料が滴となって落ちたもの、後者はハケを払ったときに飛び散った飛沫と思われる。いずれにしても甕棺の製作時に隣接して丹塗りの土器を製作していたことがわかる。

ST073 (第11図) 調査区の西端で検出した。墓塚の掘り方は楕円形を呈す。棺は主軸をN-77°-Eにとる複棺で埋置角度は6°を測る。出土遺物(第23図)041は上棺である。口縁部は歪みが大きく口径27~30cm、器高30.2cmを測る。調整は外面が縦ハケ、内面はナデを施す。にぶい橙色を呈し、胎土中に白色砂を僅

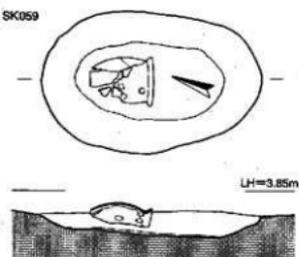
SK012



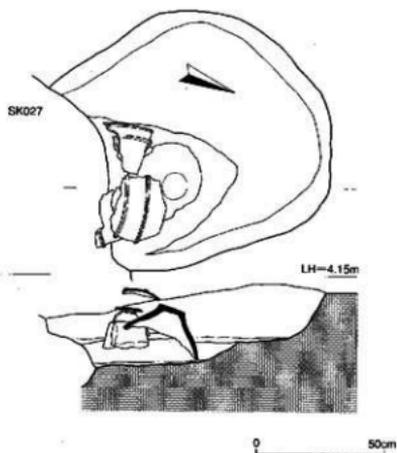
SK014



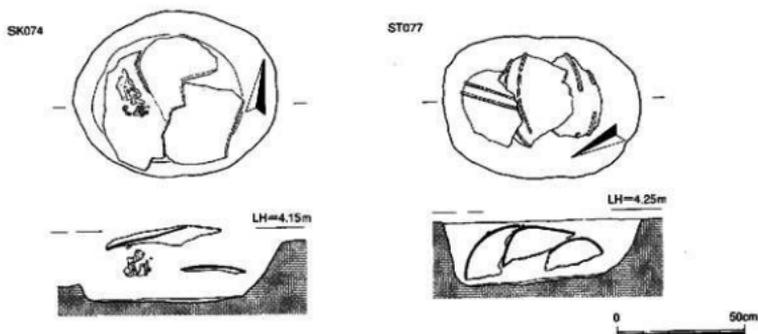
SK059



SK027

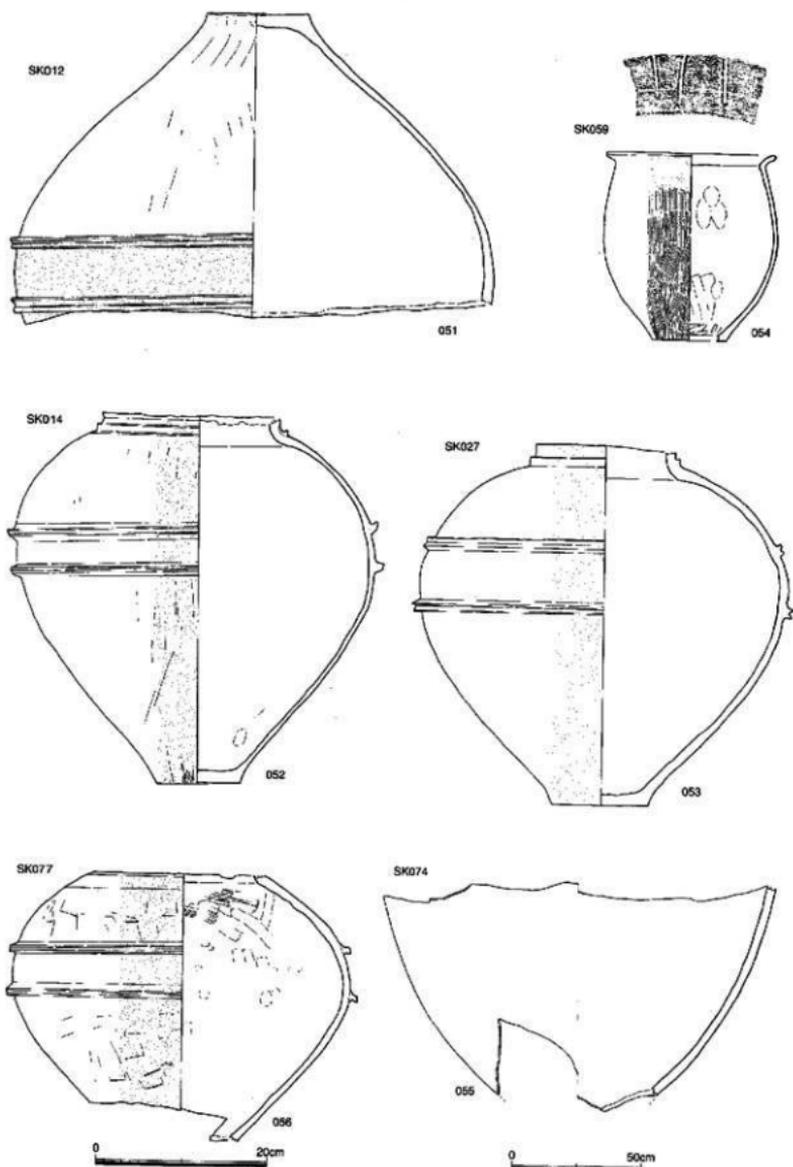


第27图 土器瓮下墳墓実測図1 (1/20)



第26図 土器蓋土壙墓実測図2 (1/20)

88°-Wにとる単棺で埋置角度は17°を測る。甕棺の底部を蓋として利用している。出土遺物(第25図)O46は蓋である。大型棺の底部のみを使用し、下棺の口を塞ぐ。底径13.6cmを測る。内外面とも器表面の風化が著しい。棺内に差し込まれた部分もかなり周囲と同様表面が荒れているため、埋葬当時地上に突きだしていた甕棺の底部を打ち欠いて使用したものと考えられる。O47は下棺の甕である。口径28.2cm、器高43.6cmを測る。口縁は僅かに立ち上がり「く」の字型を呈す。口縁に蓋を縛る穴が4ヶ所みられる。口縁下にM字型の突帯を1条巡らす。胴部上半は球形を呈す。調整は外面がヘラミガキ、内面はナデを施す。外面は底部を除く全面に赤色顔料を塗布する。内面は口縁下に液ダレ状に赤色顔料がみられる。外面胴部には黒斑あり。胎土は白色砂を僅かに含み、焼成良好。ST082(第13図)調査区の西端で検出した。墓壙の掘り方は楕円形を呈す。棺は主軸をN-6°-Wにとる複棺で埋置角度は15°を測る。出土遺物(第25図)O48は上棺である。口径29.6cm、器高36.2cmを測る。胴部上半は内湾しながら立ち上がるが、口縁直下で軽く外湾しT字型の口縁がつく。調整は外面が縦ハケ、内面がナデ調整、外面に赤色顔料の液ダレがみられる。色調は外面が灰白色を呈す。胎土は白色砂、雲母片を少し含み焼成は良好である。O49は下棺である。口径31.6cm、器高36.4cmを測る。口縁はT字型を呈し端部は丸みを帯びる。調整は外面が縦ハケ、内面が指オサエ後ナデ調整。色は淡黄褐色を呈す。胎土は白色砂、雲母片をわずかに含む。焼成は良好。ST083(第12図)調査区の北端中央で検出した。墓壙の掘り方は殆どが調査区外にあるため確認できなかった。棺は主軸をN-7°-Wにとる単棺でほぼ水平に埋置している。甕棺最奥部に頭蓋骨の一部分が遺存していた。表面は齧歯類の害により遺存状況は悪いものの残存部全体に薄く赤色顔料が付着していた。O50(第26図)は復元口径69cm、器高111cmを測る。底部から胴部突帯まで緩やかに立ち上がった後、垂直に口縁まで立ち上がる。一部大きく外側に膨らむ面があり胴部最大径は計測箇所により差がみられる。口縁はやや下がり気味で一部口唇状を呈す。突帯は口縁下に断面三角形を1条、胴部にM字型を2条巡らす。成形は胴部突帯から上の歪みが大きい。調整は内面がナデ調整で口縁下に粗い横方向のハケ目が見られる。外面は縦方向のハケ目をナデ消している。色調は淡橙褐色から黄褐色で外面全体にどす黒いシミがみられる。



第29圖 土器蓋土塚墓遺物実測圖1 (1/6・055(土1/8))

#### 5) 土器蓋土墳墓

SR012 (第27図) 調査区の中央で検出した。SKO10に切られる。墓壇の掘り方は円形で径106cmを測り覆土は黒色を呈す。大型鋤先口縁壺の胴部上半を打ち欠いたものを伏せて倒置棺として使用している。出土遺物(第29図)O51は壺の胴部上半を打ち欠く。現状で口径54.5cm、器高37cmを測る。色調は暗褐色で外面胴部に黒斑あり。口縁から突帯の間に黒色顔料を塗布する。

SR014 (第27図) 調査区の東端で検出した。墓壇の掘り方は確認できなかった。棺は主軸をN-16°-Wにとる単棺で胴部の一部を下に敷いた後死体を置き、その後上から半蒔した壺の胴部を水平に埋置している。出土遺物(第29図)O52は中型の壺である。頸部から上を打ち欠く。現状で口径18.5cm、器高43.8cmを測る。暗褐色で外面に黒色顔料の痕跡がみられる。調整はナデ。

SR027 (第27図) 調査区の北側で検出した。南側は攪乱に削平されている。墓壇の掘り方は不正形を呈す。棺は鋤先口縁壺の胴部下半部分を大きく4個に割り、底部を逆さまに伏せた後胴部片で南側を覆う。甕の下から長径30cmほどの直方体の石が出土した。出土遺物(第29図)O53は中型の壺である。頸部から上を打ち欠く。胴部はやや扁平な球状を呈し胴部に突帯を2条巡らす。調整はナデ。色調は外面に黒色顔料を施し、内面は淡褐色を呈す。

SR059 (第27図) 調査区の北側で検出した。STO26に切られる。墓壇の掘り方は楕円形を呈す。棺は主軸をN-21°-Wにとる単棺でおよそ半分に立ち割った後水平に埋置している。甕下から骨片が出土した。出土遺物(第29図)O53は小型の甕である。復元口径20cm、器高22cmを測る。口縁は「く」の字型を呈す。調整は外面が粗い縦ハケ、内面はナデ調整。外面は本来褐色であるが、全面に薄く黒色顔料を塗布する。口縁部内面に3本の線刻を施す。焼成は良好。

SR074 (第28図) 調査区の西端で検出した。墓壇の掘り方は確認できなかった。大型壺棺の胴部下半を割り、土壇墓の蓋として使用している。円周の約1/2の破片をさらに3分割し、死体を覆っている。死体を覆っている範囲が狭く、頭蓋もしくは肩ぐらまでしか覆うことができなかったと思われる。O54(第29図)は外面は暗褐色、内面は褐色を呈す。調整は外面は全面風化のため不明。内面は非常に丁寧な横方向のナデを施す。胎土は細かく白色砂を多く含む。再利用品と思われる。

SR077 (第28図) 調査区の西側で検出した。墓壇の掘り方は楕円形を呈す。棺は主軸をN-25°-Eにとる単棺で壺の胴部上半を割って使用している。O55(第29図)は頸部から上と底部を打ち欠いた胴部を3分割し、土壇墓の蓋として使用している。復元最大胴径41.1cmを測り胴部に突帯を2条巡らす。調整は外面がナデ調整、内面は指オサエ後ナデを施す。色調は外面本来はにぶい黄褐色であるが、黒色顔料を塗布している。内面は灰褐色である。胎土は雲母片を多く含む。

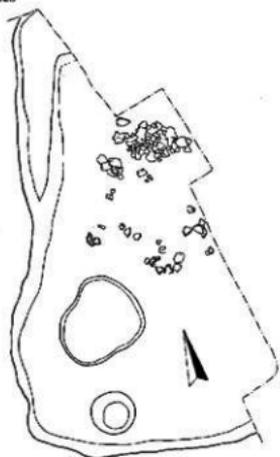
#### 土坑

SK007 (第39図) 調査区ほぼ中央に位置する。掘り方はやや歪な円形を呈し、STO19と柱穴に切られる。断面浅皿状を呈し、深さ15cmを測る。出土遺物なし。

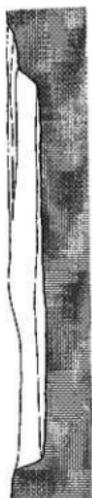
SK057 (第45図) STO28・O30等の弥生中期の甕棺墓に切られる。平面楕円形で断面は浅皿状を呈す。覆土は暗茶褐色土。遺物は出土していない。

SK058 (第45図) 調査区の北寄りで検出した。STO31に切られる。平面は隅丸長方形で中央部が円形に膨らむ。長径251cm、短径181cm、深さ120cmを測る。床面からの高さ約70cmで東西両側に段を持つ。出土遺物(第42図127)壺の口縁部である。頸部は横位のナデののち、縦方向に線刻を施す。端部から11線外面に幅4cmの帯状に黒色顔料を塗布している。また、内側の端部を2~4cm間隔で打ち欠いている。

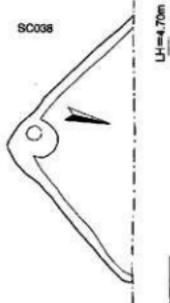
SC023



LH=4.70m



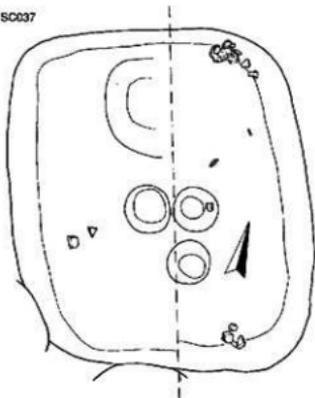
SC038



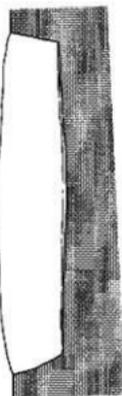
LH=4.70m



SC037



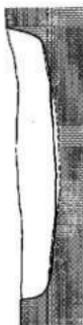
LH=4.70m



SC061



LH=4.20m



0 2m

第30圖 壑穴式住居実測図1 (1/60)

### 3) 溝

S D 0 5 5 (第4図) 調査区の東辺中央から出て調査区中央を通り、弧を描きながら南側に抜ける。途中S E 0 0 3の南東でクランク状に曲がる様に見えるが遺構の切り合いが激しく、同じ溝かどうか不明である。調査区を南側に拡張した後では検出できなかった。S C 0 7 8に切られるのか。掘り方断面は逆台形を呈し、深さ30~40cmを測る。覆土は淡黄褐色砂で炭化物を含む。上層では色が薄くなり、地山の砂とほとんど変わらない。攪乱の断面の清掃時に初めて検出し、遺構の断面やトレンチをつなげて全体を確認した。弥生中期の甕棺墓に切られている。遺物は出土していない。

### 3. 弥生時代~古墳時代の調査

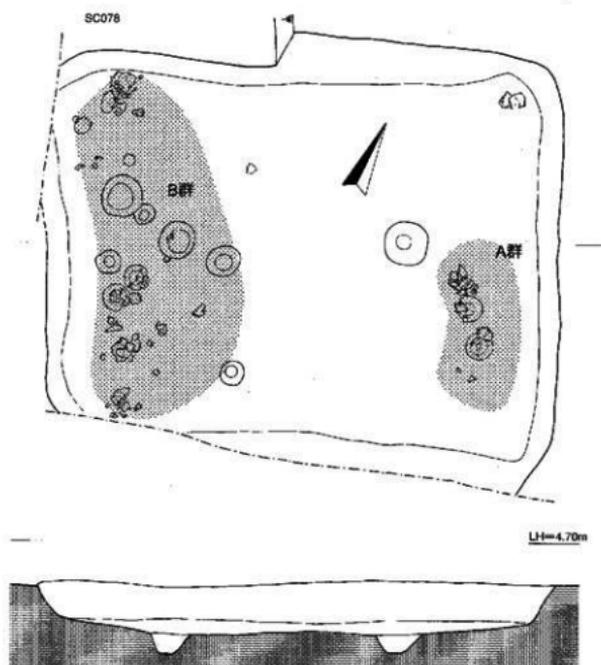
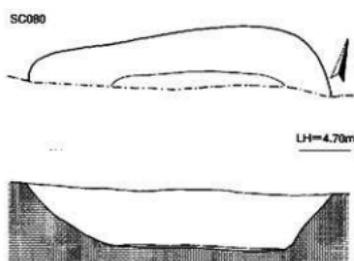
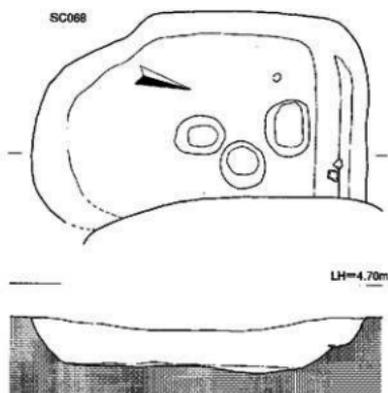
1) 竪穴式住居 確実に住居と思われるもの5軒と不確定なもの2軒を確認した。

S C 0 2 3 (第30図) 調査区の北東端で検出した。約1/2が調査区外にあるため全体の規模は不明であるが、現状で5.2m×3.1mを測る。方形もしくは長方形を呈し、北西コーナー部分に段がつく。床面からの深さは44cmを測る。壁から130cm離れて柱穴を確認したが、床面からの深さが15cmしかなく住居に伴うものかは不明である。遺物の大部分は床面から浮いた状態で出土している。

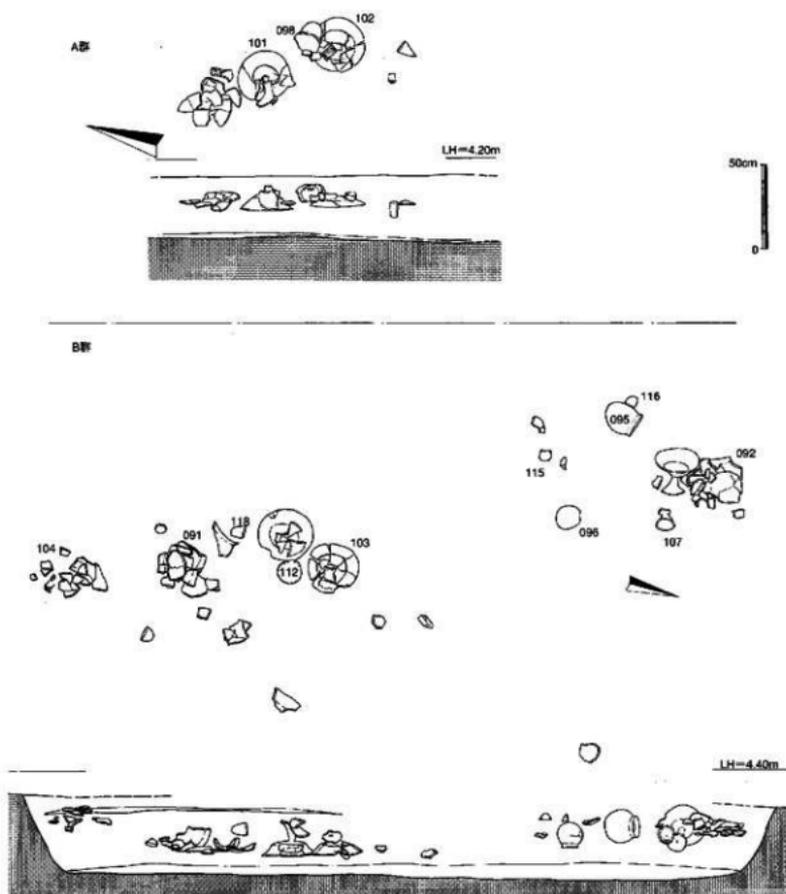
出土遺物 (第33図057~071) 057~059は甕である。057は口径24cm、器高32cmを測る。外面は全面に煤が付着している。058は口径19cm、器高25.5cmを測る。内外面ともハケ調整。外面全面と内面底部に煤が付着する。059は口径10.8cm、器高11cmを測る。外面全体に煤が付着。060・061は手捏ねの椀。060は口径6cm、061は口径3.8cm、器高3.7cmを測る。062は鉢である。内面はハケ、外面はタタキを施す。口径15.7cm、器高7.2cmを測る。063・064は高坏である。065~069は器台である。065は口径10.6cm、器高13.5cmを測る。066は口径13cm、器高14.2cmを測る。067は口径11.4cm、器高14.5cmを測る。069は支脚である。底部径9.2cm、器高6.6cmを測る。全面ナテ調整でシボリの痕跡がみられる。頂部に焼成前の穿孔あり。070・071はタタキ石である。各面をタタキ石として使用するほかスリ石として使用した痕跡がみられる。

S C 0 3 7 (第30図) 調査区西側中央で検出した。S C 0 6 8を切る。南北4.03m、東西3.5mを呈す。南北に長い隅丸方形を呈し、明確に伴う柱穴は不明である。床面からの深さは71cmを測り、床面は緩やかなカーブを描く。南側に床面から60cmの高さの段がつく。また北側で径113cm、深さ50cmを測る円形の土壇を確認した。遺物の大部分は床面から20cm以上浮いた状態で出土した。住居跡が前半と後半の調査の境に来てしまったため、東側と西側では遺構、床面の深さなどについて若干の違いが出てしまった。出土遺物 (第34図072~081)。072~077は甕である。072は口径21cm、器高29.3cmを測る。ハケ調整。外面上半と内面下半に煤が付着。073は口径22.4cm。外面に煤付着。074は口径21cm、器高20.6cmを測る。全体がハケ調整。灰白色を呈し、口縁から底部までの黒斑を有す。075は口径16cm、器高16cmを測る。外面はナテ後へラ削りを施す。外面全面に煤付着。078は甕。079は手鎌である。鉄製の穂摘み具である。網長い鉄板の両端を折り曲げている。長さ9.2cm、幅2.6cmを測る。刃部が2ヶ所めくれている。080は滑石製石錐である。長さ12.1cm、幅5.4cm、厚さ2.7cm、重さ228gを測る。長径中央に溝を切り、端から1.5cmのところから穿孔する。孔から端部までの溝の縁が摩耗している。081は砥石である。中央に敲打痕がみられる。

S C 0 3 8 (第30図) 調査区北端中央で検出した。ほとんどが調査区外に延びており現状では南北1.5m、東西3.2mを測る。柱穴は未検出で床面からの深さは50cmを測る。遺物は床面から20cm以上



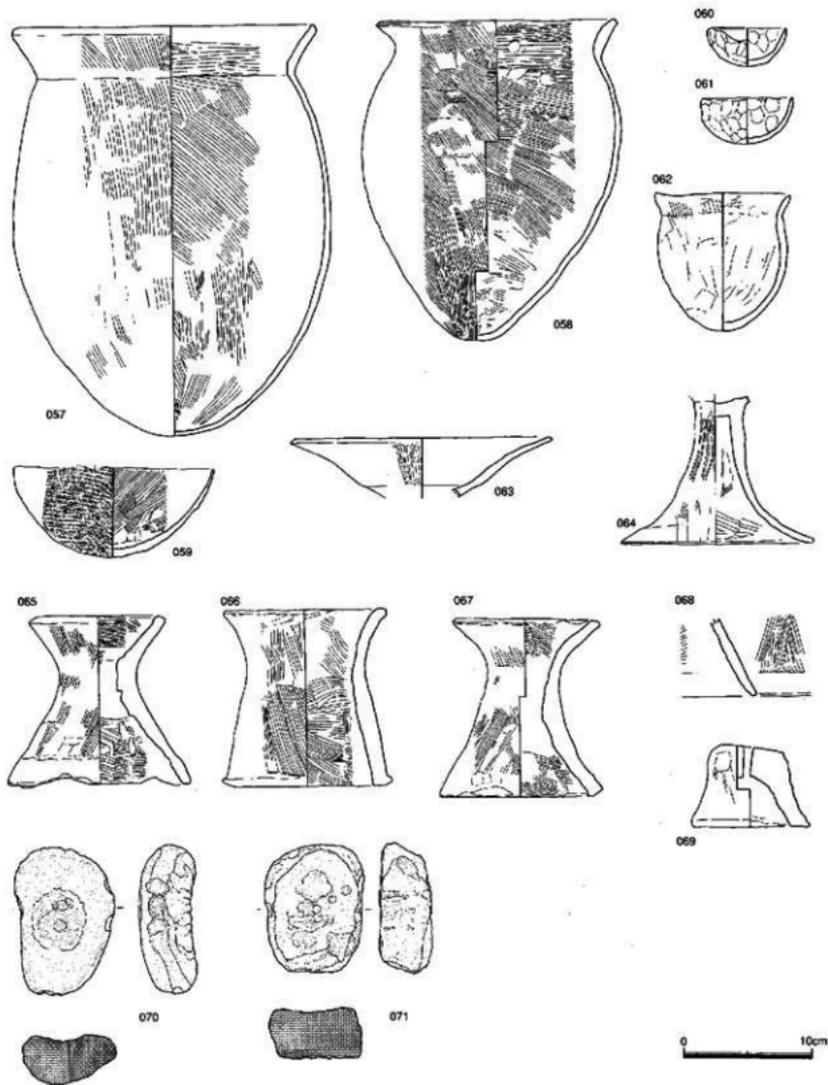
第31圖 竪穴式住居実測図2 (1/60)



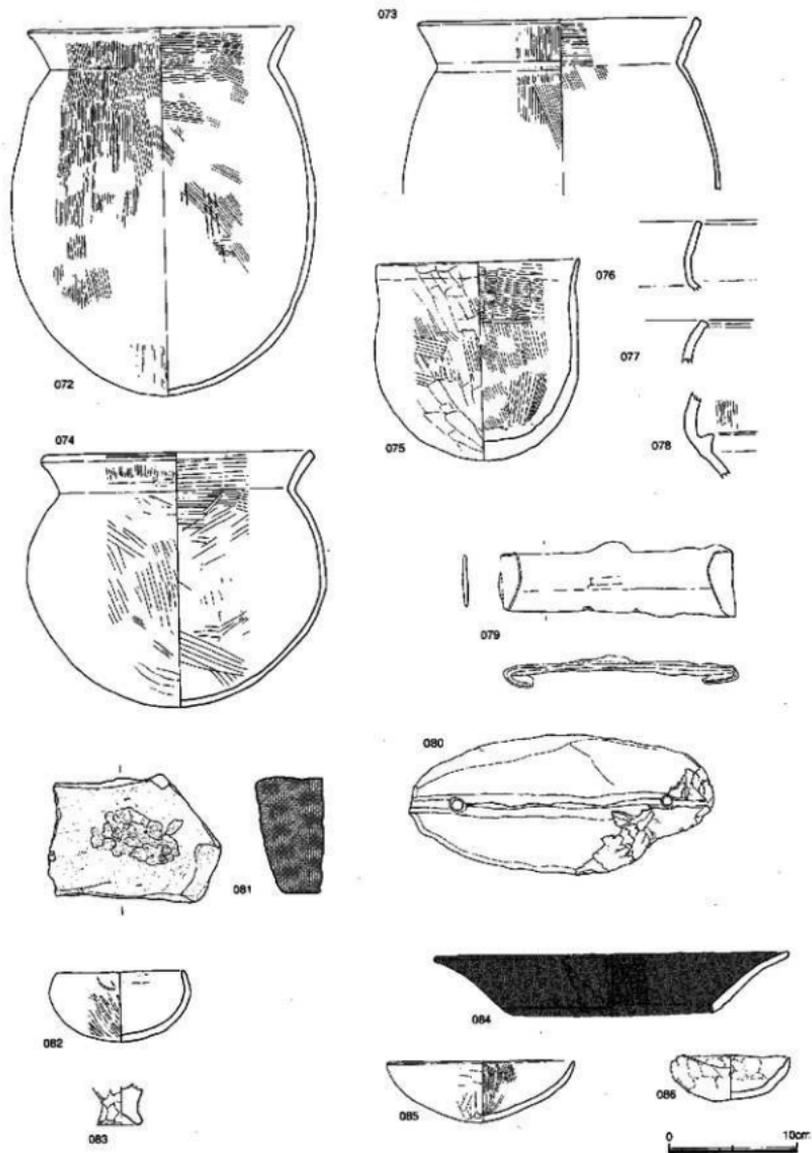
第32図 SC078遺物出土状況実測図 (1/30)

浮いた状態で出土した。出土遺物 (第34図082・083)。082は鉢である。口径10cm、器高5.6cmを測る。外面底部はヘラミガキを施す。全体に煤状のものが付着する。083は手摺ね土器の底部である。灰白色を呈し胎土に雲母片、黒い微粒子を含む。焼成は良好である。

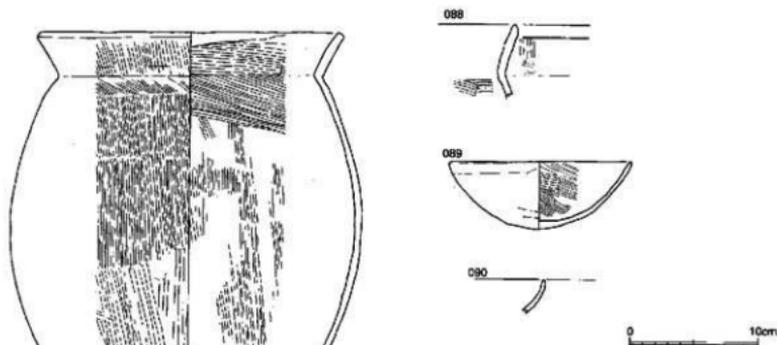
SC061 (第30図) 調査区の北端で検出した。SK045に切られる。西隅がいびつであり、壱穴式住居以外の遺構である可能性もある。現状で深さ53cmを測る。(第34図084~086)。084は高坏の坏部である。復元口径27.9cmを測る。内面には連続したミガキがみられる。外面はナデ後ミガキ。両面とも赤色顔料を塗布。口縁部に黒斑有り。085は鉢である。口径14.7cm、器高



第33圖 壑穴式住居出土遺物実測圖1 (1/4)



第34图 墓穴式住居出土遺物実測図2 (1/4)



第35図 竪穴式住居出土遺物実測図3 (1/4)

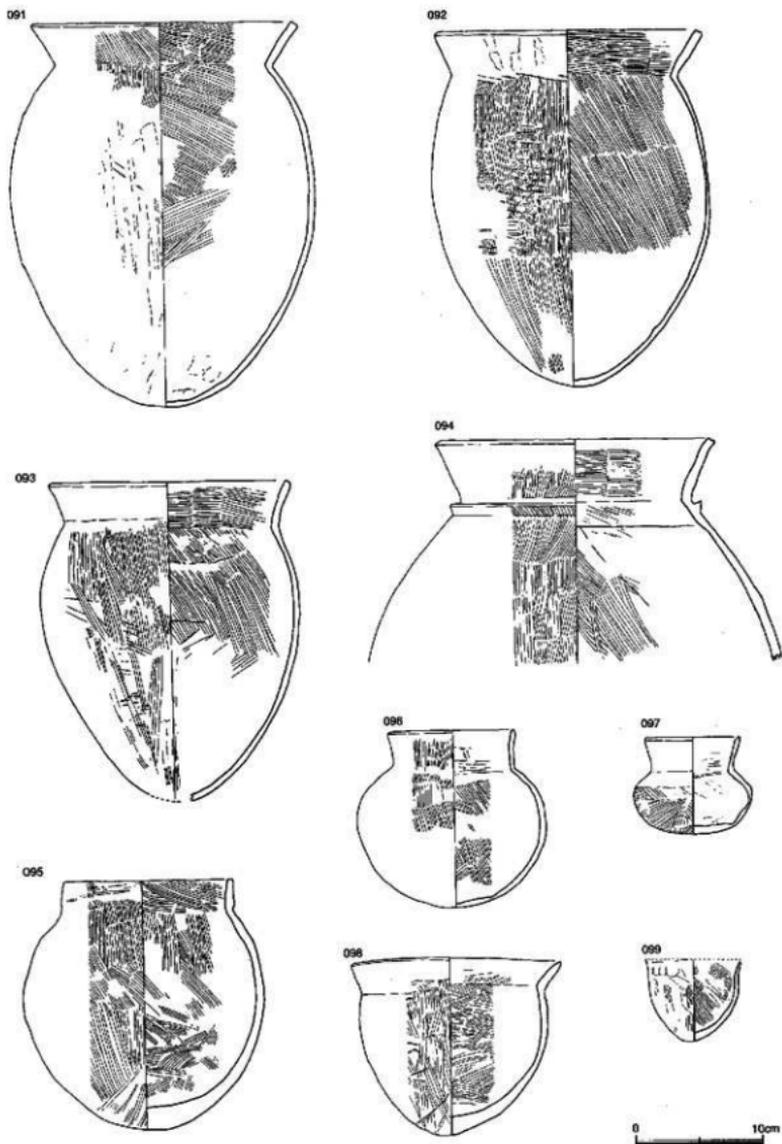
4.9cmを測る。外面は粗いミガキ、内面はナア後ミガキを施す。086は手捏ねの椀である。口径9.3cm。

SC068 (第31図) 調査区西側中央で検出した。

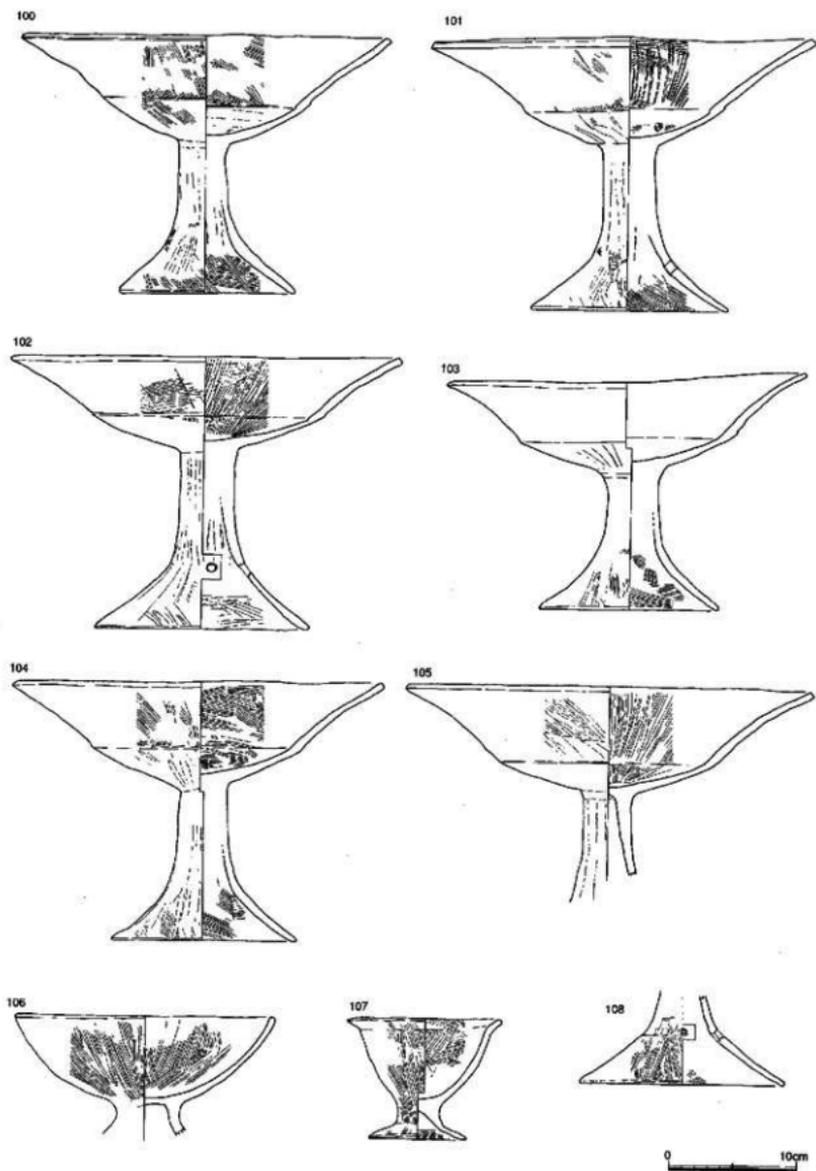
SC037に切られる。北側は隅丸方形であるが、南側は円形に張り出す不正形を呈す。現状で南北4.0m、東西で2.7mを測る。床面からの深さは14cmを測り、北辺では床面から24cmの高さに段がつく。この住居に伴う明確な柱穴は不明である。遺物は床面から避難した状態で出土している。出土遺物(第35図087~090)。087・088は甕である。087は口径23.1cm、器高36cmを測る。底部は丸みを持ち全体にハケを施す。外面全面と内面底部に煤が付着。089・090は鉢である。SC078 (第31図) 調査区の南西端で検出した。南と西端がわずかに調査区外にでている。現状で南北5.1m、東西6.1mを測り本調査区内では最大の竪穴式住居である。掘り方は方形を呈し、床面からの高さは60cmを測る。主柱穴は2本と思われ、北壁から2.5m離れた長軸方向に2.7mの間隔で設けられている。柱穴はほぼ円形を呈し径40~50cm、床面からの深さは13~22cmである。

遺物の多くは床面から浮いた状態で出土した。レンズ状の堆積をしている。出土した土器はほとんど完形で横倒しの状態で出土したものが多く、なんらかの祭祀で使用されたものと思われる。

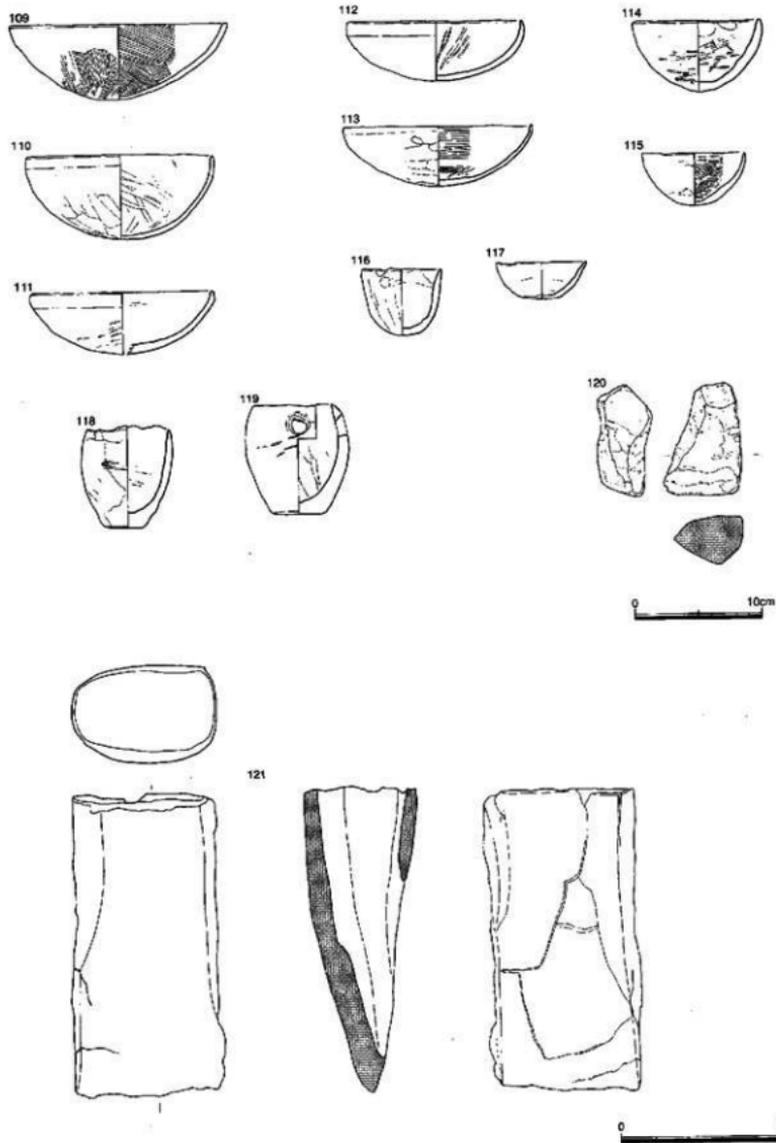
出土遺物(第36~38図091~121)。091~093は甕である。091は口径21cm、器高31cmを測る。底部は丸みを帯びる。外面の全面と内面の下半に煤が付着。092は口径21.5cm、器高28.7cmを測る。胴部は丸みを帯び底部は尖底。外面はタタキの後ハケを施す。外面は全体に、内面は胴部下半に煤が付着。093は口径19.2cm、器高25.5cmを測る。胴部は上半に最大径を持ち、底は尖底気味である。外面は全体に、内面は胴部下半に煤が付着。094~097は壺である。094は口径22cmを測る。橙色を早し胴部に黒斑有り。焼成良好。095は口径13.6cm、器高20cmを測る。口縁は垂直に立ち上がる。全体にハケ調整。成形・調整ともやや雑である。外面全面に煤が付着。096は口径10cm、器高14.3cmを測る。外面上半と内面胴部に厚い煤が付着。097は口径7.6cm、器高7.8cmを含む。色調は灰白色を呈す。焼成良好。098・099は鉢である。098は口径16.4



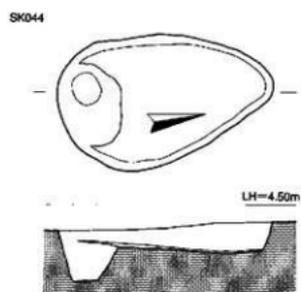
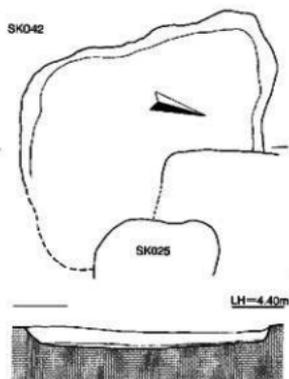
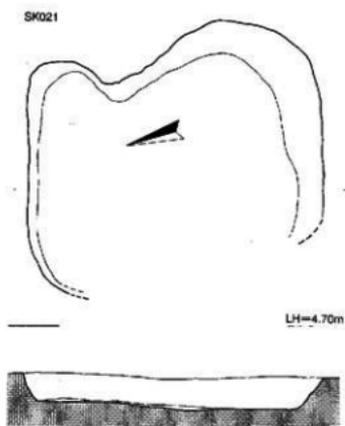
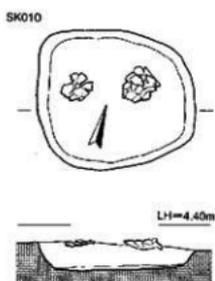
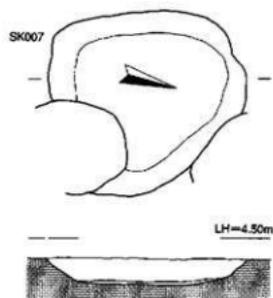
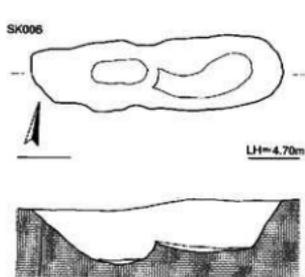
第36圖 竈穴式住居出土遺物実測図4 (1/4)



第37圖 竪穴式住居出土遺物実測図5 (1/4)

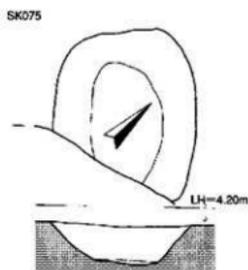
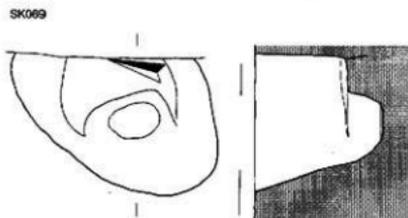
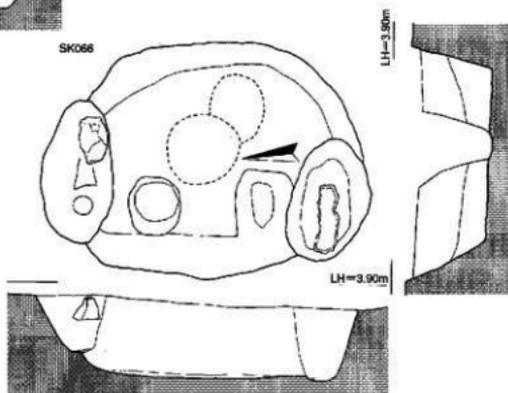
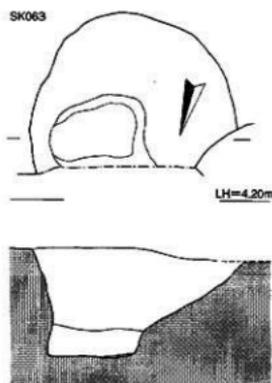
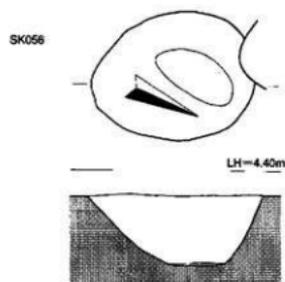
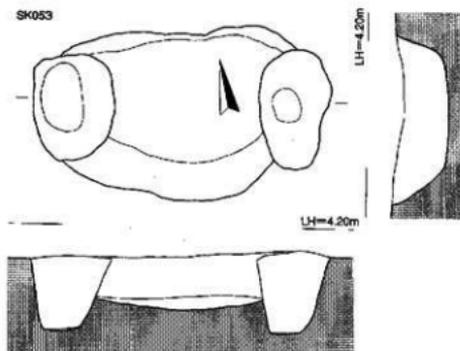


第38图 竖穴式住居出土遺物実測図6 (1/4・2/3)



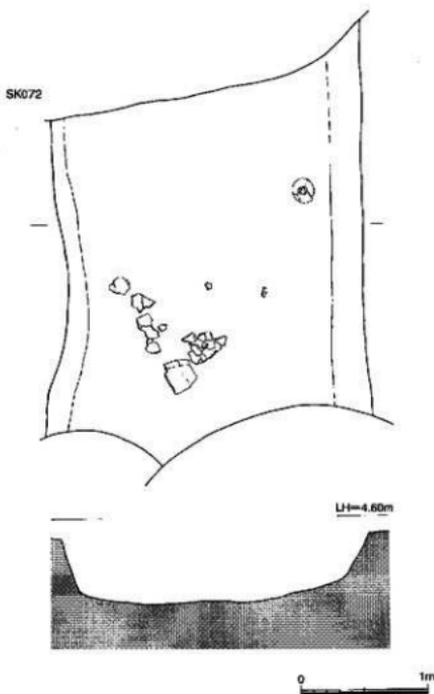
第39图 土坑实测图1 (1/40)





0 1m

第40回 土坑実測図2 (1/40)



第41図 土坑実測図3 (1/40)

を測る。

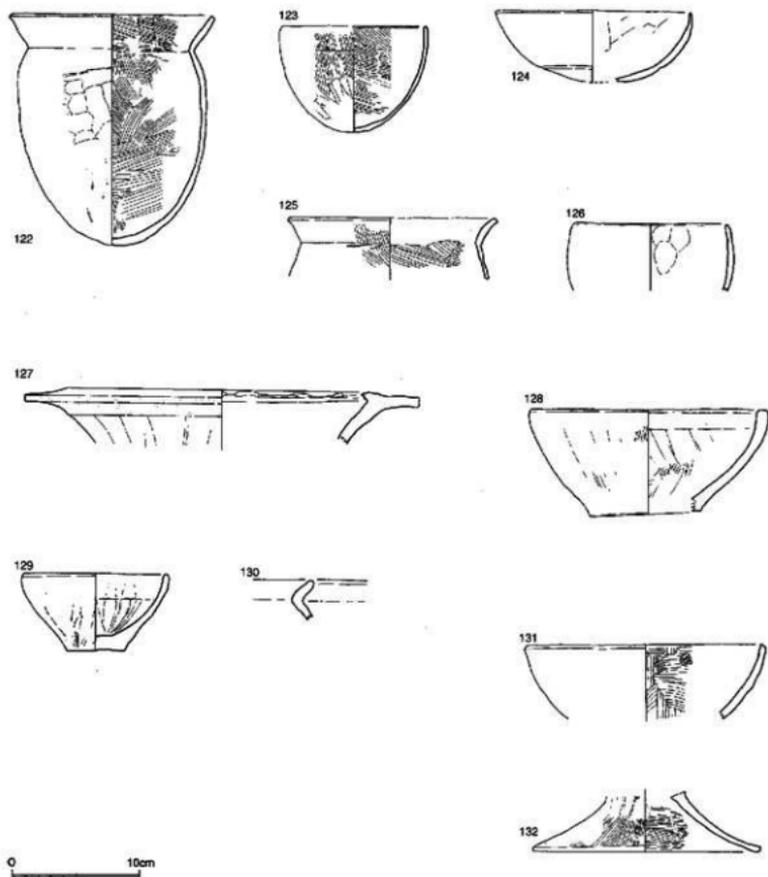
SC080 (第31図) 調査区の南端で検出した。遺構の多くが調査区外に位置し、全体の規模は不明であるが現状で東西3.4mを測る。隅丸方形を呈すると思われる。床面からの深さは64cmを測る。

## 2) 土坑

SK006 (第39図) 調査区の東側で検出した。SK050を切る。主軸をN-79°-Eにとる。掘り方は東西に長い不正形の溝状を呈す。東側は深さ30cmであるが西側は一段低く深さ40cmを測る。遺物は出土していない。

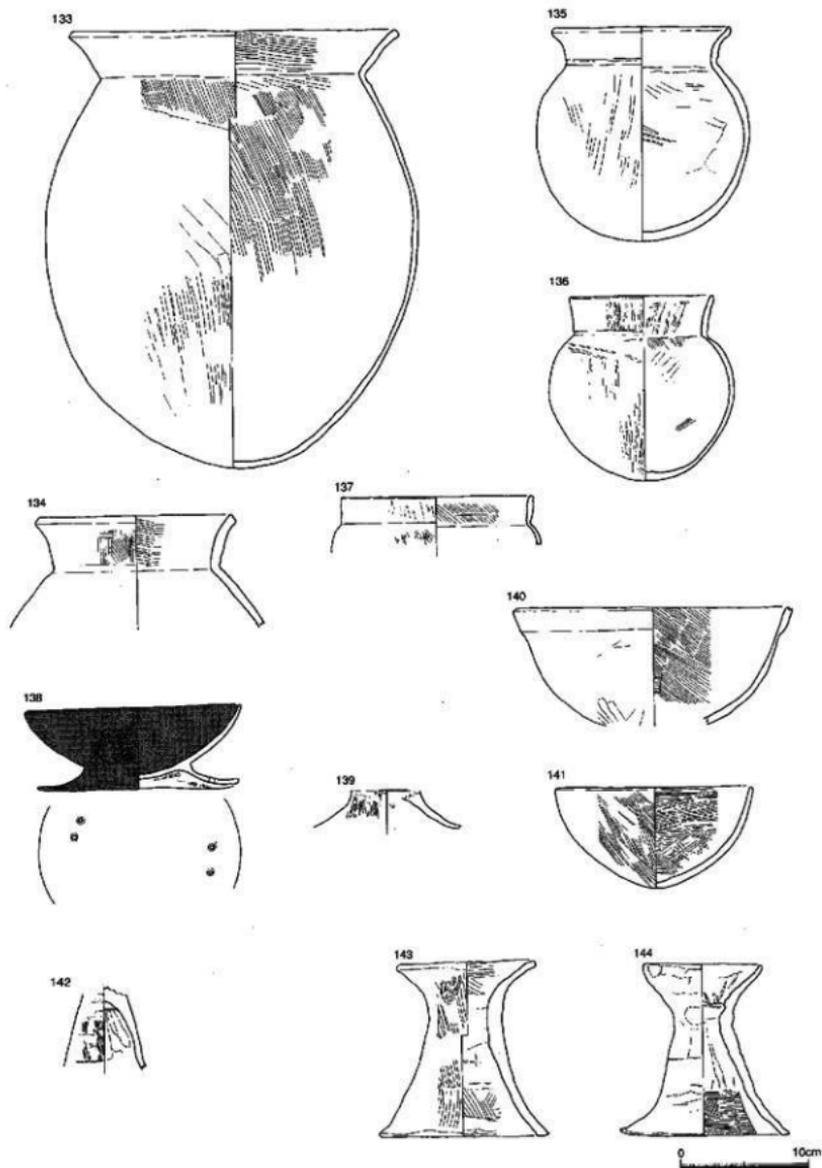
SK010 (第39図) 調査区中央南寄りに位置する。SK012を切る。掘り方は平面隅丸の方形を呈し断面は浅皿状である。覆土は暗黄褐色砂のブロックを含む黒褐色砂で床面から27cm浮いた状態で壘が出土した。出土遺物(第42図122~124)。122は甕で口径16.2cm、器高18.6cmを測る。内面ナア、外面ヘラケズリを施す。器壁は淡黄褐色を呈し、外面全体に煤が付着。123は口径11.6cm、器高8.5cmを測る。ナア調整で外底部はヘラケズリ。胎土は白色砂を多く含む。124

cm、器高14.3cmを測る。ハケ調整。淡赤褐色を呈す。胎土は石英、角閃石を多く含む。焼成良好。099は口径7.7cm、器高6.6cmを測る。全体にハケを施す。赤褐色を呈す。100~108は高坏である。109~115は鉢である。109は口径17.2cm、器高6.1cmを測る。110は口径15cm、器高6.8cm。111は復元口径14.6cm、器高5cm、112が口径14cm、器高4.8cmを測る。114は口径10cm、器高5.8cmを測る。底部は尖底気味で器壁は8mmと厚い。にぶい褐色を呈す。115は口径8.2cm、器高4.3cmを測る。116・117は手捏ねの鉢である。116は口径6.3cm、器高4.3cmを測る。にぶい褐色を呈し内面口縁部にタール状の煤が付着。117は口径7.5cm、器高3cmを測る。118はコップ型の土器で口径6.5cm、器高8.2cmを測る。119は飯焼である。復元口径7cm、器高7.7cmを測る。底部は平らで口縁は強く内湾する。口縁から1cm下の所に焼成前の穿孔。にぶい褐色を呈し石英・長石を多く含む。焼成は良好。120は軽石で粗く成形している。浮子の未製品か。121は鉄斧である。長さ8.9cm、幅4.4cm、ソケット部の厚さ3.4cm

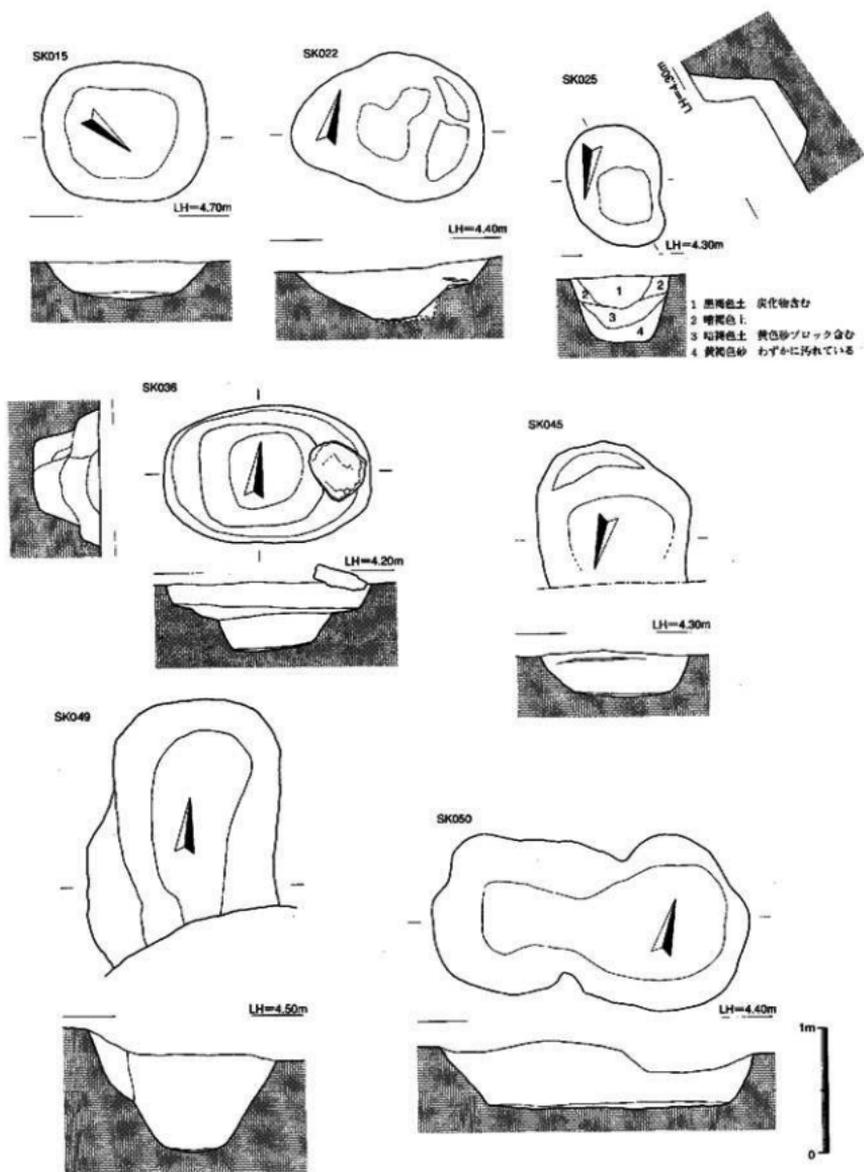


第42図 土坑出土遺物実測図1 (1/4)

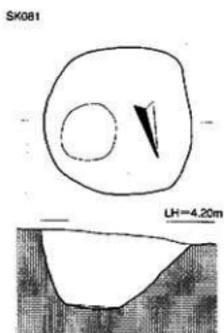
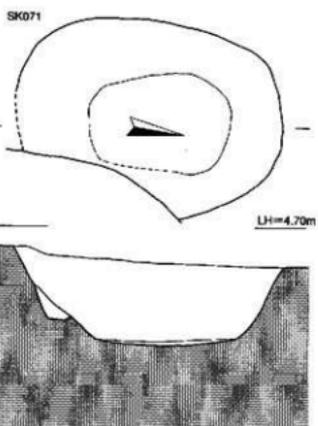
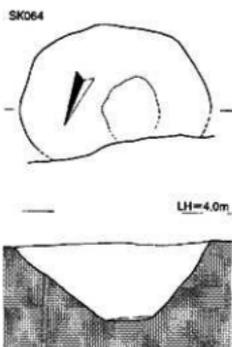
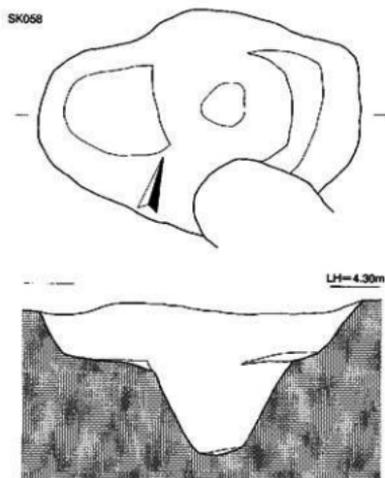
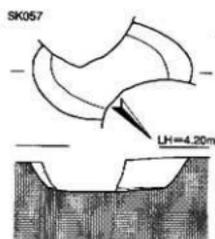
は口径15.6cm、器高5.6cmを測る。調整はナテ。暗橙色を呈す。白色砂を多く含み焼成良好。SK021 (第39図) 調査区東端で検出した。歪な方形で断面浅皿状を呈す。出土遺物 (第43図 133~144)。133は甕である。口径26cm、器高35cmを測る。調整はナテ。外面全体に煤が付着。器壁は淡黄橙色を呈し白色砂を若干含む。焼成良好。134は壺である。口径15.6cmを測る。調整は粗いハケ目。135・136は丸底の壺である。135は口径13.0cm、器高17.3cmを測る。粗いハケ調整。淡黄橙色を呈し、胎土は白色砂を多量に含む。焼成は良好。136は口径11.4cm、器高14.9cmを測る。外面はヘラミガキを施す。淡橙色を呈し、石英・長石を多量に含む。器壁は薄く焼成は良好である。137は直口壺である。口径17.3cmを測る。淡黄橙色を呈し、胎土は白色砂を僅かに含む。焼成は良好。138・139は台付きの鉢である。138は口径17cm、器高7.7cmを測る。調整はこまかなヘラミガキで全体に赤色顔料を塗布する。140・141は鉢である。140



第43圖 上坑出土遺物実測図2 (1/4)



第44図 土坑実測図4 (1/10)



第45图 土坑穴测图5 (1/40)

は口径22cmを測る。内面ナデ、外面ヘラケズリ調整で淡褐色を呈す。焼成良好。141は口径15.8cm、器高8cmを測る。調整はナデ。淡赤褐色を呈す。焼成は良好。142は高坏の脚部である。ヘラミガキを施し淡褐色を呈す。胎土精良。焼成良好。143・144は器台である。143は口径11cm、器高14cmを測る。粗いハケ調整で淡黄褐色を呈す。胎土は粗く白色砂・雲母を含む。焼成良好。

144は口径9.5cm、器高13.8cmを測る。暗褐色を呈し、焼成は良好。

SK042 (第39図) 調査区北東寄りで検出した。歪な方形状を呈し、SK025と攪乱に切られる。断面は浅皿状を呈す。出土遺物(第42図125・126)。125は甕である。口径16.6cmを測る。褐色を呈し、外面は全体に煤が付着する。126は鉢である。口径12.1cmを測る。指オサエで成形したのち、かるくナデで仕上げる。白色砂を多量に含む。焼成良好。

SK044 (第39図) 調査区中央で検出した。SK050を切る。平面楕円形、断面浅皿状を呈し南側に柱穴状の掘り込みがある。

SK053 (第40図) 調査区の東寄りで検出した。やや歪な長方形を呈し、覆土は黄白色砂で両側に赤褐色上の柱穴を持つ。長径220cm、短径176cmを測る。柱穴の深さは約60cmを測る。

SK056 (第40図) 調査区の中央東寄りで検出した。平面楕円形で断面逆台形を呈す。

SK063 (第40図) 調査区の北端で検出した。平面は円形を呈し、北側は調査区外に延びる。覆土は暗黄褐色砂で白色砂のブロックを含む。出土遺物(第42図129・130)。129は碗である。口径11.6cm、器高6.2cmを測る。淡黄褐色を呈す。130は甕口縁である。黄白色で焼成不良。白色砂を多量に含む。

SK064 (第45図) 調査区の北端で検出した。SC061・SK045に切られる。現状で長径148cm、短径109cm、深さ65cmを測る。断面は逆台形を呈す。

SK066 (第40図) 調査区の北側で検出した。平面楕円形を呈し両側に柱穴を持つ。中央上坑は覆土暗褐色砂で炭化物を含む。両側の柱穴は覆土赤褐色を呈し、上層に薄く粘土を含んでいる。

SK069 (第40図) 調査区の西端で検出した。SC068に切られる。平面は楕円形で断面逆台形を呈す。底部西側に掘り込みを持つ。

SK072 (第40図) 調査区の西端で検出した。SF003に切られる。住居の可能性もあるが、他の住居に比べ細長いので、土坑に分類した。床面から浮いて高坏が出土している。出土遺物(第42図131・132)131は復元口径19.1cm、内外面とも赤褐色。調整、成形とも粗雑。132は脚付きの鉢。調整はハケを施す。淡褐色を呈す。胎土は割と精良で白色砂を含む。

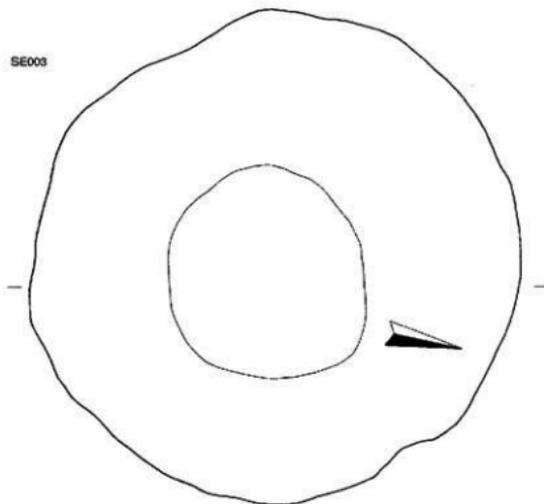
SK075 (第40図) 調査区の北西寄りで検出した。SC068に切られる。平面は楕円形、断面逆台形を呈す。

#### 4) 井戸

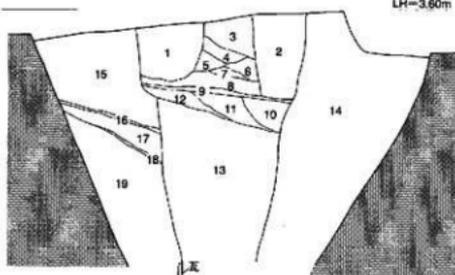
SE002 (第47図) 調査区の南東側で検出した。近現代の瓦組井戸である。掘り方は円形で径97cmを測る。内側に10枚の瓦を円形に組み井筒としている。井筒径67cmを測る。深さは4段目まで確認した。井筒内は砂で埋められていたが、比較的最近まで使用していたという言葉どうり井筒上層からコンクリ片が出土している。

SE003 (第47図) 調査区の南西側で検出した。掘り方はほぼ円形を呈し、径398cmを測る。遺構面から1m程度の深さで段が付き、その下はかなり狭くなる。確認できた最下部での掘り方径は約1mである。井筒は上端で135cmを測るが、下に向かって緩やかに狭くなり、遺構面から2m下で径約60cmを測る。井筒は木枠であるが標高1.8m地点で瓦を数枚確認した。湧水のため壁が崩壊して瓦

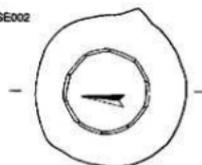
SE000



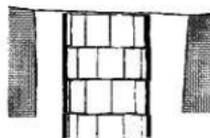
LH=3.60m



SE002



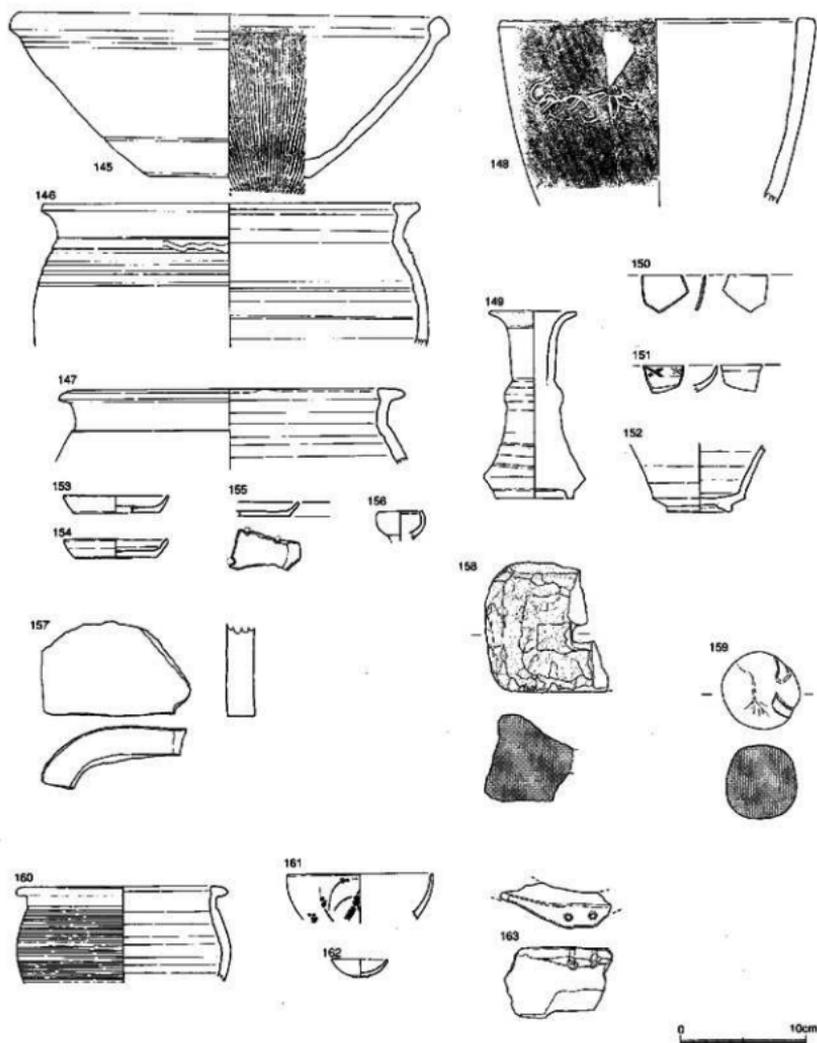
LH=4.60m



- 1 暗褐色土 黒色土ブロック含む
- 2 暗褐色砂 炭化物・雑土
- 3 暗褐色砂
- 4 暗褐色砂と黒土の互層
- 5 暗褐色砂
- 6 暗褐色砂
- 7 褐色砂
- 8 褐色砂
- 9 褐色土 赤褐色土含む
- 10 褐色砂 瓦片含む
- 11 暗褐色砂 炭化物を含む
- 12 白色粗砂
- 13 暗褐色砂 炭化物
- 14 暗褐色砂 黒色土ブロック含む
- 15 暗褐色砂
- 16 白色砂層
- 17 暗褐色砂
- 18 白色砂
- 19 暗褐色砂

0 50cm

第46図 井戸実測図 (1/80)



第47图 井戸出土遺物実測図 (1/4・1/1)

組みかどろかの確認はできなかつた。湧水点以下は瓦組みの可能性も考えられる。出土遺物(第48図145~163)。145は摺り鉢である。146・147は施釉の甕である。148は火鉢である。口径25.2cmを測る。外面茶褐色を呈す。外面に笹と虎のスタンプを押す。左右にも同一のスタンプがみられ、外周に5ヶ所押印していると思われる。149は青磁の甕である。150・151は染め付けの碗である。152は青磁碗である。153~155は土師皿である。155は焼成前に底部に穿孔している。156は徳利の口縁部か。口径3.4cmを測る。157は緑釉の瓦である。須恵質の胎土に厚く釉がかかる。158は石鍾である。159は土製の玉である。径1.6cmを測る。160~163は掘り方から出土した。160は土製の甕である。161は染付けの碗である。162は紅皿である。163は土製の鍋である。取手に上下方向の穿孔が2カ所みられる。

#### 4. 時期不明の遺構

これらの遺構は遺物が出土していないため時期が確定していない。

SK015(第44図)調査区の東端で検出した。古墳時代初頭と思われるSK021を切る。平面形は隅丸長方形で断面は浅皿状を呈す。長径128cm、短径109cm、深さ29cmを測る。覆土はしまりの良い黒色土で炭化物を含む。

SK022(第44図)調査区中央北東寄りで見出した。長径151cm、短径119cm、深さ48cmを測る。平面は楕円形で断面逆台形を呈し、床から約25cmの高さで東側に段を持つ。

SK025(第44図)調査区の北東寄りで見出した。SK042、ST047・048を切る。長径98cm、短径74cm、深さ54cmを測る。平面形は楕円形で断面逆台形。覆土は黒色土で炭化物を含む。

SK036(第44図)調査区の北寄りで見出した。ST067を切る。平面は楕円形で長径161cm、短径109cmを測る。深さ22~28cmで平坦になるが、中央に約25cmの掘込みを持つ。覆土は黒褐色砂で炭化物を含む。表面東側に48×40cmの扁平な安山岩があり、配石墓の可能性が考えられる。

SK045(第44図)調査区の北端で見出した。ST067を切る。北半分は調査区外に延び、現状で東西122cm、南北100cmの方形で深さ37cmを測る。断面逆台形を呈し南側に床面上30cmで段を持つ。

SK049(第44図)調査区の西側で見出した。SE003に切られ、SC037を切る。平面形は隅丸の長方形で長径170cm、短径134cm、深さ79cmを測る。断面逆台形を呈し覆土は暗褐色を呈す。

SK050(第44図)調査区の中央に位置する。SK006に切られる。東西に長い楕円形を呈し、長径249cm、短径139cm、深さ54cmを測る。断面逆台形を呈す。覆土は暗黄褐色砂で上面は黄褐色砂のブロックを含み、一部黒色を帯びる。

SK071(第45図)調査区の西側で見出した。SE003に切られる。平面形は楕円形で長径約203cm、短径約162cm、深さ77cmを測る。断面は逆台形を呈す。

SK081(第45図)調査区の南側で見出した。平面は隅丸方形で径114cm、深さ62cmを測る。断面は逆台形を呈す。

## IV おわりに

今回の発掘調査で確認したのはこれまでの調査と同様に弥生中期の甕棺墓と弥生時代後期末から古墳時代にかけての集落である。8次・9次調査で確認された中期の住居跡は出土しなかった。

集落 6軒の竪穴式住居を検出した。全体の大きさが確認できた住居は少ないが、床面積は13㎡前後のものとは30㎡前後の2通りみられる。主柱穴についてはSC078の2本柱以外は確認できなかった。北東側のSC023・038が軸をほぼN-20°-E前後にとるのに対し、南西側に位置するSC037・068・078は軸をN-20°-W前後にとる。これらの差は当初砂丘の傾斜方向・もしくは時期差と思われたが、周辺2・6・7・8次調査の遺構分布図では両者は混在して分布しており、時期差については10次調査では住居に伴う遺物がほとんどないため詳しいことは分らない。近接する6・7次調査の担当者は竪穴式住居の時期について両者は混在する可能性を示している(福岡市埋蔵文化財調査報告書第483集)。

甕棺 時期は中期中葉から後葉にかけてである。2次調査のうち北側に接するC地区で28基の甕棺墓が検出されている。2次調査の方が時期幅が広いものの10次調査出土の甕棺とは時期が重なるものが多く、同一の甕棺墓群であると思われる。しかし、2次調査では蓋を持つ大型棺が集中しその周囲に小型棺が分布するのに対し、本調査地点では大型棺6基のうち4基は単棺でしかもあまり集中しないことやST047・067・083などが複数の小型棺を伴う可能性があること、2次調査では少ない中型棺の単棺が多くみられること、土器片を蓋として使用する土器蓋土壙墓がみられるなど異なる点が多い。その他本調査区ではST003が南限で、南端部では甕棺を確認していないことや東側に隣接する7次調査の北側に甕棺が出土していないこと、また6次調査以西では甕棺墓が確認されていないことから、2次調査のC地区と本調査区が西新町遺跡における甕棺墓の中心であると思われる。しかしそれとは別に7次調査の南東端に小型棺が分布することから7次調査の南東側にも別的小グループが存在する可能性がある。出土した甕棺を観察した結果では、そのほとんどが表面を嚙られており(上面だけでは限らないが上面に集中する)、一時地上に露出していたと思われる。嚙られた箇所が合口縁部に集中するものが多くみられ、中の屍体や口縁部の粘土を狙ったのであろうか。ST079は大型棺の底部を打欠いて蓋として使用しているが、下甕の甕内に挿入していた部分にも他と同様な風化と嚙られた痕跡がみられる。これは蓋として使用する前に長い間放置されていたためであり、当時地表に露出していた甕棺を割って(もしくは割れて転がっていた甕棺片を)再利用したものであろう。同様に土器蓋土壙墓などに使用された土器片も再利用の可能性が高いと思われる。また、小型棺・大型棺の両方で表面に赤色顔料が滴状に付着した個体がみられる。大きいたれた滴と細かく連続した滴が見られ、そのうちこまかな滴はハケについた液体をはらったときに見られる飛沫によく似ており、これは甕が丹塗りの土器と同じ場所で製作もしくは保管されていたことを示している。

ST017・018出土人骨についてはその特異な出土状況から弥生時代中期の争乱における戦死者例として紹介されている。たしかに隣接する2次調査のC区K19号甕棺墓から銅剣の先端部が出土して戦死者とされており、同様に戦死者の墓としての可能性も考えられる。ただST017を埋葬するときには明らかにST018の頭部に重なるよう意識して埋葬している。そのため017と018は同時に埋葬された可能性が高く、なぜ別々に埋める必要があったのだろうか。もし埋葬後に首を取返して埋めたとしたら、各地で出土している他の頭蓋骨の埋葬例が胴体と一緒に出土しないのは説明しづらい。また、葬送儀礼としても集団墓の中で他の甕棺との差や副葬品がないため証明は難しい。同様な埋葬の可能性を持つ例は皆無ではないが、まだ類例は少なく現在の段階で戦死者か葬送儀礼かの判断をするのは困難である。

## 附論1 弥生時代の小型甕棺にみられる施文について（西新町・藤崎遺跡の事例から）

九州北部の弥生時代の墓制を代表するものに甕棺墓がある。外容器である土器棺、甕棺は容量に応じて大型棺、小型棺あるいは成人棺、小児棺などと分類される。このなかで器高30cm代を主体とする小型の土器は、煮炊きで使用あるいは使用した口草の甕形土器を小児の埋葬に充てたという理解が一般的である。だが近年ではいわゆる小児棺に成人の頭部をおさめた事例も確認されているため本稿では小型棺と呼称する。金海式から立岩式段階までの甕棺墓に占める小型棺の割合は、約4.5%であるが、專業工人の存在が取りざたされる大型棺と比べて等閑視された感は否めない(福岡市博物館1998)。

西新町遺跡10次調査では、小型棺の山線平坦部に調整痕のある資料が6個体で認められた。調整痕は、爪先状の原体を連続して押圧したものと棒状の工具による沈線であった。とくに注目されるのは上下で調整痕が認められる73号甕棺である。この施文は上下でタッチは異なるが、ともに爪先状の原体を連続して押圧したもので、数少ない施文のある甕がセットとなっていることに興味をおぼえた。まず類型を集めようということで、埋蔵文化財センターに収蔵された西新町遺跡の小型棺について同様の調整痕を探したが見つけ出すことはできなかった。そこで隣接する藤崎遺跡の小児棺をあたって、1次調査出土の5点の資料に刻み目や沈線、ハケ目調整具の端部を押し当てた事例を確認することができたのである(浜石1981)。92号甕棺では1線の平坦面にハケ目調整具状の端部を押し当てた施文のある甕がセットでみられた。こうした施文のある土器の出土例は、埋葬施設だけに限られたものではない。三雲遺跡番上土器遺(柳田・小池1981)、比恵遺跡30次井戸(宮波1992)、周船寺遺跡10次調査溝(池田2000)、原遺跡20次調査の溝(蔵書上2001)でも出土しており、施文の意味を葬送儀礼以外にも目をむけて解釈すべきである。

合口となる大型棺の組合せについていえば、ストックされた土器棺をランダムに選んだとばかり言えない事例が確認されてきている。たとえば上下で同じ記号を捺刻したもの、絵面を描いたもの、特定集団墓における突出した大型棺の使用をあげることができる。ただし記号や絵面を描いたものは全体から見ると0.1%程度と稀少である。小型棺の施文の意味とは何か。ふたつの土器が特定の被葬者のために用意されたことを示唆するという以上の推測を現状では用意できていない。ただ小型棺の施文はこれまであまり注目されることになかった分野であり、類型の集成によって新たな知見が得られることが期待されるのである。西新町・藤崎遺跡の事例が、日常土器を埋葬に供したという前提に問題を提示したことは重要である。

註

F 福岡市博物館1998「弥生人のタイムカプセル」

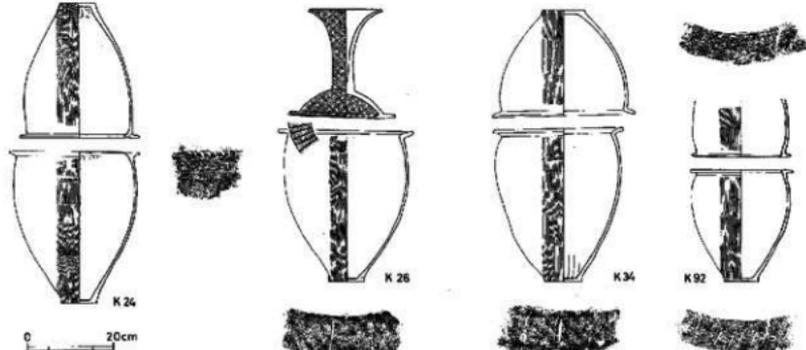
H 浜石賢也1981「藤崎遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第62集 福岡市教育委員会

J 池田祐司2000「II 周船寺遺跡10次調査」JR筑肥線緑地化地内埋蔵文化財調査報告書所収「福岡市埋蔵文化財調査報告書第654集」福岡市教育委員会

K 蔵書上寛2001「原遺跡10」福岡市埋蔵文化財調査報告書第688集 福岡市教育委員会

S 菅波正人1992「第4章 第30次調査地点 比恵遺跡群(1)」所収「福岡市埋蔵文化財調査報告書第289集」福岡市教育委員会

Y 柳田麻雄・小池史哲1982「三雲遺跡II」福岡市埋蔵文化財調査報告書第63集 福岡市教育委員会



第48図 藤崎遺跡1次調査出土の小型甕棺にみられる施文

# 西新町遺跡第10次調査出土人骨について

田中良之<sup>1)</sup>・平美典<sup>2)</sup>・坂元雄紀<sup>2)</sup>・重松辰治<sup>2)</sup>・石川健<sup>1)</sup>

1)九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座

2)九州大学大学院比較社会文化学府基層構造講座

## 1. はじめに

福岡市早良区西新町遺跡第10次調査において弥生時代の人骨が出し、調査を担当した福岡市教育委員会より九州大学大学院比較社会文化研究科（当時）基層構造講座へ人骨調査の依頼があった。そのため、田中および高久健二助手（当時、現埼玉大学）・金宰賢（現東亜大学校）が現地へ赴き、人骨の調査および取り上げを行った。人骨はその後九州大学へと搬送され、本講座において整理・分析を行った。以下にその結果を報告する。

なお、人骨は現在、九州大学大学院比較社会文化研究科考古人類資料室に保管されている。

## 2. 出土状態

### [ST004（4号人骨）]

台口甕棺の下腹底部付近に女性の上肢骨の一部と下肢骨の一部が認められた。全体に下腹底部方向にずれ込んだ状態であるが、左右とも大腿骨遠位と脛骨近位が接しており、右大腿骨近位近くに寛骨が位置することから、本来仰臥で、立て膝の姿勢から下肢が崩落したか、下肢を強屈して内側に曲げた姿勢を大きく崩していないと考えられる。

### [ST012（12号人骨）]

上下肢を強屈した小児の埋葬である。上肢は胸の前で腕を交差しており、左前腕が右前腕の上に位置する。下肢は両膝が交差した上肢の上にくるほど強く屈している。全体に窮屈な姿勢で、脊椎も大きく湾曲して頭蓋骨に至っている。

このように、窮屈な右側臥屈葬であるが、倒立させた姿勢で被覆する埋葬であったことから、このような姿勢になったものと考えられる。

### [ST017（17号人骨）]

18号甕棺の下腹の上に埋置された小児棺から成年男性の頭蓋骨が出上している。甕棺は18号下甕と同じく底部を北に向けているが、頭蓋骨は頭頂を北にして入れられている。頭蓋骨は顔面を含む前半部を欠いているが、右側に傾いた状態である。後頭骨大後頭孔に近接して第1・2頸椎（環椎・軸椎）が認められる。下顎は左下顎体と切歯～小臼歯が舌側面（内面）を上になっている。この位置から見ると、本来関節していた位置から、軟部組織の腐朽後に現在の位置に転落・回転したと考えられる。

### [ST018（18号人骨）]

頭頂を北にとった男性の仰臥葬であるが、頭部を欠いている。そして、この人骨を取納した甕棺直上のちょうど頭蓋骨の位置に、頭蓋骨を入れた小児棺（ST017）が埋められていた。主軸もきれいに合わせてあることから、両者が意図的に配置されたことは疑いない。

右 upper 肢は強屈し、手は回外した状態である。左 upper 肢は肘を直角に曲げ、基節骨の近位が頭蓋骨側を向くことからみて、手を握った状態である。下肢は、大腿を左右とも大きく広げた姿勢であり、左脛骨・腓骨は甕棺の口縁部に沿うように曲げている。大腿骨との位置関係からみて、膝関節に乱れはなく、本来の位置にあると考えられる。右の脛骨と腓骨は膝関節から下腹内にずれ込んだ状態であるが、

肘骨の一部は膝関節の位置にある。左下腿と同様な姿勢であったものが、軟部組織の腐朽過程が甕棺の開口時にこの位置にずれこんだものと考えられる。したがって、この甕棺は合口ではあるものの、人骨の両下肢を甕棺の口縁部に沿うようにして曲げ、下墓内に納めて、土を被せて埋葬したと考えられる。

【ST024 (24号人骨)】

壺形棺の底部付近に頭骨が位置し、ほとんどが上半身の骨である。熟～老年の男性で、頭蓋骨は後方へと回転し、下顎も関節状態から落ちた状態であるが、位置関係からみて本来は閉鎖していたものと考えられる。頭蓋骨に接するようにして第1～3頸椎が関節状態で続いている。それ以下の頸椎・胸椎もこれに続く位置にあるが、前後が反転していたりして、本来の位置をやや動いている。左右とも肩甲骨・上腕骨・尺骨・橈骨の位置関係は、上肢を強屈した姿勢を示しており、肋骨もほぼ胸郭の位置から大きくは離れていないものの、左右の肩甲骨は過度に接しており、本来鎖骨がある位置に肋骨が位置するなど、明らかに乱れた状態である。

このように、本人骨は成人男性の埋葬でありながら、壺形土器を使用しており、人骨もまた上半身のみというものである。しかも、上半身の骨も、おおよそは上肢を強屈した埋葬姿勢であったことを示すものの、細かい位置関係にも乱れが認められることから、この人骨は軟部組織の腐朽がある程度進行してからこの壺棺に納められたと考えられる。そして、上半身だけであることから、何らかの事情を背景とした異常な埋葬といえる。

【ST047 (47号人骨)】

単棺に成年男性が頭から挿入されていた。頭蓋骨を除いて人骨の保存は不良であるが、頭蓋骨は右に傾き、左右大腿骨が骨盤と想定される位置から近位を頭側に向け、左に倒したような姿勢であることから見て、右側臥で下肢を強屈した姿勢であったと考えられる。

【ST059 (59号人骨)】

小児棺の半分を被覆に用いた墓であり、胴部の下から部位不明の骨片がまとまりなく散在して出土している。

【ST060 (60号人骨)】

小児棺の底部付近から歯冠のみが出土している。一部は歯列弓のままの状態であり、この事実から頭から棺に挿入されたことが知られる。

【ST067 (67号人骨)】

頭蓋骨のみ出土している。底部付近に頭蓋骨が位置し、後頭骨が底部側であることから、頭から棺に挿入されたと考えられる。

【ST074 (74号人骨)】

甕棺は破壊され、人骨は成人で右側頭骨から上顎骨にかけてが部分的に遺存するのみである。歯牙は上顎骨に植立した状態で検出され、遊離歯もほぼ原位置を保っている。したがって、この人骨は西に頭位をとって葬られたと考えられる。

【ST076 (76号人骨)】

合口甕棺の棺底近くから歯冠、骨片のみが出土している。

【ST083 (83号人骨)】

頭蓋骨片のみが遺存していた。頭蓋骨の表面には赤色顔料が付着している。



【年齢・性別】

年齢は、大部分の永久歯は未萌出であるが、第1大臼歯は萌出している。また、第2大臼歯は歯冠が完全に形成されるものの、歯根は未形成のため、6~7才の小児と推定される。

17号髑髏人骨

【保存状態】

保存状態はやや良好である。頭蓋骨は、冠状縫合付近と左蝶前頭縫合付近の前頭骨、左右顴状縫合付近を除く左右頭頂骨、鱗状縫合付近および乳様突起を除く右側頭骨、外耳孔付近の左側頭骨、ラムダ縫合と外後頭隆起を含む後頭骨が遺存している。後頭骨外後頭隆起は顕著ではないものの、上項線とともに発達する。矢状縫合は外板・内板ともほぼ閉じており、冠状縫合は外板が開き内板は閉鎖、ラムダ縫合は外板が閉じかけており内板は完全に閉じている。また、左眼窩の一部も遺存している。下顎骨は、オトガイ隆起および左オトガイ孔付近が遺存している。

また、歯牙も一部認められた。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

$\overset{\bullet}{M^3}$	$\overset{\bullet}{M^2}$	$M^1$	$\overset{\bullet}{P^2}$	$\overset{\bullet}{P^1}$	$C$	/	/	/	/	/	/	$\overset{\bullet}{M^1}$	/	$\overset{\bullet}{M^3}$	
/	/	$M_1$	$P_2$	/	$C$	$I_2$	$I_1$		$I_1$	$\bigcirc$	$\bigcirc$	$\bigcirc$	$P_2$	/	/
/	/	$\overset{\bullet}{\cdot}$	$\overset{\bullet}{\cdot}$	/	$\overset{\bullet}{\cdot}$	$\overset{\bullet}{\cdot}$	$\overset{\bullet}{\cdot}$		$\overset{\bullet}{\cdot}$	$\bigcirc$	$\bigcirc$	$\bigcirc$	$\overset{\bullet}{\cdot}$	/	/

歯牙咬耗度は橋原(1957)の2° a~2° bである。その他部位不明の歯牙の破片が認められる。

軀幹骨としては環椎、軸椎が遺存している。

【年齢・性別】

年齢は、歯牙咬耗度および頭蓋主縫合の癒合程度から、成年後半から熟年にかけてと推定される。また、性別は、外後頭隆起が比較的発達することからみて、男性と判定される。

【特記事項】

骨表面に齧齒類による顕著な咬傷が認められたが、後頭骨に集中している。なお、環椎・軸椎には刀創などの傷は認められなかった。

18号髑髏人骨

【保存状態】

保存状態はやや良好であるが、頭蓋骨を欠いている。

軀幹骨は頸椎片3、胸椎片6、腰椎片5、左右頰骨骨体部、左右第1肋骨片、その他肋骨片多数が遺存している。

上肢骨は、左右関節窩付近の肩甲骨、左右上腕骨骨体部、左右尺骨骨体部、左右橈骨骨体部が遺存している。上腕骨の三角筋筋面の発達はやや弱い。さらに中手骨片3、基節骨5、中節骨4も認められる。

下肢骨は、大坐骨切痕付近の右寛骨、大坐骨切痕および寛骨臼窩付近の左寛骨、仙骨片が遺存している。また、左右大腿骨骨体部、左右脛骨骨体部、左右腓骨骨体部、右距骨片も遺存している。大坐骨切痕角は小さく、脛骨ヒラメ筋線は強く発達しているが、大腿骨粗線はそれほど発達していない。右寛骨の耳状面は平滑化が進行するが、多孔質にはなっていない。

これらの他に、部位不明骨片が多数認められる。

【年齢・性別】

年齢は、骨端が完全に癒合していることから成人であることは明かであり、寛骨耳状面観からみて、成年の後半以降で、熟年の後半には至らないと推定される。性別は、大坐骨切痕角が狭いことや、ヒラメ筋線の発達から男性と判定される。

【特記事項】

全身に齧歯類による咬傷が認められた。一部顕著な部分もあり、左尺骨は骨間縁を嚙り取られて変形している。甕棺に埋葬される前に囃られた可能性も考えられるが、咬傷は人骨のうち棺内で表に出ている部分に限定されるので、棺内に遺体が置かれた後に潜入した鼠による可能性が高い。なお、刀創などの傷は認められなかった。

24号甕棺人骨

【保存状態】

保存状態は不良である。頭蓋骨は、右線前頭縫合付近を除く前頭骨、右冠状縫合・鋸状縫合付近を除く左右頭頂骨、側頭骨鱗部・線形骨大翼側頭面を除く右側頭骨、線形骨大翼側頭面を除く左側頭骨、大後頭孔周片付近を除く後頭骨が遺存している。その他に、右頬骨弓、左頬骨、鼻骨および頬骨付近を除く右上顎骨、鼻骨付近を除く左上顎骨が遺存している。後頭骨外後頭隆起は発達している。頭蓋縫合は、矢状縫合・冠状縫合は外板が開き、内板がほとんど閉鎖するが、ラムダ縫合は外板・内板とも開いている。

下顎骨は、左右下顎頭と右筋突起を除いて遺存している。また、歯牙も一部認められた。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

/	M <sup>2</sup>	M <sup>1</sup>	P <sup>2</sup>	P <sup>1</sup>	/	/	/	/	○	○	○	△	△	M <sup>1</sup>	M <sup>2</sup>	/
M <sub>3</sub>	○	×	×	○	○	○	/	/	/	○	C	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	×	×	○

歯牙咬耗度は橋原（1957）の3°以上である。

軀幹骨は、環椎、軸椎が遺存しており、他の頸椎片3、胸椎片1、椎骨片2以上も認められる。また、左右頰骨骨体部、肋骨片多数も遺存している。

上肢骨は、左右関節窩付近の肩甲骨、左上上腕骨骨体部、左右尺骨骨体部、左右橈骨骨体部が遺存している。上腕骨の三角筋粗面は発達している。

また、部位不明骨片が多数認められる。

【年齢・性別】

年齢は、歯牙咬耗度および頭蓋主縫合の癒合状態から熟年～老年と推定される。性別は、外後頭隆起が発達しており、上腕骨三角筋粗面も発達していることから男性と判定される。

28号甕棺人骨

【保存状態】

保存状態は不良である。部位不明の歯牙の破片のみが認められる。

【年齢・性別】

年齢・性別は判定可能な部位が遺存していないため不明である。

31号甕棺人骨

【保存状態】

保存状態は不良である。歯牙が一部認められた。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
/	/	/	(m <sub>2</sub> )	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/



【年齢・性別】

年齢は第1大臼歯が上顎・下顎ともに未萌出であり、右第2小臼歯は歯冠が6mm程度形成されているため、幼児と推定される。

67号嬰棺人骨

【保存状態】

保存状態は不良である。頭蓋骨は、矢状縫合を含む頭頂骨片が遺存している。

また、部位不明骨片が認められる。

【年齢・性別】

年齢・性別とも判定可能な部位が遺存していないため不明である。

74号嬰棺人骨

【保存状態】

保存状態は不良である。頭蓋骨は、ラムダ縫合・鱗状縫合を含む頭頂骨骨片、側頭骨鱗部の一部を除く右側頭骨、外耳孔および乳様突起周辺の左側頭骨、ラムダ縫合・後頭乳突縫合付近の後頭骨が遺存している。乳様突起の発達は強くない。左頬骨上顎縫合付近の左頬骨片、右側切歯から第一大臼歯付近の右上顎骨、右第二大臼歯付近の下顎骨も認められる。さらに、部位不明上顎骨片が認められる。

また、歯牙が一部認められた。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

$\begin{array}{cccccccc} / & / & M^1 & P^2 & P^1 & C & I^2 & I^1 \\ / & / & M_2 & M_1 & P_2 & / & / & / \end{array}$	$\begin{array}{cccc} \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \\ I^1 & I^2 & C & / \end{array}$	$\begin{array}{cccccccc} / & / & / & / & / & / & / & / \\ / & / & / & / & / & / & / & / \end{array}$
--	--	--

歯牙咬耗度は折原（1957）の3°である。

【年齢・性別】

年齢は歯牙咬耗度から熟年と推定される。性別は、乳様突起の発達が強くないため女性の可能性があると思われるが、断定はできない。

76号嬰棺人骨

【保存状態】

保存状態は不良である。歯牙が一部認められた。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

$\begin{array}{cccccccc} / & / & / & / & / & / & / & / \\ / & / & / & / & / & / & / & / \end{array}$	$\begin{array}{cccc} / & / & / & / \\ / & / & / & / \end{array}$	$\begin{array}{cccccccc} / & / & / & / & / & / & / & / \\ / & / & / & / & / & / & / & / \end{array}$
--	--	--

【年齢・性別】

年齢は、乳歯2本とも咬耗が認められないものの、歯冠は完全に形成されていることから、生後9ヶ月以上18ヶ月未満と推定される。

77号嬰棺人骨

【保存状態】

保存状態は不良である。部位不明の骨片のみが認められる。

【年齢・性別】

年齢・性別は判定可能な部位が遺存していないため不明である。

表1 頭蓋骨計測値 (mm)

項目	24号人骨		47号人骨		北部九州地方※	
	(♂)	(♀)	(♂)	(♀)	(♂)	(♀)
マクシムム 頭蓋最大長	177	186	183.7	177.0		
1 頭蓋最大幅	—	142	142.4	138.4		
8 頭蓋幅示数	—	76	77.7	78.1		
8/1 最小前頭幅	—	92	96.1	93.0		
9 両耳幅	—	127	—	—		
11 最大後頭幅	100	108	—	—		
12 頭蓋水平周	(508)	516	529.2	512.5		
23 横弧長	—	313	316.8	305.0		
24 正中矢状弧長	361	380	377.7	364.8		
25 正中矢状弧長	124	131	—	—		
26 正中前頭弧長	120	126	—	—		
27 正中矢状後頭弧長	—	123	—	—		
28 正中前頭弧長	108	118	—	—		
29 正中頭長弧長	108	111	—	—		
30 正中矢状後頭弧長	98	103	—	—		
31 顔長	—	184	100.4	96.2		
40 上顔幅	(102)	102	—	—		
43 両眼窩幅	(96)	95	—	—		
44 頬骨弓幅	(140)	—	140.0	131.3		
45 中顔幅	(104)	(98)	104.7	99.8		
46 顔高	—	125	123.8	116.3		
47 上顔高	—	75	74.8	70.1		
48 顔示数 (V)	—	(127.5)	118.4	116.7		
47/46 上顔示数 (V)	—	(76.5)	71.5	70.2		
48/46 眼窩幅	(左)40(右)40	(左)40(右)40	(左)43.2	(左)41.6		
51 眼窩高	(左)34(右)34	(左)34(右)34	(左)34.5	(左)34.1		
52 鼻幅	—	20	27.1	26.6		
54 上顎歯槽長	—	49	—	—		
60 上顎歯槽幅	—	72	—	—		
61 下顎頭間幅	—	(126)	132.9	126.8		
65 下顎角幅	104	104	108.4	100.4		
66 下顎長	83	75	75.1	72.5		
68 下顎骨長	—	81	—	—		
68(1) オトガイ高	—	36	35.7	32.3		
69 下顎体厚	(左)12(右)12	(左)15(右)15	—	—		
69(3) 下顎枝高	—	(左)64(右)64	(左)64.5	(左)59.2		
70 下顎頭高	—	(左)53(右)53	—	—		
70a 下顎枝幅	(左)35(右)35	(左)31(右)31	(左)37.4	(左)35.3		
71 最小下顎枝幅	(左)34(右)34	(左)31(右)31	—	—		
下顎枝示数	(左)1(右)1	(左)48.4(右)48.4	(左)59.7	(左)61.0		
齒槽側面角	—	830	—	—		

※北部九州地方に関しては中橋・永井1989を参照

## 83号覆棺人骨

### 【保存状態】

保存状態は不良である。頭蓋骨は、冠状縫合を含む前頭骨片、冠状縫合・矢状縫合を含む左右頭頂骨片が遺存している。矢状縫合・冠状縫合の残存部位は、外板が開放し、内板は閉じている。その他に、部位不明頭蓋骨片が多数認められる。

また、右上顎大臼歯の破片と部位不明の歯牙破片が多数認められた。

### 【年齢・性別】

年齢は頭蓋縫合の状態から成年と推定される。性別は判定可能な部位が遺存していないため不明である。

## 4. 形質

全体的に人骨の保存が不良であったため、頭蓋計測が行えたのはわずか2体のみであり、四肢骨の計測を含めても4体にとどまった。計測値を表1～7に示す。

頭蓋計測値が得られたのは男女1体ずつであった。まず、24号人骨(男性)は、表1のように諸計測値はほぼ北部九州弥生人(中橋・永井1989)と大差ないものであった。とくに中顔幅・頬骨弓幅や眼窩の幅・高はほぼ北部九州弥生人の値に等しく、想定される上顔高も同様であるとの印象である。したがって、24号人骨は平均的な北部九州弥生人の顔面であったといえよう。

47号の女性は、頭長漸示数は76の中頭型で、上顔高は平均的であるものの中顔幅が小さいため上顔示数(V)は76.5と大きくなっている。つまり、北部九州弥生人の中でも高い顔の持ち主であったといえよう。眼窩についても幅が狭く相対的に高い眼窩になっている。

表2 上腕骨計測表 (mm)

上腕骨計測 表(mm)	項目	18号人骨(♂)		24号人骨(♂)		北部九州地方※	
		左	右	左	右	(♂)左	(♀)左
中央最大径	中央最大径	22.5	—	22.0	—	23.3	21.0
	中央最小径	19.0	—	17.5	—	17.4	15.3
マルチンNo.	骨体最小周	62.0	—	62.5	—	63.9	56.9
	5 中央周	69.0	—	68.0	—	67.8	60.7
	6 骨体断面示数	84.4	—	79.5	—	74.9	73.2

表3 尺骨計測表 (mm)

マルチンNo.	項目	18号人骨(♂)		24号人骨(♂)		北部九州地方※	
		左	右	左	右	(♂)左	(♀)左
3	骨体最小周	40.0	40.0	—	—	37.4	34.4
11	骨体矢状径	12.0	12.5	—	13.0	13.2	11.2
12	骨体横径	17.5	17.5	—	17.0	17.6	16.0
11/12	骨体横断面示数	68.5	71.4	—	76.4	75.4	70.4

表4 桃骨計測表 (mm)

マシチンNo.	項目	18号人骨(♂)		24号人骨(♂)		北部九州地方※	
		左	右	左	右	(♂)左	(♀)左
3	骨体最小周	44.0	-	42.0	-	43.1	37.9
4	骨体横径	16.0	-	16.0	-	17.2	15.7
4a	骨体中央横径	15.5	-	15.0	-	16.0	14.3
5	骨体矢状径	13.0	-	12.0	-	12.5	10.9
5a	骨体中央矢状径	12.5	-	12.0	-	12.6	10.8
5/4	骨体断面示数	81.2	-	75.0	-	72.6	69.3
5a/4a	骨体中央断面示数	80.6	-	80.0	-	78.6	75.7

表5 大腿骨計測表 (mm)

マシチンNo.	項目	4号人骨(♀)		18号人骨(♂)		北部九州地方※	
		左	右	左	右	(♂)左	(♀)左
6	骨体中央矢状径	28.0	-	29.0	29.5	29.7	25.7
7	骨体中央部横径	24.0	-	28.0	28.5	28.0	26.3
8	骨体中央周	-	-	91.0	92.0	90.8	81.5
6/7	骨体中央断面示数	-	-	103.5	103.5	106.4	98.3
9	骨体上横径	-	-	33.5	33.0	32.6	30.5
10	骨体上矢状径	-	-	26.0	26.5	26.2	23.2
10/9	上骨体断面指数	-	-	77.6	80.3	80.5	76.4

表6 脛骨計測表 (mm)

マシチンNo.	項目	4号人骨(♀)		18号人骨(♂)		北部九州地方※	
		左	右	左	右	(♂)左	(♀)左
8	中央最大径	-	-	30.0	-	32.0	27.0
8a	栄養孔位最大径	20.5	36.0	35.0	-	36.5	30.8
9	中央横径	19.9	19.0	22.5	-	22.9	20.4
9a	栄養孔位横径	-	21.5	25.5	-	25.3	22.3
10	骨体周	-	-	83.0	-	86.5	74.5
9/8	中央断面示数	-	-	75.0	-	72.2	75.7
9a/8a	栄養孔位断面示数	-	-	72.8	-	69.5	72.4

表7 腓骨計測表 (mm)

マシチンNo.	項目	18号人骨(♂)		北部九州地方※	
		左	右	(♂)左	(♀)左
2	中央最大径	-	16.0	17.0	14.7
3	中央最小径	-	9.5	11.6	9.8
4	中央周	-	43.0	47.2	40.7
3/2	骨体中央断面示数	-	59.3	68.3	67.3

※北部九州地方に関しては中橋・永井1989を参照

四肢骨については、いずれもおおむね平均的な値をとる。その中で、18号人骨（男性）は上腕骨三角筋粗面や大腿骨粗線の発達が弱く、それに比して脛骨ヒラメ筋線の発達が顕著である。これは、ヒラメ筋や腓腹筋など体のバランスをとる筋が発達していたことを示しており、労働形態としては農作業より船上の作業を想起させる。しかし、計測値からみると、上肢も下肢もいずれも平均的な値を示しており、下肢が突出して発達していた形跡はない。現代の漁民と農民の生体計測によって上下肢のバランスの差が指摘されているが、18号人骨はサイズにおいて差が出るほど顕著な上下肢の差ではなかったということになるだろう。

## 5. 考察

西新町10次調査において出土した人骨は、男女1体ずつの頭蓋計測値しか得られ無かったものの、形質的には平均的北部九州弥生人といえるものであった。ただ、この墓地においては特異な埋葬が認められたため、以下それらについて検討する。

まず、17号人骨と18号人骨の関係であるが、両者は合口成人棺の18号の頂上に小児棺に成人頭蓋骨を入れるというものであった。両者は同一墓坑内に納められたものであり、何らかの関係が考えられるべきなのはいうまでもない。そして、17号人骨が成年後半から熟年にかけての男性であり、18号人骨も男性で成年から熟年程度の年齢と推定された。したがって、年齢・性別ともに両者は同一個体である可能性を示している。

17号人骨（頭蓋骨）には環椎と軸椎がともなっていたが、18号人骨にはこの二つの頸椎は無く、それ以下の頸椎があるのみであった。したがって、両者の骨の重複はない。また、人骨の保存状態がいまひとつであったため17号人骨の環椎・軸椎と18号人骨のそれ以下の頸椎とを両断させることはできなかったが、これらの頸椎のサイズは同一個体のものとして違和感はない。さらに、17号人骨の外後頭隆起および上項線は、男性らしく一定の発達はするものの、顕著な発達というほどではなかった。つまり、この男性の背筋はそれほど発達していなかったわけである。そして、この傾向は18号人骨の三角筋粗面が発達しないこととも対応している。したがって、以上の所見から、17号人骨は18号人骨の頭蓋骨として大過ないと考える。

しかし、問題はそれだけではない。この埋葬は、頭を胴体から離断して別々に葬ってあるため、両者が同時に埋葬されたのかという問題がある。すなわち、頭を離断した後、胴体は埋葬され、頭だけが別の場所に晒されるなどした場合も考えられるのである。たしかに頭蓋骨にはネズミなどの齧歯類による咬み傷があり、どこかに晒されていた際のものであることも想起される。しかし、咬み傷が認められるのは後頭骨から頭蓋蓋にかけてであり、全体ではない。この部位は通常は墓棺の器壁に接するはずであるが、頭蓋骨は棺内で後方へと回転していたため、表に出ていた。また、18号人骨も全身に咬み傷があり、いずれも器壁に接しない部位に限られている。そして、他の人骨にも咬み傷が認められることから、これら齧歯類の咬み傷は埋葬後に棺内に入した齧歯類によってつけられた可能性が高い。さらに、下顎骨の位置からみて、顎関節にはまった状態から転落した状態であり、頭蓋骨もその位置から後方へと回転した状態である。したがって、17号人骨に納められた際には上顎と下顎は関節状態であり、咬合した状態であったと推定される。

このように、人骨の状態からみて、頭が一定の期間において後から埋葬された形跡はない。また、頭を離断したすぐ後に埋葬された場合も想定されようが、その場合にはモガリなどの期間を経て胴体も埋葬されると考えられるため、その意図があればモガリの期間を延長するなどの対応をしたと思われる。それに何より、18号人骨の頭部にあたる場所に17号人骨が覆かれており、棺の軸線も含む

されていることからみると、二つの棺は同時に埋められたと考えられる。

それでは、なぜ頭部を離断し別棺に埋葬する必要があったのであろうか。その理由として想定されるのは、①殺害され首を切られた、②処刑された、③儀礼、の場合であろう。このうち、①についてはそれを裏付けるような外傷の類は認められなかった。軸椎にも刀剣などの傷はなく、刀剣で首をはねられたとは考えられず、死亡後にナイフ状の刃物で掻き切ったと考えられる。戦闘や抗争によって頭を離断されたとなると、当然頭は持ち去られるが、それを奪還して埋葬する風習があったのなら、人骨の状態からみて死亡後程なくしてであり、上記の理由で考えにくい。逆に、敵対する集団の人物を殺害して埋葬した場合には、このような状況は成り立つが、頭と胴体を別棺で葬る必要性に問題が残り、考えにくい。

②の場合は、可能性としてはあろうが、処刑された罪人が共同墓地に葬られているのも奇異ではある。また、胴体の上肢の位置関係は通常の弥生人の埋葬姿勢で葬られていることを示しており、この点も罪人の処刑説とは合わないように思える。

③の場合は、断体儀礼の事例であるが、この儀礼自体は縄文時代から認められ、弥生時代でも上井ヶ浜遺跡で足を切った事例がある（山口埋文1986）。また、韓国においても頭を欠いた女性の事例があり、儀礼によるものと考えている（田中1999）。そして、断体儀礼の場合は、死者の死亡時の状況や生前の霊力を怖れて再生を阻止する目的であると考えられるため、離断した体の一部を埋葬しなかったり、別の位置に置いたりする。したがって、この事例のように別々の棺に納めて、永久に頭と胴体が再結合しないように企図することは、断体儀礼にはむしろふさわしいことである。

さて、17・18号人骨は、以上のように、同一個体であり、どちらかといえば儀礼によって切断され別棺に埋葬された可能性が高いと考えられたが、この他に24号人骨も注意すべき事例であろう。というのも、狭隘な壺棺に成人男性を取めること自体が特異であるばかりでなく、上半身のみであり、しかも軟部組織がかなり残った状態での改葬である点が特異である。通常の改葬は骨化が進行した後に行われるものであるため、特殊な事情があったものと思われる。

その事情として考えられることは、死亡してすぐにはこの墓地に埋葬できなかった事態が考えられる。すなわち、遠隔地で死亡したために遺体搬送に時間がかかって、その間に軟部組織の腐敗がある程度進行した場合である。しかし、それでも上半身と下半身を分離して埋葬するとは考えにくい。むしろ、洗骨等によって全身分を1棺にまとめることになるかと思われる。したがって、軟部組織がかなり残っている段階で上半身と下半身が自然に分離し、なおかつ下半身の改葬ができないような事態が背景にあると考えられる。そのような事態は、例えば水死体で一定期間以上水中にあった場合などが考えられようが、それを検証するデータはなく、過剰な推論は避け、特異な埋葬例であることを指摘するにとどめたい。

これらの他にも、74号人骨も頭のみ、もしくはその周辺を含むのみであった可能性があり、67号人骨も頭のみが遺存していて、頭のみであった可能性がなくなる。つまり、この墓域の成人骨で全身が揃っていたことが確認されるのは4号と17号の2体のみの可能性もあるのである。このような状況は、この墓域が異常死をとげた人たちのものであった可能性を示唆するが、全体的に保存不良であるため、可能性を指摘するにとどめたい。

## 6. おわりに

西新町第10次調査によって出土した人骨は、保存状態が良くなく、形質が明らかなものは2体にとどまった。これらの計測値から、今回出土した人骨が男女とも平均的な北部九州弥生人の形質を有していたことを知り得た。

また、頭部を離断し、胴体と別棺に埋葬した事例が得られ、検討の結果、断体儀礼による可能性が最も高いと考えられた。

さらに、上半身のみ改葬事例も、軟部組織がかなり残った状態で下半身と分離した遺体を壙棺に収めるという特異な事例であることを指摘した。

これらの事例については、その背景を特定できたわけではなく、可能性の相対的な比較を行ったにすぎない。今後の事例の蓄積と、さらなる分析によってこれら再論を期したい。

最後に、本報告にあたり様々なご教示・ご助力を頂きました福岡市教育委員会屋山洋氏をはじめとする関係各位に感謝いたします。また、人骨調査・整理等でご協力いただいた九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座高久健二氏（当時、現埼玉大学）、金宰賢氏（当時、現東亜大学校）、および舟橋京子氏に感謝いたします。

### <参考文献>

- 中橋孝博・永井昌文 1989 「弥生人 1.形質」『弥生文化の研究』1 雄山閣  
橋原博, 1957: 日本人歯牙の咬耗に関する研究, 熊本医学会雑誌, 31. 補冊4: 607-656  
山口県埋蔵文化財センター, 1986: 土井ヶ浜遺跡第10次発掘調査概報, 豊北町教育委員会  
田中良之, 1999: 南江地域出土人骨について, 南江先史文化セミナー要旨, 東亜大学校博物館



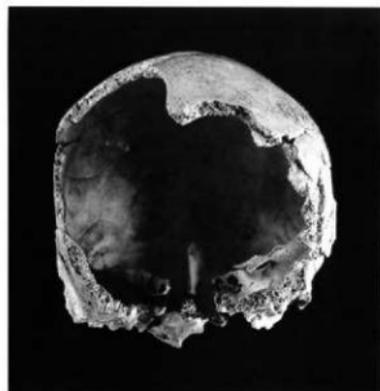
4号下肢骨



12号四肢骨



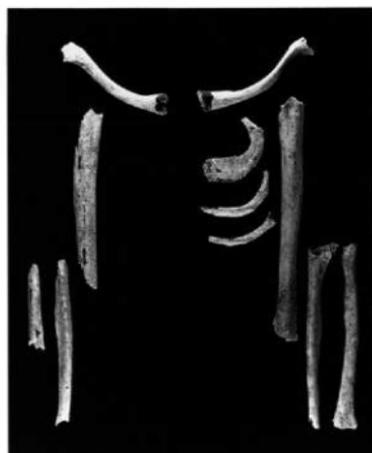
12号头盖骨 (正面观)



17号头盖骨 (正面观)



17号頭蓋骨 (側面観)



18号上肢骨

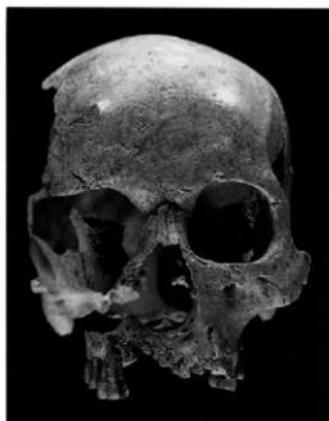


17号・18号椎骨



18号下肢骨

出土人骨



24号頭蓋骨 (正面観)



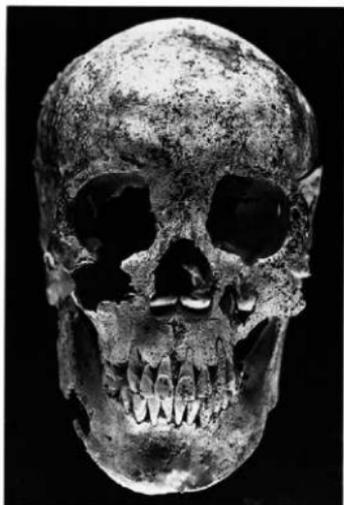
24号下顎骨



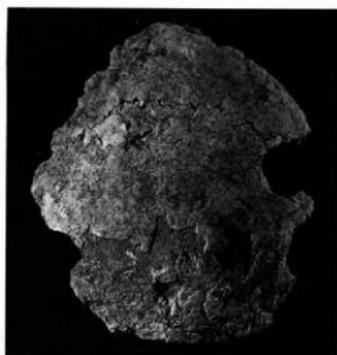
24号頭蓋骨 (側面観)



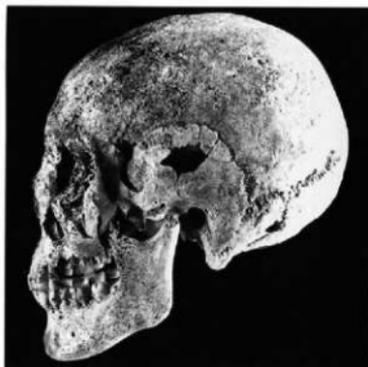
24号上肢骨



47号頭蓋骨（正面観）



83号頭蓋骨

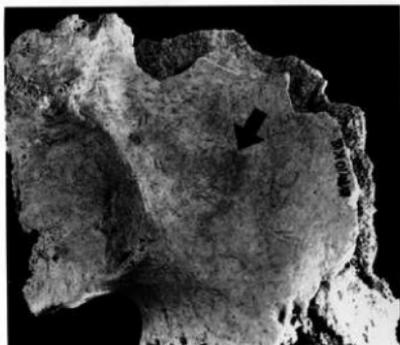


47号頭蓋骨（側面観）

出土人骨



17号頭蓋骨 (頭蓋底)



18号左寛骨 (正面観)



18号右前腕 (背面観)



47号頭蓋骨 (側面観)

出土人骨に見られるげっ歯類の噛み傷



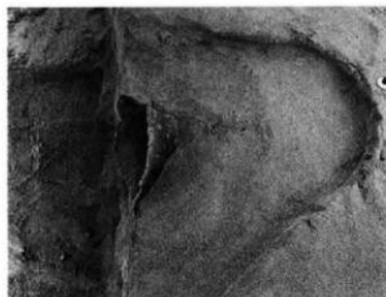
(1) 調査区北側全体図 (東から)



(2) ST004 (西から)



(3) ST008



(4) ST009 (南から)



(5) ST011 (東から)



(1) ST012



(2) ST013.ST014 (手前) 北から



(3) ST016 (東から)



(4) ST019 (北から)



(5) ST017.ST018 (北東から)



(1) ST020 (南から)



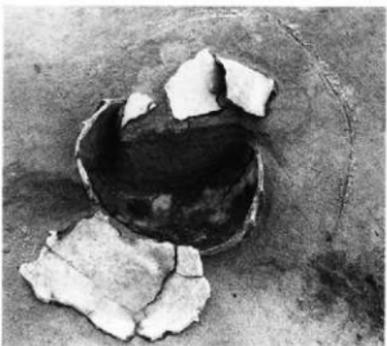
(2) ST024 (南から)



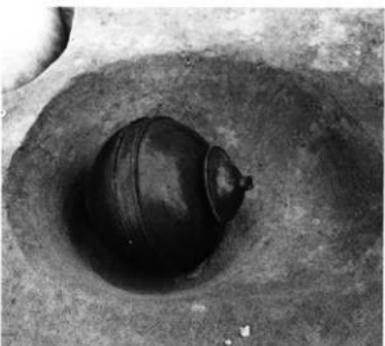
(3) ST026 (北から)



(4) ST028 (西から)



(5) ST029 (東から)



(6) ST030 (南東から)



(1) ST031 (東から)



(2) ST032 (南東から)



(3) ST033 (東から)



(4) ST034



(5) ST038 (南から)



(6) ST041 (北から)



(1) ST047



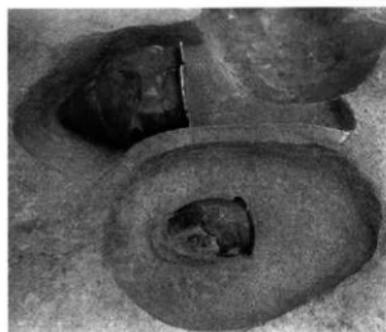
(2) ST048



(3) ST054 (南から)



(4) ST054



(5) ST059.ST060 (西から)



(6) ST062 (西から)



(1) 甕棺覆土土層



(2) ST073 (北から)



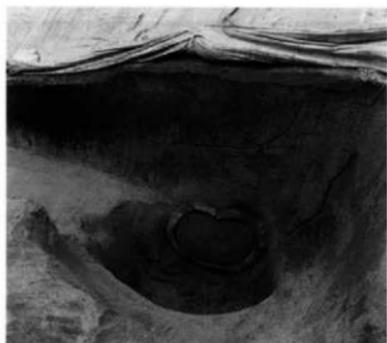
(3) ST076 (北から)



(4) ST079 (北東から)



(5) ST082 (東から)



(6) ST083



(1) ST027 (西から)



(2) ST074 (南から)



(3) ST077 (北西から)



(4) 北側墓棺群 (南から)



(5) ST004 人骨出土状況



(6) ST012 人骨出土状況 (北から)



(1) ST012 人骨



(2) ST012 人骨出土状况



(3) ST017 頭骨出土状况



(4) ST017



(5) ST018 人骨出土状况



(6) ST018 人骨出土状况



(1) ST018 人骨出土状況



(2) ST018 人骨出土状況



(3) ST024



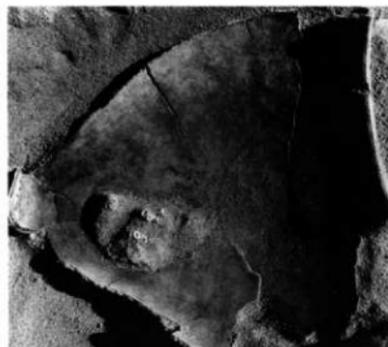
(4) ST024 (北から)



(5) ST047



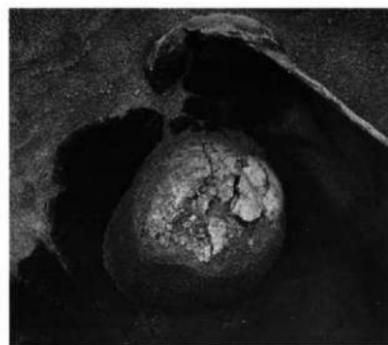
(6) ST047 出土人骨



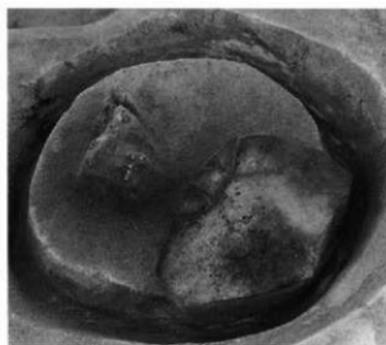
(1) ST060 人骨出土状況 (西から)



(2) ST067 人骨 (東から)



(3) ST067



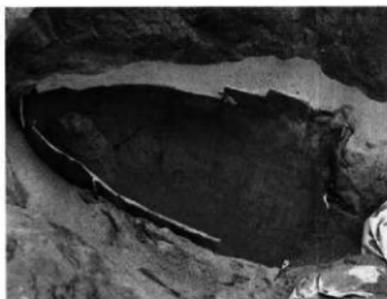
(4) ST074



(5) ST074



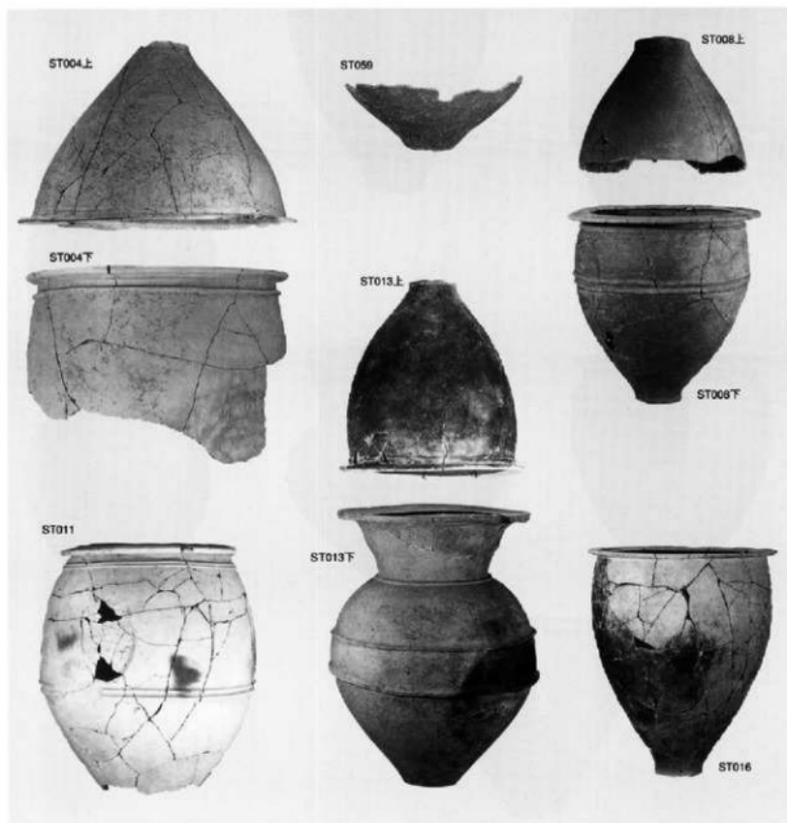
(6) ST076 (北から)

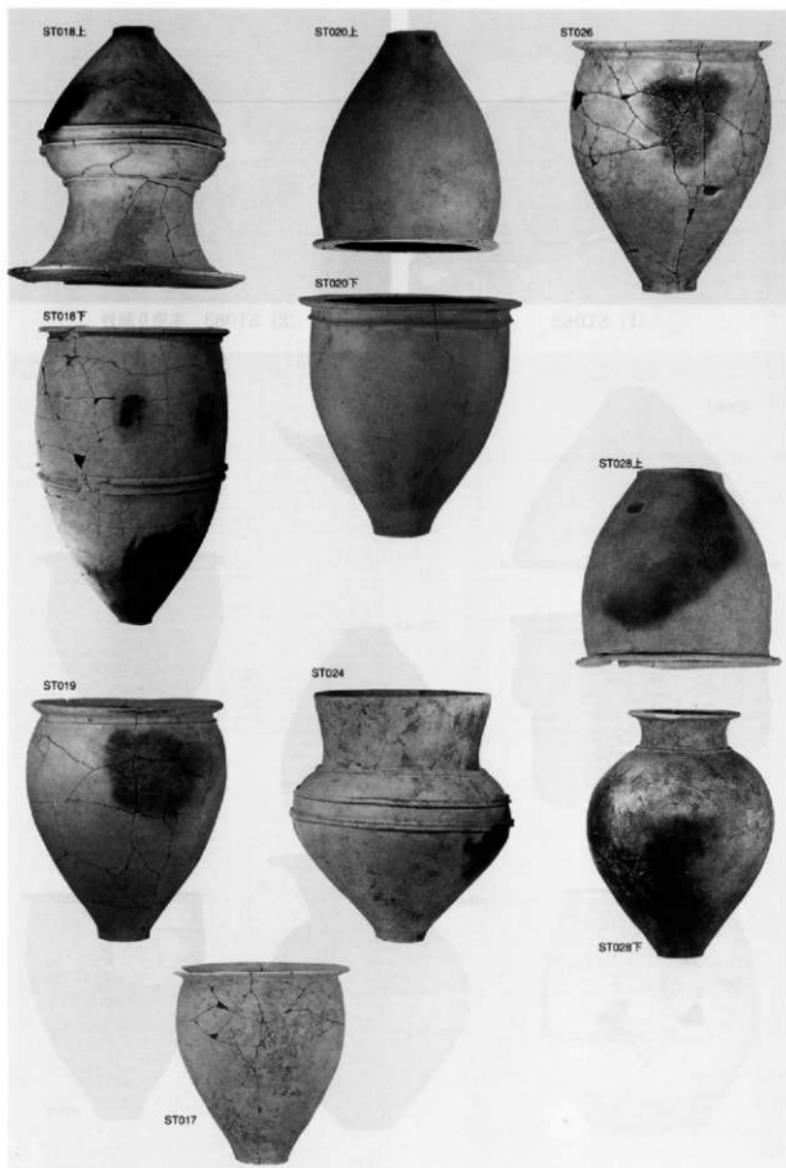


(1) ST083



(2) ST083 朱塗り頭骨





ST029上



ST031上



ST034上



ST029F



ST031F



ST034F0



ST030上



ST030F



ST032上



ST041上

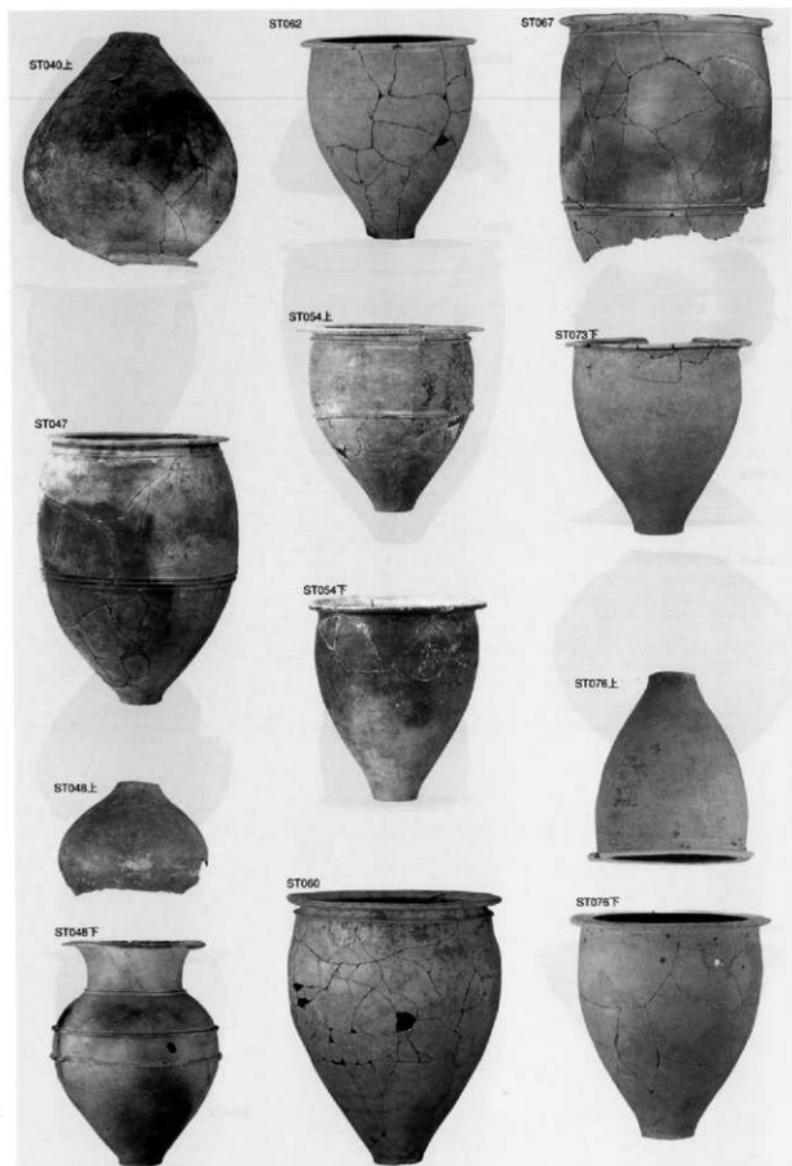


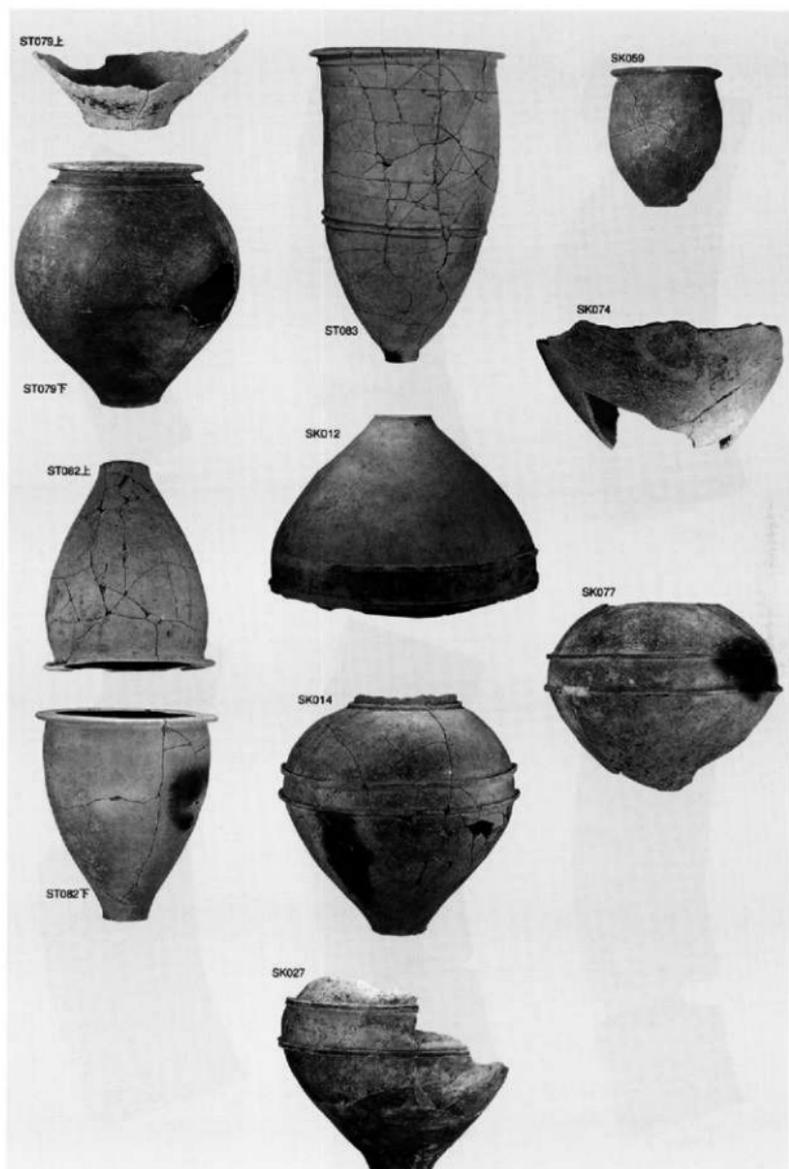
ST033

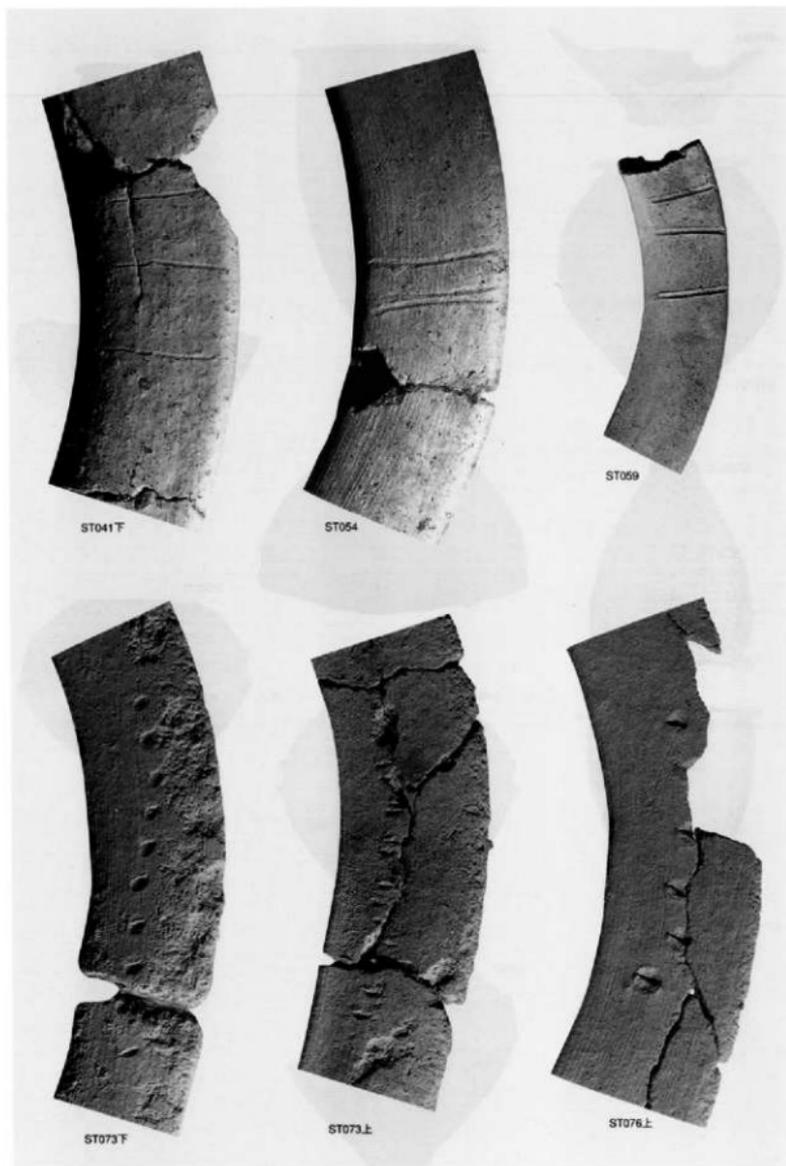


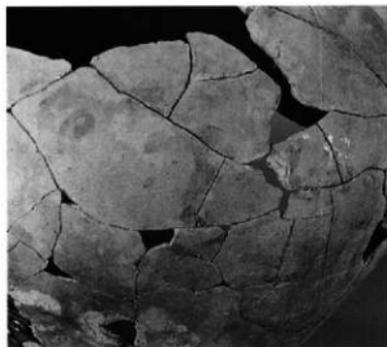
ST041F











(1) ST041 上 赤色顔料付着状況



(2) ST067 赤色顔料付着状況



(3) SC023 (南から)



(4) SC037 (東から)



(5) SC038 (南から)



(6) SC061



(1) SC078 (西から)



(2) SK053 土層 (北から)



(3) SK066 土層 (西から)



(4) SK036 土層 (北東から)



(5) SK072 (西から)



(6) SE003 完掘

---

## 西新町遺跡 7

—第10次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第683集

2001年3月30日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 三栄印刷株式会社  
福岡市博多区千代1丁目1番6号

---